

関西大学 地域連携 事例集

Vol.2
2015

はじめに

関西大学地域連携センターは、地域との連携に関する本学の窓口としての役割を果たすと同時に、地域連携に関するノウハウの蓄積、連携活動の具体化を通じて、大学の使命の一つである「社会貢献」を推進することを目的として2005年4月に設置されました。

近年、都市再生、地域活性化を図るため、大学に対する地方自治体等の協力要請が多様化しています。関西大学では、地域社会の活性化が大学の活性化のためには必要不可欠であるという認識のもと、地域社会のさまざまな要望に応え、地域社会への連携協力を推進しています。また、研究成果を地域に還元するだけでなく、地域の課題収集に基づく新たな研究テーマ設定や地域をフィールドとした教育プログラム構築が、地域と大学の持続的発展に寄与するものと考えています。

さらに、過去に蓄積された多くの地域連携事例を集約し検証することにより、一層効果的で実現性の高い事業を展開していくことが重要と考えています。

以上の考え方を基本に、大学が地方公共団体や企業等と連携して地域活性化を進めるきっかけとなることをねらいとして、本学教育職員の活動事例紹介を中心にした「関西大学地域連携事例集」を発行いたします。

関西大学地域連携センター長
西村 枝美

関西大学地域連携ポリシー

- 1 自治体などを介して、地域社会と本学との教育研究の協働を実現することを通じて、地域社会の課題を解決することを目的とする。
- 2 地域連携を活発化することで、本学の教育研究活動の高度化を促進する。
- 3 持続的な事業の展開を実現するとともに、教育研究に関わる連携事業の成果を蓄積する。
- 4 地元大阪・関西地区において、長年にわたり教育研究活動を積み重ねる本学の地域性を発揮する。
- 5 総合大学としての強みを生かし、多様な考え方や価値観から生じる課題を有する、地域社会のニーズに対応する。
- 6 関西大学をハブとして、地域社会からグローバル社会における多様な主体間の連携を創造し、高等教育研究機関としての責を果たす。

目次

はじめに

事例一覧 2

連携事例 6

地域連携センターの位置づけ 162

関西大学との地域連携に関するQ & A 162

関西大学 学部・研究科一覧 163

事例掲載教員索引 164

千里山キャンパスのご案内・お問合せ先 166



事例一覧

事 例	ページ	総合政策	安全・安心	人材育成	都市デザイン	環境・アセットマネジメント	福祉・人権	教育	文化・スポーツ振興	産業振興	健康・医療	その他
1. 地域における小学校と連携した実習 ～模擬保護者会を通じて～	6											
2. 住吉祭神輿渡御の記録作成調査プロジェクト	8★											
3. 能勢の文化遺産・再発見	10											
4. 「ニュースクール」プロジェクト ～伝統野菜「吹田くわい」とかかわる子どもたちの創造活動～	12											
5. 明日香村内史跡の再現CGアニメーション作成プロジェクト	14											
6. 学校図書館へ本を「贈ろう」プロジェクト：Books for You	16											etc.
7. 図書館支援プロジェクト ～英語で絵本を楽しもう！～	18★											etc.
8. 交通まちづくり	20											etc.
9. 地域商業・産業振興、まちづくり、中心市街地活性化等に関する研究調査および研究発表（ゼミナール活動）	22											
10. 自治体が直面する経済政策上の課題に関する研究（ゼミナール活動）	24											
11. 環境意識向上に向けた市民目線からの情報発信	26											
12. 家業の事業承継をサポートする講義	28											
13. JR大阪駅周辺施設の活性化プロジェクト	30★											
14. 地域の有力な中小企業の課題を解決	32											
15. 地域の生活文化を見つめ人生を丸ごと記録する「聞き書き」	34											
16. 学生提案科目 「関大生の私にできること ～被災地（大槌町）に向き合う～」	36											
17. 高齢者の意思決定支援制度を構築する開放型経済実験拠点の形成	38★											
18. 「ながくて幸せのモノサシづくり」～市民・行政協働のまちづくり～	40											
19. サステイナブルな地域社会を支えるしくみづくりとその支援	42											
20. 社会的信頼システム創生センター（STEP） ～違法駐輪排除実験～	44★											

★ は、「vol.2」に初めて掲載される事例です

事 例	ページ	総合政策	安全・安心	人材育成	都市デザイン	環境・アセットマネジメント	福祉・人権	教育	文化・スポーツ振興	産業振興	健康・医療	その他
21. 社会的信頼システム創生センター（STEP） ～天満の名水復活～	46★											
22. 地域文化・芸術資源を可視化し、地域の結びつきを創生する	48★											
23. 関大前ラボラトリ「まち・かん114（いいよ!）」	50★											
24. 池田市細河地区 地域産業の発見と発信	52★											
25. 「環境先進都市いけだ」を目指した小学校出前授業プロジェクト	54											
26. 京都伏見 日本酒振興プロジェクト	56★											
27. 東日本大震災避難者とふるさとをつなぐ活動 ～歌や運動、遊びの交流事業を通して～	58★											
28. コミュニティFMの番組づくりへの参加	60											
29. 小学校英語指導のための教員研修システム構築	62★											
30. 英語絵本の読み聞かせプロジェクト	64											
31. 市民による環境政策研究への支援 ～千里リサイクルプラザ主担研究員・評議員として～	66★											
32. 市民の健康増進と競技力向上のためのスポーツ教室 ～スポーツ科学の体現を目指して～	68★											
33. スポーツ推進審議会の運営	70											
34. 「関西ワールドマスタースゲームズ2021」を盛り上げるプロモーション活動 ～インターカレッジコンペティションへの企画プレゼンテーションを通して～	72★											
35. 身体表現 / ダンス・ワークショップ	74											
36. 堺エコロジー大学連携 熊野本宮子どもエコツアー	76											
37. 楽しいんやさかい 大和川水辺の楽校	78											
38. 地域で子育てを支えよう ～子どもと親が楽しめるあそびの伝承～	80											
39. 高槻市と関西大学とのポスター協働制作事業	82★											
40. 小児科プロジェクト	84											

事 例	ページ	総合政策	安全・安心	人材育成	都市デザイン	環境・アセットマネジメント	福祉・人権	教育	文化・スポーツ振興	産業振興	健康・医療	その他
41. 生涯学習支援プロジェクト	86★											
42. 限界集落フィールドワーク① ～雪かきや祭りの体験を通して～	88											
43. 限界集落フィールドワーク② ～北山友禅菊の復活～	90★											
44. 情報科サポートプロジェクト	92											
45. ICT活用授業デザインワークショップ	94											
46. 卓球競技へのレーティング導入 ～年齢・性別・身体的能力に捉われない大会を目指して～	96★											
47. 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査	98★											
48. オリックス・バファローズ観客動向調査研究2013	100											
49. オリックス・バファローズ観客動向調査研究2014	102★											
50. 堺市と関西大学との地域連携事業 堺市の文化資本を活用した地域活性化に関するプロジェクト	104											
51. メディアアート作品と地図アプリで堺の町屋の魅力を発信 ～堺市立町家歴史館・山口家住宅「Art Media Design 展」～	106★											
52. 学生団体KUMC・社会安全学部生による防災・安全教育	108											
53. 間伐材や地場の木材を使用した木の塀による ブロック塀代替プロジェクト	110											
54. 老舗大国・日本の現状についての研究と外国への紹介	112★											
55. 防災学習施設と連携した「複層的な学び」の創出	114											
56. 地域の安心・安全を守る学生災害ボランティアチーム「社会安全隊」	116★											
57. 公共政策フォーラム2014 in 京丹後 ～学生による地域政策の提案～	118★											
58. 丹波豪雨災害における官民の災害対応調査	120★											
59. 遠心式攪拌機を利用した水質汚染対策の検証 ～東南アジアにおけるエビの養殖池への適用～	122★											
60. 東日本大震災被災地域の小学校への理科実験出張授業	124											

事 例	ページ	総合政策	安全・安心	人材育成	都市デザイン	環境・アセットマネジメント	福祉・人権	教育	文化・スポーツ振興	産業振興	健康・医療	その他
61. UR男山団地 男山中央センター商店街の空き店舗を活用したコミュニティ拠点 365日住民が気軽に集まれる場所「だんだんテラス」	126											
62. 一持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による 21世紀のふるさとづくり 農山村集落との交流型定住による故郷づくり	128											
63. 一多世代が交流でき、楽しく歳を重ね成長できるまちを目指して一 「南花台スマートエイジング・シティ」団地再生モデル事業 (愛称：咲っく南花台わくわくプロジェクト)	130											
64. 伝統繋ぐ愛宕祭り ～関大生による立山づくり～	132							 				
65. 市民の力で市民力を高める「吹田市市民協働学習センター」	134											etc.
66. 大城の住民と共に創る「スージグワー週末美術館」 ～大城まちかどギャラリー～	136											
67. 高齢化が進む橋梁の維持管理システムの高度化	138											
68. 東大阪橋梁維持管理研究会	140											
69. 人と自然が共生する海岸づくりを目指して	142											
70. 命を守る防災教育 ～水災害からの安全な避難を学ぶ～	144											
71. 国家戦略特区(兵庫県養父市:農業特区)における農業再生と 機能的食品の開発プロジェクト	146											
72. 先端技術と伝統技術のコラボレーション 和菓子店とのアスリート向け冷凍お餅の共同開発	148											
73. 産学連携による高齢者社会への貢献	150											
74. アイディアをデザインする ～地域・社会連携～	152											
75. 農作体験から学ぶ地域の営み・関西を学ぶ ～田植えから収穫、流通までの総合マネジメントと地域協働～	154											
76. 学生提案科目「地域の防災を考える」	156											
77. 池田市 商店街空き店舗活用事業「関関COLORS」	158											
78. 次代を担う若き中堅・中小企業経営者／後継者が学びあう場 “関西大学 次世代経営者塾”	160											

地域における小学校と連携した実習 ～模擬保護者会を通じて～

「小学校での学級運営サポート」と「大学での模擬保護者会」を主軸とした活動です。実習と授業をリンクさせる「往還型学習」を通じて教育現場支援と教育者育成の両立を目指します。



模擬保護者会の授業の様子①

活動の概要

目 的	小学校の学級運営サポート / 現場での学びを得ることによる教員志望者の学習の補充・深化・統合
連携メンバー および役割	吹田市内小学校教員・・・学級運営、学生指導 関西大学文学部教授 石井康博・・・学生指導、活動にあたっての各種調整 関西大学文学部学生・・・ボランティアでの学級運営補助
活動地域	大阪府吹田市内の複数の小学校
活動期間	2007年4月～（継続中）

連携の経緯

関西大学文学部に初等教育学専修が設置された初年度から本活動が開始。教育現場での実学的な学習を通じて学生の教育者としての能力を高めることを目指し、初等教育学専修の教員が一丸となって教育委員会や小学校等の調整を行った。

解決すべき課題

- (1) 小学校のサポート
- (2) 大学における教育現場に応じた教育プログラムの創出



大学の役割

大学の正課カリキュラム「学校参加とフィールドワークⅠ・Ⅱ」の一環として、大学1～2回生が主体となって展開する活動である。

本活動において、学生はそれぞれ吹田市内の小学校に赴き、学校で体験したことを報告し、討論し、課題解決の糸口を見つける。そこで週1回のスクールボランティア（学級運営サポート）にあたる。

本活動においては、大学の授業内で模擬保護者会として、学生が教員役と保護者役に分かれたロールプレイを行う。

このような教育現場と授業の両面からの学習活動を行う意図は、教育現場をサポートすることに加え、大学の中と外を「往還」することによって学生の学級運営能力を高めることにある。

学生は実際の教育現場で観察・分析した小学校教員の指導や判断を大学に持ち帰り、それを参考にしながら、模擬保護者会において、時には教員、時には保護者となり学級運営に関する模擬的な受け答えを行う。これは、教員になった際、どのような方針を掲げて児童および保護者と相対していくかのトレーニングに繋がっていく。

このように、教育者を目指す学生の学びの補充・深化・統合のために日々活動を続けている。

成果

- (1) 小学校における児童との信頼関係構築
- (2) 小学校からの活動報告書による各種意見

今後の展望

- (1) 往還型学習の効果検証

研究者の紹介



文学部 教授
石井 康博
(いしい やすひろ)

専門は教科教育（算数科教育）。小学校算数科で利用される具体物、子どものインフォーマルな知識、小学校入門期における子どもの数的活動について研究をしている。

住吉祭神輿渡御の記録作成調査プロジェクト

大阪の夏祭りの最後を飾る住吉祭のうち、住吉大社から堺市の宿院頓宮への神輿の「おわたり」について、堺市と住吉大社と連携して総合調査を行っています。



住吉大社・反橋での神輿振り

活動の概要

目的	堺市の歴史的風致としての住吉祭神輿渡御の歴史的・文化的価値の再発見と地域づくり
連携メンバー および役割	堺市文化観光局文化部文化財課・・・プロジェクトの統括・調整、資料・情報の提供、成果公開事業の共催 堺市地域文化遺産活性化実行委員会・・・事業の策定、成果出版物の刊行 住吉大社・・・資料・情報の提供・協力、成果公開事業の共催・協力 宿院頓宮・・・資料・情報の提供・協力 堺市博物館・・・資料・情報の提供・協力 堺市役所 / 堺市立町家歴史館山口家住宅 / 清学院・・・成果公開事業の会場提供 関西大学文学部教授 黒田一充・・・中世都市堺および住吉祭の調査・記録作成と成果の発信
活動地域	大阪府大阪市住吉区 / 大阪府堺市堺区
活動期間	2014年4月～（継続中）
費用	文化庁文化芸術振興費補助金「文化遺産を活かした地域活性化事業」 / 堺市と本学との地域連携事業助成

連携の経緯

堺市の「歴史的風致維持向上計画」として策定された「神輿渡御祭にみる歴史的風致」整備にあたり、文部科学省の助成事業として大阪の文化遺産研究の実績を有し、住吉大社とも協力関係にある関西大学大阪都市遺産研究センターとの連携によって事業を推進したいとする堺市文化観光局文化部文化財課および同市地域文化遺産活性化実行委員会からの要請による。

解決すべき課題

- (1) 中世都市以来の文化遺産を有する堺における地域アイデンティティの喪失
- (2) 堺市民全体での歴史・文化都市としての魅力の共有と未来への継承



山口家住宅でのパネル展①



堺市博物館での絵画資料調査

大学の役割

本プロジェクトは、堺市からの要請によって推進されているものであるが、都市景観の復元を学際的に目指した大阪都市遺産研究センターにとっては、祭礼景観による地域活性化という新たな試みであった。中世都市堺は、豊臣秀吉の大坂築城以前に生成された大阪の文化遺産の宝庫であるにもかかわらず、現在は大阪のベットタウン化が進み、その歴史・文化による地域のアイデンティティが希薄となりつつある。住吉大社から堺の宿院頓宮への神輿渡御は、16世紀の宣教師の記録にも登場し、堺の歴史と密接な関係をもつ祭礼であるが、近年では、神輿の担ぎ手が減少し、堺側にあつては、本学人間健康学部（堺キャンパス）の学生有志の参加によって維持されており、大学の地域貢献として地元では高く評価されている。本プロジェクトでは、これまで本格的な調査・研究がほとんどなされていない住吉祭の歴史を、特に堺とのつながりを中心に学問的に検証することを通じて、本学と堺市との新たな連携の進展と、海とともに歩んできた堺の人びとの信仰心の解明が期待される。

住吉祭は、7月の海の日の神輿洗神事から8月1日の神輿渡御・還御までの一連の神事からなる。2014年度には、基礎的調査としてすべての神事についての調査・記録作成を行い、その成果を報告書として刊行した。2015年度は、住吉祭を記録した文献資料や堺市博物館などに所蔵される絵画資料の調査、宿院頓宮での聞き取り調査を進めている。また、住吉祭期間中には、渡御行列が通過する地点にある堺市立町家歴史館山口家住宅で、2014年度の成果公開としてパネル展を開催した。いずれも堺市文化観光局と連携し、住吉大社・宿院頓宮から全面的な協力を得て推進されている。



山口家住宅でのパネル展②

成果

- (1) 祭礼景観の調査・研究による中世都市堺の歴史・文化の再発見
- (2) 住吉祭の総合調査による「なにわ・大阪」の文化遺産の解明
- (3) 対象地域（住吉大社・堺市）での成果の発信
- (4) 報告書などの冊子媒体での成果の発信

今後の展望

- (1) 各地の所蔵機関と連携した絵画・文献資料の調査
- (2) (1)の成果公開として堺市内での展覧会の開催
- (3) 住吉祭を核とする歴史・文化都市としての堺の地域活性化

研究者の紹介

文学部 教授
黒田 一充
(くろだ かずみつ)

専門は日本民俗学、庶民信仰史。とくに日本各地の祭祀や民俗信仰を中心に、儀礼や組織を歴史的な視点から研究している。祭りや民俗行事の現地調査とともに、地元の記録や文書類を使った分析を試みている。

現場の声

・堺市文化財担当者

専門の先生の指導のもと、祭礼調査や聞き取り調査に学生さんが参加し、歴史の掘り起こしをおこなうことで、住吉祭・神輿渡御の歴史の奥深さが注目され、まちづくりに活かそうという気運も生まれつつあります。

能勢の文化遺産・再発見

大阪府能勢町において、食文化や住文化、年中行事などの伝統文化に関する調査を実施し、その成果を活用したワークショップを実施しています。



古民家で地元の方々とともにいったワークショップの様子

活動の概要

目的	伝統文化を通して住民の愛郷心を高揚させ、地域づくりに貢献 / 学生たちの伝統文化の実際の学習
連携メンバー および役割	大阪府能勢町 地域住民・・・伝統文化に関する情報提供・ワークショップへの協力、参加 財団法人日本民家集落博物館学芸員・ボランティアの皆さん・・・ワークショップへの協力 関西大学文学部教授 森隆男・・・監修・調査・研究の指導。講座の講師・ワークショップなどへの参加 関西大学文学研究科大学院生 / 文学部学生・・・企画・調査・研究・講座の講師・ワークショップへの参加
活動地域	大阪府豊能郡能勢町
活動期間	2013年～（継続中）
費用	教員と学生の自己負担

連携の経緯

能勢町長と、伝統文化を活用した地域づくりの可能性について意見を交換し、まず教員と学生たちが年中行事や食・住文化について調査に取り掛かった。また食と住に関わる文化を体験的に学ぶために、地元の空き民家と日本民家集落博物館（大阪府豊中市）に移築されている能勢の民家において住民の方々とともにワークショップを行った。

解決すべき課題

- (1) 過疎化と高齢化が進む中で、地域の活力が衰退
- (2) 伝統文化の継承



移築民家で子どもたちと伝統食を再現



各戸を訪れるキツネガエリの習俗

大学の役割

能勢町で伝承されてきた伝統文化について調査・研究し、その特色を明らかにするとともに今後継承すべきものを提示する。

現在注目しているのは、毎年小正月に行なわれるキツネガエリの習俗である。若者たちがわらで作ったキツネをもって各家を訪問し災いを除くとともに新しい年の祝福を行うもので、現存するのは天王地区だけである。また秋に行われるイノコの行事でも、わらで作った獅子頭をもって各家を訪れ、キツネガエリの習俗と同様の目的で舞う。いずれの習俗も将来地域を支える若者たちが地域内の状況を把握するとともに、構成員の一人であることを認識する行事といえる。若者が減少して行事の継続が危機に瀕している今、これらの行事が地域づくりに重要であることを提言し、その存続に向けた方法も検討したい。

また住民と一緒に、空き民家を利用して当地の伝統食の再現を行い、試食するワークショップを行った。取り上げたのは、現地で入手できる食材を使用した「地産地消」の食文化であり、当地の豊かな食文化を再発見する機会になったといえる。

2015年2月、地元の浄るりシアターを会場に、これまでの調査・研究の成果を還元するため講座を実施した。当日は多くの住民の方が参加され、能勢に残る伝統文化の魅力を確認・共有する場になった。



調査・研究の成果発表の様子

成果

- (1) 住民が伝統文化の意義を再確認
- (2) 学生たちが伝統文化の現状を具体的に学び、理解を深めた

今後の展望

- (1) 学生たちの研究をすすめる上でのフィールドとして、さらに調査を実施
- (2) 研究成果を講座等により地元へ還元
- (3) 高齢化が進んだ地元との世代間の交流

研究者の紹介



文学部 教授
森 隆男
(もり たかお)

専門は住文化論。日本列島の住まいについて、外観・間取りの構成と配置・神や祖先の祭祀・日常と非日常における人の動線などの視点から分析し、住まいの意味を考察している。

現場の声

・地域住民の方

学生たちとのワークショップを通して、地元住民が気付かなかったことも教えられ、有意義な時間を共有できた。

・大学院生

伝統的民家の中に、便利なところと不便なところが併存している点を体感。フィールドワークを通して、「生きた文化」の魅力を発見することができました。

「ニュースクール^(※)」プロジェクト ～伝統野菜「吹田くわい」とかかわる子どもたちの創造活動～



小学生と関西大学文学部初等教育学専修の大学生が、地元伝統野菜「吹田くわい」の再生普及をめざし、生産農家、市役所、市民と協力し、学びあう活動に取り組んでいます。

吹田市イメージキャラクター「すいたん」とニュースクールの子どもたち

平野農園での吹田くわいの植え付け

※ニュースクール…吹田市立山手小学校の小学生と関西大学文学部初等教育学専修の大学生が、地域の伝統野菜「吹田くわい」をテーマに、1年間を通じたグループ学習や映像作品づくり、農業、調理の体験を通し、協働の学びをつくり出す社会連携プロジェクト

活動の概要

目的	学校外の地域社会に貢献する活動への参加を通し、子どもたちの自発性や創造性、社会性を培う学習を実践
連携メンバーおよび役割	吹田市立山手小学校…吹田くわい栽培による学習の主体 吹田くわい生産農家 平野紘一氏…くわい栽培の技術指導 吹田市役所地域経済振興室、広報課…くわい栽培のサポートおよび広報 奈良女子大学大学院・日本学術振興会特別研究員 富澤美千子氏…学習活動の企画およびサポート 関西大学文学部教授 山住勝広 / 文学部初等教育学専修学生…学習活動の企画およびサポート
活動地域	吹田市立山手小学校 (大阪府吹田市)
活動期間	2005年～(継続中)
費用	2005年～2009年度は文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」 / 2010年度以降は日本学術振興会「科学研究費助成事業」による補助金

連携の経緯

2005年度採択、文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」において、関西大学人間活動理論研究センターが、子どもたちの新たな放課後学習活動「ニュースクール」の実践開発を開始した。学習と日常生活を結びつけ、創造性を育むことを目的に、小学生にとって身近な「食」に着目し、地元の伝統野菜「吹田くわい」をテーマに選定した。また、吹田市立小学校4校に吹田くわいをテーマにした総合的な学習を導入するに至った。

解決すべき課題

- (1) 環境学習および食育の機会創出
- (2) 吹田市の伝統野菜「吹田くわい」の復活
- (3) 郷土の歴史・文化を学ぶ機会の創出
- (4) 創造性の育成

大学の役割

吹田市内の小学校において、地元伝統野菜「吹田くわい」をテーマに、「ニュースクール」と名づけた学習プログラムを展開。文学部初等教育学専修で小学校教員をめざす大学生が、毎週水曜日の放課後や休日、小学生の創造活動を支援することを通して、教員としての力量を形成する実習プログラムになっている。

学生が企画した学習コンテンツの一例は以下の通り。

- (1) 小学校内に設置した鉢でのくわい栽培（くわい生産農家・平野氏による技術指導）
- (2) iPad等を活用した映像制作（くわいに関するドキュメンタリーやドラマ等）
- (3) 「吹田まつり」でのパレードの実施（各家庭から持ち寄った牛乳パックなどを使った神輿を製作）
- (4) くわいを使ったレシピの考案および調理実習

上記のコンテンツは、「ニュースクール」が提唱する新たな学習方法の考え方にもとづいて展開されている。「ニュースクール」は、新たな生活のあり方の創造をめざし、学校の外に出て、より広い現実世界の多様な活動に参加し、新しいつながりや結びつきをつくり出す「拡張的な学習」を実践しようとするものであり、子どもたちの想像力と創造性を培うことを重視していることが特徴である。

成果

- (1) 吹田市内の一部小学校における「総合的な学習の時間」への採用
- (2) 子どもの郷土愛の醸成
- (3) 子どもの創造性の向上
- (4) 吹田くわいの知名度向上

今後の展望

- (1) 地域の特色を題材にした学習のモデルケース確立

現場の声

- ・上内さきほさん（吹田市立山手小学校5年生）

大学生や学校の友達と一緒に活動していて、とても楽しいです。紙ねんどやダンボールで吹田くわいを作るのが面白かったです。だから、ニュースクールが大好きです。

- ・高須はるな（関西大学文学部初等教育学専修4年生）

小学生と大学生が協力し創り出すニュースクールの中で、私は普段なら経験できない多くの学びを得ています。子ども達と共に自分自身も成長できる場であると思っています。



吹田まつりでの「くわいのみこし」パレード

研究者の紹介



文学部初等教育学専修 教授
山住 勝広
(やまずみ かつひろ)



奈良女子大学大学院博士後期課程院生
日本学術振興会特別研究員
富澤 美千子
(とみざわ みちこ)

子ども主体の小学校教育をテーマに、カリキュラムと授業、学習と成長・発達に関する研究に取り組んでいます。また、日本、フィンランド、アメリカの小学校教育に関する国際比較研究も進めています。

日本における「子どもの側に立つ教育」の歴史的系譜を、大正期の自由教育運動から今日の小学校教育まで辿っていく研究に取り組んでいます。また、吹田くわいをテーマにしたニュースクールと小学校での総合的な学習の実践開発を進めています。

明日香村内史跡の 再現CGアニメーション作成プロジェクト



明日香村内の史跡をCGアニメーションによって再現しました。

第3作「水落遺跡と水時計」のCG画像

活動の概要

目 的	明日香村の魅力を見える形で発信すること
連携メンバー および役割	奈良県明日香村…村内の各種調整、CGおよび副読本作成における監修作業の協力 東京大学生産技術研究所 池内・大石研究室…各種データの提供 株式会社アスカラボ（池内克史研究室発ベンチャー企業）…CG作成 関西大学文学部教授 米田文孝 / 関西大学考古学研究室…CGおよび副読本作成における監修と執筆
活動地域	奈良県明日香村 / 関西大学千里山キャンパス
活動期間	2010年1月1日～2011年3月31日（第1作） 2011年4月1日～2013年3月31日（第2作） 2013年5月27日～2015年4月30日（第3作） 2015年7月1日～2017年3月31日（第4作 ※作成中）
費 用	明日香村からの受託研究費

連携の経緯

関西大学と明日香村は、1972年（昭和47年）の高松塚古墳壁画発見をはじめ、考古学を中心としたさまざまな連携を進めてきた。その実績を基盤として、明日香村より小学校教材および観光ツールとして活用することを目的として、明日香村内の史跡再現CGアニメーション作成について依頼があり、本プロジェクトが始動した。

解決すべき課題

- (1) 村内の魅力を目に見える形で発信すること



第2作「飛鳥寺と飛鳥大仏」のCG画像



作成にあたっての連携メンバー打合せの様子



青龍



朱雀



白虎



玄武

古代の守り神（四神）をモチーフにしたオリジナルキャラクター（考古学研究室の学生が作成）

大学の役割

このプロジェクトは明日香村の要望に基づいて設定されたテーマに応じて、明日香村内の史跡を再現するCGアニメーションおよび副読本を作成することを目的としている。

CGアニメーションは明日香村との共同監修の下、東京大学生産技術研究所の池内・大石研究室からの各種3次元データ提供協力、および同研究室発ベンチャー企業「アスカラボ」へのCGアニメーション作成業務委託によって制作された。

また、CGアニメーションに併せ、各方面の協力を得て、考古学研究室の学生が主体となり、小学校教員用の解説副読本も作成した。

これらの成果として、第1作「石舞台古墳～巨大古墳築造の謎～」(2009～2010年度)、第2作「飛鳥寺と飛鳥大仏」(2011～2012年度)、第3作「水落遺跡と水時計」(2013～2015年度)が完成。明日香村より、畿内約3,000校の小学校に教材として無償配布された。

2015年度からは第4作「飛鳥京跡CGアニメーション」の作成に取り組んでいる。完成したCGアニメーションは、明日香村HPや明日香村内の各種施設において閲覧可能。

今後の展望

- (1) 教育現場における使用実態調査
- (2) 小学校教材としての問題点や提案のフィードバック
- (3) 児童の理解度調査による成果品の修正

現場の声

- ・CGアニメーションおよび副読本作成に携わった学生

明日香村にある魅力ある遺跡についてどのような説明をすれば分かりやすく、興味を持てる内容になるのか思考錯誤しながら作りました。特に専門用語をかみ砕いた言葉で説明することが大変でしたが、小学生がこの教材を使って歴史や遺跡に興味を持ってもらえたらうれしいです。

研究者の紹介



文学部 教授
米田 文孝
(よねだ ふみたか)

仏教が日本に来た道をもとめて約25年、仏教のはじまりの地であるインド共和国で調査を行ってきました。その後、ユーラシア大陸を東にすすみ、仏教が日本で最初におこった奈良県の飛鳥の地にたどり着きました。倭国・日本国の都であった飛鳥の姿を一度目にしたいと夢んでいます。

学校図書館へ本を「贈ろう」プロジェクト： Books for You



本を贈るパッケージ

活動の概要

目的	学校図書館支援 / こどもたちの学習環境支援 / 出版文化・活字文化振興支援
連携メンバー および役割	東北地方の学校図書館（小中学校）・・・学校図書館整備 紀伊國屋書店・・・出版情報の収集・提供 NPOあくせす・ぽいんと / 関西大学文学部教授 渡邊智山 ・・・児童書の収集・書誌のデータベース化・児童書の寄贈
活動地域	関西大学千里山キャンパス（文学部渡邊智山研究室）
活動期間	2011年4月23日～（継続中）
費用	外部資金（例：2013年度公益財団法人JR西日本あしん社会財団活動補助金） / 支援者による個人献金

連携の経緯

本が持つ最大の魅力は、その圧倒的な世界観である。2011年3月11日。東日本大震災により多くの人々が、その世界に触れる機会を失うこととなった。特に未来を創っていく「こどもたち」にとっては大きな問題であり、学校教育環境の復興も含め、こどもたちの学習環境を充実させることは緊急の課題である。NPOあくせす・ぽいんとは、「復興」に寄与するべく、学校図書館を支援するプロジェクトを立ち上げた。

解決すべき課題

- (1) 東日本大震災による学校教育環境の復興
- (2) 学校図書館における運営補助金等の不足
- (3) 学校図書館用参考図書及び児童書の不足
- (4) 「子どもの貧困」等による教育環境への支援

Books for Youプロジェクト



ご支援者様

大学の役割

「学校図書館へ本を『贈ろう』プロジェクト：Books for You」は、全国から児童書（絵本を除く）を募り、必要とされる児童書のみを学校図書館へ寄贈する活動である。児童書を希望する学校図書館は、NPOあくせす・ほいんとが提供するデータベースから児童書をチェックし、メール等でリクエストすることで、あくせす・ほいんととの連携が始まる。主たる活動は、構成メンバーである関西大学の学生（大学院含む全学部）と文学部の教員有志、および民間企業（紀伊國屋書店）が担い、「地域」「民間」「大学」との関係性を前提に、児童書の収集・管理・提供を行っている。児童書を寄贈したい全国の人々と、児童書を必要とする学校図書館との間に媒介するメディエーターとしての役割（情報を媒介する図書館的な機能）を果たすのが、NPOあくせす・ほいんととの活動である（プロジェクトイメージ図参照）。

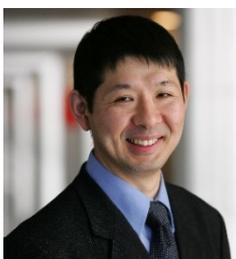
成果

- (1) 岩手／宮城／福島の学校図書館への児童書寄贈
- (2) 福島スタディツアーの実施（2013年）
- (3) 東日本大震災関連シンポジウムの参加およびポスターセッション
- (4) 朝日新聞掲載（2014）による広報活動の展開

今後の展望

- (1) 寄贈図書（児童書）の継続的収集および広報活動
- (2) 外部資金獲得のための諸活動
- (3) プロジェクト継続のためのイベントの実施：
英語絵本の読み聞かせ・アクティビティの企画
- (4) 学生ボランティアの持続的確保

研究者の紹介



文学部 教授
渡邊 智山
(わたなべ としたか)

専門は、図書館情報学。図書館における情報通信技術の活用、および図書館サービスの在り方について、図書館の社会的使命を基本に考察している。

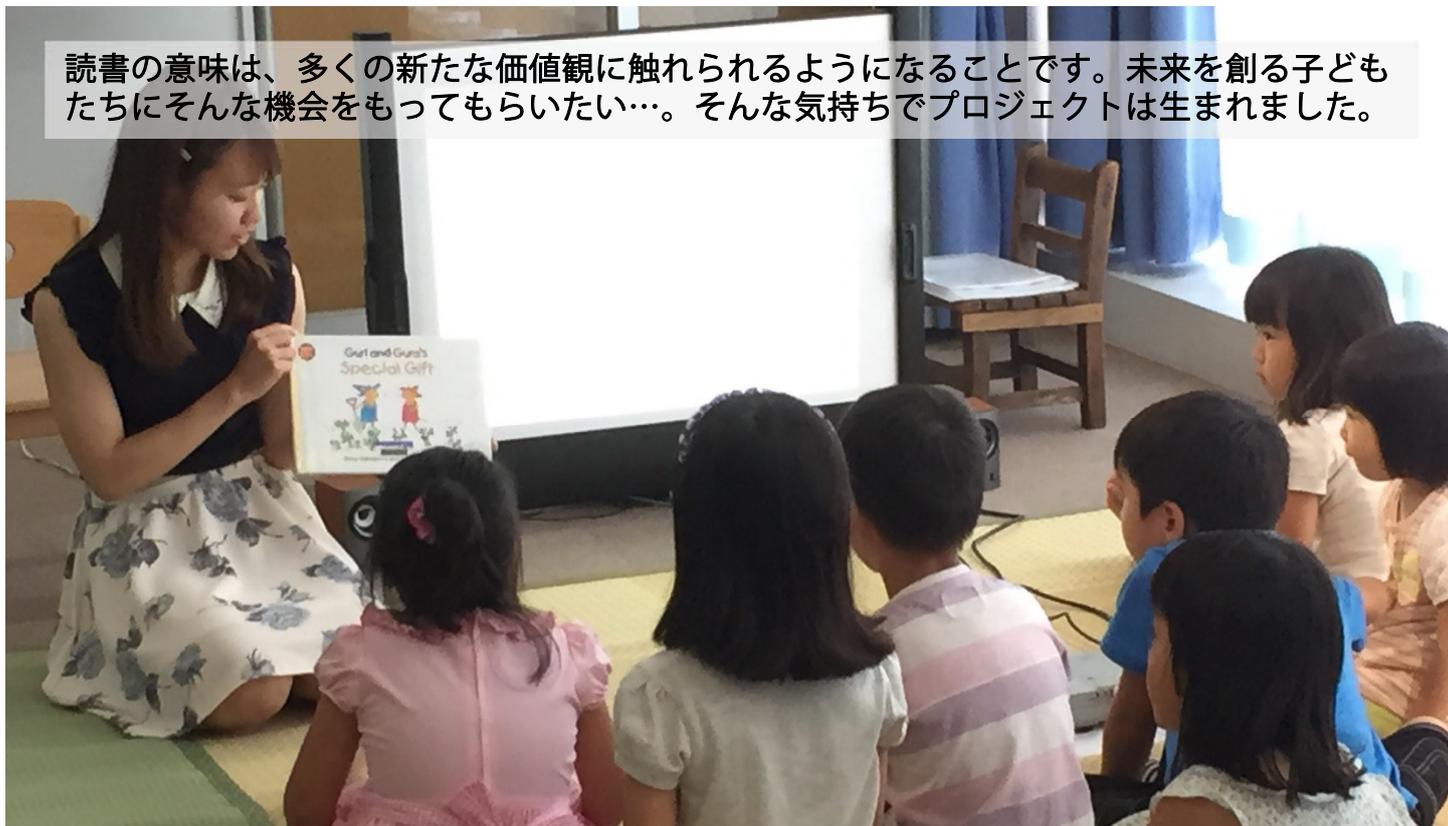
あくせす・ほいんと
本を寄贈して下さい。

<http://www.v-accesspoint.org/>
〒大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学文学部 渡邊智山研究室内
.090-1099-9365 / v.accesspoint@gmail.com / @v_accesspoint
私たちは、図書館を支援するボランティア団体です。(^^)☆

NPO

図書館支援プロジェクト ～英語で絵本を楽しもう！～

読書の意味は、多くの新たな価値観に触れられるようになることです。未来を創る子どもたちにそんな機会をもってもらいたい…。そんな気持ちでプロジェクトは生まれました。



「英語で絵本を楽しもう！」のようす①

活動の概要

目 的	図書館活動支援 / 出版文化・読書推進支援 / 東日本支援活動のキャンペーン
連携メンバー	吹田市立千里図書館 NPOあくせす・ぼいんと 関西大学外国語学部教授 石原敏子 / 関西大学文学部教授 渡邊智山
活動地域	大阪府吹田市および周辺自治体
活動期間	2012年4月～(継続中)

連携の経緯

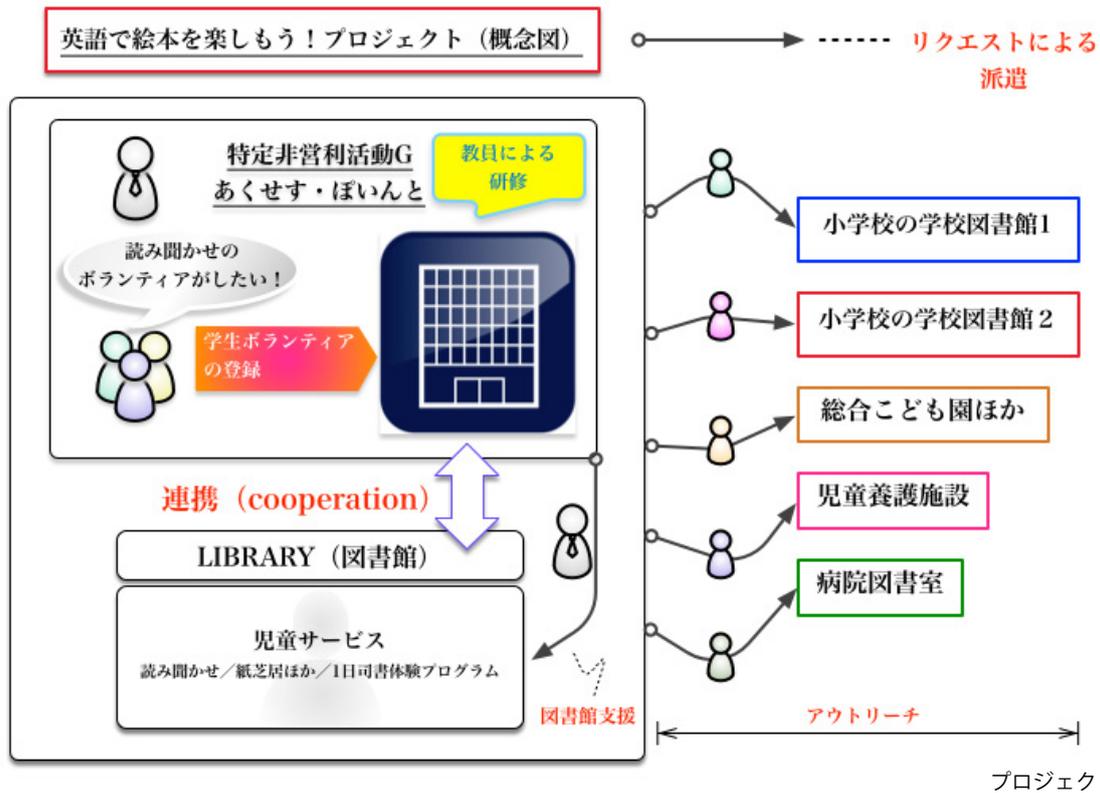
生涯学習のスタートラインは、多くの「本」に親しむことである。発達心理学の分野では、絵本の読み聞かせが、子ども自身の読書の取り組み方に影響を与えるだけでなく、子ども自身を取り巻く「世界」を学ばせられるという教育的効果が示されている。NPOあくせす・ぼいんとでは、図書館を支援するという理念のもと、全国各地で行われている図書館での読み聞かせの活動を踏まえ、「英語で」読み聞かせを行うというプロジェクトを2012年4月より実施することとなった。

(本プロジェクトは、NPOあくせす・ぼいんととの活動(16ページ掲載)の一つであり、先行している「学校図書館へ本を「贈ろう」プロジェクト: Books for You」関連プロジェクトとして派生した活動である。)



解決すべき課題

- (1) 図書館サービス(児童サービス)支援の充実化と恒常化
- (2) 英語導入教育のあり方の検討
- (3) 出版文化の持続的な支援と読書推進活動の貢献
- (4) 「図書館を活用した学び」の認知度向上



大学の役割

「学び」とは、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などを育成することである（文部科学省）。図書館は、生涯を通じて学ぶことのできる社会的インフラストラクチャであり、その理念には「図書」を通じた学習機会の提供がある。全国約97%の小学校が、読み聞かせを実施（「H26年度学校図書館の現状に関する調査」）している状況下、学びの環境・読書の環境を更に高度化していくためには、「行政」と「大学」との主体的互惠関係が必要である。NPOあくせす・ほいんとは、これまで十分ではなかった図書館での外国語教育プログラムの一環として、「英語で絵本を楽しもう！」を企画し、「官」と「学」との媒介者の役割を果たすものである（上記プロジェクトイメージ図参照）。

成果

- (1) 吹田市立千里図書館でのイベント開催
(5月、7月、12月、翌年3月)
- (2) LibCafeと称する公開ゼミナールの実施
(外部レクチャによる勉強会等)

今後の展望

- (1) 魅力あるプログラムの開発
(絵本の選定とアクティビティの開発)
- (2) 外部資金獲得のための諸活動
- (3) 吹田市以外の市町村への活動拡大
- (4) 学生ボランティアの持続的確保



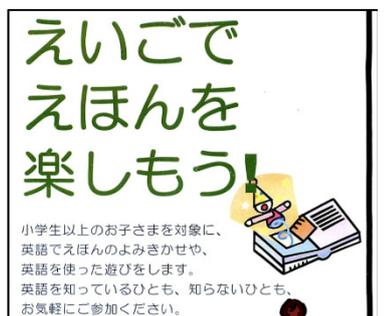
「英語で絵本を楽しもう！」のようす②

研究者の紹介



文学部 教授
渡邊 智山
(わたなべ としたか)

専門は、図書館情報学。図書館における情報通信技術の活用、および図書館サービスの在り方について、図書館の社会的使命を基本に考察している。



交通まちづくり

交通によるまちづくりに関心のある市民、行政、学界、事業者、メーカーなど様々な立場の方が集まるフォーラム等を企画し、政策提言を行っています。



2012年に水戸市で開催された「スマートまちづくりフォーラムin水戸」のパネルディスカッション

活動の概要

目 的	全国の交通まちづくりに関心のある人のネットワークを形成し、問題意識の共有と政策提言を行う
連携メンバー	人と環境にやさしい交通をめざす協議会 / NPO法人エコエネルギーによる地域交通システム推進協会 / 国土交通省 / 環境省 / 新交通システム推進議員連盟 / 関西大学経済学部教授 宇都宮浄人
活動地域	全国 (これまで、宇都宮、京都、横浜、東京、岡山、新潟、水戸においてシンポジウム・フォーラムを開催)
活動期間	2005年～(継続中)
費 用	大会の参加登録料 / シンポジウム等の資料代 / 趣旨に賛同する団体・企業からの協賛金および助成金 (環境再生保全機構「地球環境基金」<2008年～2011年>など)

連携の経緯

関西大学赴任以前の宇都宮に対し、「エコエネルギーによる地域交通システム推進協会」からの依頼があり連携が始まった。

「第6回 人と環境にやさしい交通をめざす全国大会in新潟」の
研究発表大会で発表する環境都市工学部の学生



「第7回 人と環境にやさしい交通をめざす全国大会
in宇都宮」の研究発表大会で発表する経済学部の学生



解決すべき課題

- (1) 地域公共交通活性化とコンパクトシティ戦略のための制度の検討
- (2) 交通政策基本法の実践的な活用に向けた議論の喚起
- (3) 交通まちづくり活動のネットワーク化

大学の役割

これまでの交通経済に関する研究内容を基礎に、交通まちづくりに向けた取り組みを講演、シンポジウム等で発信するとともに、そうした活動を通じて、交通まちづくりの各地の団体のネットワーク拡大に寄与。また、「人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」には、2013年の第6回新潟大会において環境都市工学部の学生が、2014年の第7回宇都宮大会において経済学部の学生がそれぞれ報告に参加するなど、学生の視点からの交通まちづくりに関する分析、提言も実施。



東日本大震災で被災した水戸弘道館を見学する様子

研究者の紹介



経済学部 教授
宇都宮 浄人
(うつのみや きよひと)

日本銀行調査統計局物価統計課長などを経て2011年から関西大学へ赴任。専門は、経済統計学、交通経済学。経済学の考え方をベースに、交通問題の研究を進めており、日本の交通政策やまちづくりについて各地で提言を行っている。本活動も含めた交通まちづくりの現状や課題は、2015年刊『地域再生の戦略―「交通まちづくり」というアプローチ』(ちくま新書)で詳しく紹介。

地域商業・産業振興、まちづくり、 中心市街地活性化等に関する研究調査 および研究発表（ゼミナール活動）



調査結果のプレゼンテーションの様子

活動の概要

目的	地域の抱える問題に対する調査・研究発表活動を通じ、学生の研究およびプレゼンテーション能力の向上を図る
連携メンバー	近畿経済産業局 / 小浜市 / 吹田市 / 高槻市 / 豊中市 / 彦根市 / 大阪商工会議所 / JA / いたみタウンセンター / 川西市中心市街地活性化協議会 / 関西地域活性化イベント協議会 / 新長田まちづくり株式会社 / JR吹田駅前周辺まちづくり協議会 / 伏見夢工房 / 伊丹中央サンロード商店街 / 京橋中央商店街 / 吹田市旭通商店街 / 千林商店街 / 天神橋筋商店街 / 野田新橋筋商店街 / コープ自然派事業連合 / 大阪エヴェッサ / 大丸 / 早和果樹園 / 関西大学経済学部 佐々木保幸ゼミ ほか
活動地域	大阪府吹田市、大阪市を中心に近畿県内で調査活動を行ってきた
活動期間	各調査は毎年6月～12月にかけて、ゼミナールの研究調査グループごとに実施している。また、10月～12月にかけて各種ゼミナール研究発表大会で研究成果を発表している。

連携の経緯

ゼミナールでは、地域商業や中心市街地の現状や活性化について学び研究してきた。これらのテーマの解明には、フィールド調査が必要であり、ゼミナール生はさまざまなフィールドに飛び出し、現地調査を進めるようになった。それら研究成果は、各種のゼミナール研究発表大会でプレゼンテーションすることを義務付けている。それゆえ、本ゼミナールでの取り組みは、純然たる「地域連携」とはいえないことにも留意いただきたい。



大会でのプレゼンテーションの様子

解決すべき課題

- (1) 観光を活かした中心市街地活性化
- (2) 地域経済に対する「ゆるキャラ」の効果
- (3) 「バル」等最近の地域商業活性化策の効果
- (4) みかん産地の6次産業化の方向性
- (5) 「食」を活かしたまちづくりの理念と方向
- (6) 買い物難民問題の現状と対策
- (7) bjリーグの地域密着マーケティング戦略

大学の役割

ゼミナール生を1組4人程度のグループに分けて、各グループごとに関心のある研究テーマ（地域商業や産業、まちづくり等）を設定する。各グループは、関係団体等へのヒアリングやアンケート調査等のフィールド調査を実施し、研究考察をおこなう。研究内容は、必ず各種のゼミナール研究発表大会で、成果発表する。その際、研究結果から、政策提言的なプレゼンをすることもある。

成果

- (1) 2010年度日本学生経済ゼミナール大会プレゼン部門の分野優勝
- (2) 2011年度日本学生経済ゼミナール大会プレゼン部門の分野優勝
- (3) 2012年度日本学生経済ゼミナール大会プレゼン部門の分野優勝
- (4) 2013年度日本学生経済ゼミナール大会プレゼン部門の分野優勝
- (5) 2012年度関西ブロック大会の分野優勝

研究者の紹介



経済学部 教授
佐々木 保幸
(ささき やすゆき)

日本とフランスの流通政策研究を専門としています。最近は、地域商業振興政策や大規模小売業の「国際化」に関する研究を進めています。



総合政策



安全・安心



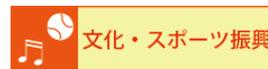
都市デザイン



福祉・人権



教育



文化・スポーツ振興



産業振興



健康・医療

自治体が直面する経済政策上の 課題に関する研究（ゼミナール活動）

関西大学経済学部での授業「経済学演習」の中で、自治体が直面する経済問題を学生が取り上げ、これに関する調査・研究活動を行い、問題解決のための具体的政策提言をまとめました。



ゼミナールの様子①

活動の概要

目的	発見した政策課題と問題解決のための政策提言の地域への発信と、活動を通じた学生の能力向上
連携メンバー	大阪府吹田市 / 関西大学経済学部 本西泰三ゼミ
活動地域	大阪府吹田市および周辺自治体
活動期間	2010年頃～（継続中）
費用	自己負担（交通費程度）

連携の経緯

吹田市は、「まちづくり吹田学塾」の実施や、関西大学における講義科目「吹田市と関西大学」の担当など、市政の課題を情報発信し、市民と共に考える中で、問題解決の方策を探る地域連携に大変熱心な自治体である。一方関西大学では、政策教育の中で取り上げる経済政策上の課題と、研究を進めていく上で必要な情報提供先を求めていた。市政に関する情報提供の依頼に、吹田市にはいつも快く応じて頂いている。



ゼミナールの様子②



大学内イベントにおけるアンケート実施の様子

解決すべき課題

- (1) 商店街活性化
- (2) 放置自転車
- (3) ユニバーサルデザイン
- (4) スポーツ施設の民間委託方式
- (5) 災害発生時の防災協力
- (6) 千里ニュータウンの世代間交流
- (7) デートDV問題の啓蒙

大学の役割

学生は講義科目「吹田市と関西大学」に出席し、市職員による講義の中で、市政が抱える様々な政策上の課題について学ぶ。この講義の内容などから、学生は経済政策上の課題を発見する。政策課題に関する研究を進めるうえでは、市の関係部局からの情報収集が必要となることも多く、学生がこの取材を担当する。アンケートの実施は学生が調査員として用紙の配布・回収を行うことを基本にしているが、吹田市の側から協力の申し出を頂く場合もある。学生はこうした情報を元に、政策課題を解決するための政策提言内容を1年程度かけてまとめ、ゼミナール大会を初めとする研究発表の場でこの内容を報告する。こうした場で得られたコメントなどを元に、さらに1年程度かけて論文の内容を充実させ、最終的には卒業論文としてまとめる。卒業論文は調査にご協力頂いた吹田市の担当部局に送付させて頂いている。

成果

- (1) 学生の課題発見・政策提案能力向上および市政に関する理解の深化
- (2) 大会報告などを通じた関西大学及び他大学学生への情報発信
- (3) 吹田市への研究成果の報告

今後の展望

- (1) 現在の関係を維持し、今後も学生の政策提案能力の向上に努めたい
- (2) 吹田市からは教えて頂くことばかりだが、今後は発信を一層重視し、市政が抱える問題の啓蒙を促進したい

研究者の紹介



経済学部 教授
本西 泰三
(もとにし たいぞう)

経済政策を教える中で、具体的な政策提案につながる教育の重要性を痛感し、学生には常に市の担当者や市民から得られる生の声を重視して研究を進めるよう指導している。

環境意識向上に向けた 市民目線からの情報発信

吹田市民の環境に対する意識向上に向け、
学生の発想で環境・エコに関する情報発信を行っています。



『エコプレス』の取材のためのリサイクル工場（吹田市資源循環エネルギーセンター）見学

活動の概要

目 的	吹田市民の環境意識向上とライフスタイル見直し / 学生の学習成果の見える化
連携メンバー および役割	吹田市役所、アジェンダ21すいた・・・『エコプレス』企画会議における掲載コンテンツの検討 吹田市内の環境に関する各種NPO法人・・・独自企画実施と大学への当該企画への参加依頼 関西大学生活協同組合・・・『エコプレス』のコンテンツ「エコクッキング」への食材提供等の協力 関西大学経済学部教授 良永康平・・・学生への指導 関西大学経済学部 良永康平ゼミ ・・・『エコプレス』企画会議における掲載コンテンツの検討と作成、NPO法人の独自企画 へのボランティア協力
活動地域	大阪府吹田市内の公共施設および山・川等の自然 / 関西大学千里山キャンパス
活動期間	2006年～（継続中）
費 用	吹田市からの『エコプレス』作成にかかる編集経費

連携の経緯

吹田市から『エコプレス』（環境問題に関する広報誌）の作成をご依頼いただいたことがきっかけとなって連携を開始。協力内容を検討する中で、同市からは『エコプレス』全体の企画作成の要望が挙げられた。そこで、市民に対して環境に関するさまざまな情報を発信することを目指し、エコ情報だけでなく環境に関する書籍・映画等、幅広く情報発信を行うこととなった。



エコクッキングの様子

解決すべき課題

- (1) 吹田市…ごみ処理にかかる行政上の各種課題解決
- (2) 吹田市…学生・市民への環境教育の充実
- (3) NPO法人…学生の若い力の獲得
- (4) 関西大学生協同組合…環境問題に関する取り組みの実施

大学の役割

環境に関するさまざまな情報を発信するために日々活動を行っている。市民の方々にとって身近な情報をお届けするため、学生が主体となってコンテンツの提案から作成までを手掛けている。具体的な活動内容例は以下に挙げるとおり。

(1) エコプレスの発行

この活動の核となる取り組みであり、アジェンダ21すいたの情報誌である『エコプレス』を年4回、発行している。紙面では市内のイベントはもちろんのこと、遠方での取材活動など話題性のある情報を収集・発信する。なお、掲載するコンテンツは「アジェンダ21すいた」および市役所の方々と協働で行う企画会議の中で決定している。後述する「エコクッキング」もコンテンツの一つである。

(2) エコクッキング

『エコプレス』に掲載するコンテンツとして、関西大学生協同組合の協力を受け、市民ボランティアの方と共に、家庭でも実践できるエコな料理を学んでいる。食材の購入から調理方法、後片付けにいたるまで、多くの情報が詰まった企画である。

(3) 各種イベントへの参加

環境問題に取り組むNPO法人の方々が実施するリサイクルフェア等のイベントにボランティアとして参加している。

以上のように、学生が大学の内外で学んだ情報を「見える化」して「市民目線」で情報発信することが、この活動の特色である。

成果

- (1) 学外の団体間のコミュニティ構築の一端を担ったこと
- (2) 『エコプレス』に対する市民からの多数のご意見を得られたこと

今後の展望

- (1) 取り組みを継続すること

研究者の紹介



経済学部 教授
良永 康平
(よしなが こうへい)

福岡県久留米市生まれ。1981年一橋大学経済学部を卒業。経済統計学、国民経済計算論、産業連関論が専門。現在の研究テーマはEUと地域の統計。学生に社会で生き抜く力を身につけさせることを目指し地域での学びを実践している。

家業の事業承継をサポートする講義



関西大学商学部では中小企業の事業承継を支援する講義を開講しています。

講義の様子①

活動の概要

目 的	実家が家業を営む学生が、きちんと家業に向き合うことを支援する活動を正課授業の中で行う
連携メンバー および役割	大阪産業創造館チーフプロデューサー 山野千枝氏…講義内容の構成・講師のコーディネート、ディスカッションの司会 関西大学商学部教授 荒木孝治…講義における各種サポート 講師（企業の経営者）…家業を承継した経験者が講師として実践的な講義を提供 受講学生…講義に出席し、積極的にディスカッションに参加する。また、毎回簡単なレポートを提出
活動地域	関西大学千里山キャンパス
活動期間	2014年4月～（継続中）
費 用	関西大学による負担

連携の経緯

関西大学商学部は、大阪産業創造館（大阪府大阪市中央区）と従来より連携してきた。その中で、他大学（関西学院大学、甲南大学）で行っている事業承継に関する講義を関西大学でも実施しないかという提案があった。これは古くて新しい課題であるとともに、事業承継に関する保護者・学生からの悩みを聞いていたこともあり、関西大学独自（内容および講師）の形で実施できるよう調整し、開講に至った。今年度で2年目である。

解決すべき課題

- (1) 学生が抱える事業承継の問題
- (2) 学生の保護者が抱える事業承継の問題
- (3) 日本の産業を支える中小企業における事業継承の問題



現場の声

- ・山野千枝氏（大阪産業創造館 チーフプロデューサー）

現役後継経営者とのディスカッションを通して、ファミリービジネスがもたらす企業存続力、世代交代がもたらすイノベーションについて受講生の理解が深まっている。

- ・受講生

今回、創業者であり、父でもある現社長と家業に関する話をする機会ができ、経営者の苦勞を知ることができた。家業のある家に生まれて良かったと今は感じている。

今まで家業に関心はなかったが、家業のありがたさや可能性、それを次世代に承継する必要性に気づくことができた。

将来、この講義に戻ってきて、次世代の後継者たちへ講義できる日が来るといいなと思っている。

大学の役割

2014年春学期（金曜4限）より継続して講義「ビジネス研究（次世代の後継者のための経営学）」を開講している。コーディネーターは大阪産業創造館の山野千枝氏で、講義内容の検討および企業人講師の選定をお願いしている。40歳代の現役の経営者を講師として招き、実践的な内容での講義を提供している。なお、講師は全員、業種は様々であるものの、自らが家業を承継した経験者である。40歳代と設定しているのは、大学卒業後の約20年後に受講生も事業継承に直面する可能性が高いと想定しているからである。

本講義は、実家が家業を営む学生を主な受講者として、彼らが将来家業を承継するかどうかの決断に直面したときによりよい意思決定ができることを目的としている。また、実家は家業を営んではいないが、ファミリービジネスや起業に関心のある学生も受講の対象としている。

講義では、事業承継の本質とは何か、後継者のキャリアデザインのあり方、新規事業への進出や業態転換の難しさ、創業者と後継者との関係、老舗だからこそ必要な革新等の幅広く、また実践的な内容が展開されている。講義だけではなく、毎回、充実したディスカッションを行なうことができる少人数でのゼミ形式で推進している。また、ライフラインにより過去を振り返る実習など学生にとって今後の生き方の指針を得る手助けにもなる工夫を行っている。

成果

- (1) 日本経済新聞や読売新聞等により記事として取り上げられた
- (2) フェースブックにより受講者・講師間の情報の共有のみならず、受講生OBとの交流もはかっている
- (3) ディスカッションの時間を十分に取り、理解を深めている
- (4) 受講生が毎回提出するレポートより、VOC（Voice of Customer）を確認。毎回のレポートからは受講生により評価されていることがわかる（上記、「現場の声」の受講生の声参照）

今後の展望

- (1) 内容およびディスカッションをさらに充実させるため、次年度より、実家が家業を営む学生を受講対象とする
- (2) 他学部からの受講生受け入れの拡大

研究者の紹介



商学部 教授
荒木 孝治
(あらかき たかはる)

専門は統計学・品質管理。ゼミでは過去に2回、山崎製パン株式会社とともに関大ランチパックの開発を行った。現在、エキマルシェ大阪やものづくり系企業、理工系学部との共同プロジェクトをゼミ生とともに推進している。



大阪産業創造館
チーフプロデューサー
山野 千枝
(やまの ちえ)

大阪産業創造館は大阪市経済戦略局の中小企業支援拠点。同館発行情報紙「Bplatz press」編集長を兼任。事業承継をテーマに大学で教鞭をとっている。

JR大阪駅周辺施設の活性化プロジェクト

関西大学商学部は、大阪ステーションシティの活性化プロジェクトに参加しました。



上：荒木ゼミ（ガブリッチ（バル）チーム）の試食・グループディスカッションの様子
下：開発したガブリッチの新品

上：荒木ゼミ（campチーム）の試食・グループディスカッション後の記念写真
下：開発したcampの新品

活動の概要

目的	①次世代のオピニオンリーダーである学生とテナント及びテナントシェフの経験をミックスし、新たな視点で商品を開発する ②商学部における日頃の学習・研究の成果を活かすことのできるインターンシップ（商品開発及び販売促進）を行う
連携メンバーおよび役割	株式会社ジェイアール西日本デイリーサービスネット 駅編集事業本部エキマルシェ大阪運営事務所 藤田允氏…プロジェクトの企画・推進・編集 関西大学商学部教授 荒木孝治…学生の活動の調整・サポート 関西大学商学部准教授 西岡健一…学生の活動の調整・サポート 参加学生…連携店舗との新品開発及び販売促進を行う
活動地域	大阪ステーションシティ（大阪府大阪市北区）
活動期間	2014年6月～2015年10月
費用	参加者による相互の負担

連携の経緯

2014年6月、株式会社ジェイアール西日本デイリーサービスネットより関西大学商学部に対して協同プロジェクト推進の話があった。従来より様々な企業と協同プロジェクトを推進してきた荒木ゼミ及び西岡ゼミが参加を希望し、それが実現した。平成27年度には直接2ゼミがオファーを受け、参加することとなった。

解決すべき課題

- （1）梅田近隣で働く女性にとって「うれしい」商品とは何かをインタビュー等に基づいてフィールドワーク
- （2）与えられたテーマに基づき、学生が持つ新しい発想・視点で商品を開発し、さらに販売促進活動を行う



2015年秋 大阪ステーションシティ フーズフェスタ
「知恵と元気！うまいもんWeeks」のポスター

現場の声

- ・参加ショップ及び藤田允氏
 - ・学生の皆さんがフィールドワークで得たお客様の声が非常に参考になり、今回の企画だけでなく店舗運営（商品開発、スタッフ教育、陳列、販促等）自体に大きな参考となった。
 - ・学生の皆さんのアイデアが、通常の社内の発想では考え付かないものだったので、商品開発の切り口として新たな視点を学ぶことができた。
 - ・食材の使い方や、見せ方等、いつもよりもさらに考えるきっかけとなった。
- ・学生
 - ・学生×社会人で、互いの意見を尊重しながら商品コンセプトの立案からプロモーションまで関わることができた。
 - ・自分たちの想いがカタチになるという人生であまり味わえない貴重な体験であった。

大学の役割

2014年、JR大阪三越伊勢丹、大丸梅田店、エキマルシェ大阪が共同企画する『大阪ステーションシティ フーズフェスタ』の「関西の大学生とコラボ！知恵と元気！うまいもんWEEKS」のエキマルシェ大阪とのコラボに関西大学商学部荒木ゼミ及び西岡ゼミの学生が参加した。このフェスティバルの開催目的は、【活動の概要】の「目的」に記したように、①次世代オピニオンリーダーとテナントシェフの経験をミックスし、新たな視点で商品を開発（企業側）、②日頃の学業の成果を商品開発と販売促進に活かし、ビジネスを体感すること（学生）にあった。JR大阪三越伊勢丹は同志社大学、大丸梅田店は関西学院大学とのコラボを行った。荒木ゼミ生はスイーツを、西岡ゼミ生はお弁当を開発した。

2015年は、上記と同じ目的、タイトル（フーズフェスタ）のもと、①エキマルシェ大阪×関西大学商学部、②大丸梅田店×関西学院大学、③イセタン フードホール×同志社大学、④ホテルグランヴィア大阪×立命館大学に参加した。荒木ゼミは、『野菜を食べるカレーcamp』（カレー）、『ガストロ酒場 ガブリッチ』（サラダ）と、西岡ゼミは、『牛たん炭焼 利久』（牛たん丼）、『北極星』（オムライス）、『ベジステ』（サラダ）とコラボし、括弧内に記した新商品を開発した。その際学生は、エキマルシェ大阪周辺で入念なフィールドワークを行い、それをベースにテーマに関連した商品案を考案した。

成果

- (1) 2014年10月15日（水）～同年10月28日（火）、及び2015年10月7日（水）～同年10月20日（火）、協同で開発した商品が発売
- (2) 商品のネーミングや特徴、「こだわり」等を考案し、『エキマル誌』（2014年10月号、2015年10月号）の作成に参加
- (3) 2014年10月、朝日放送の依頼により、荒木ゼミの代表者2名が『おはよう朝日～土曜日です～』の取材を受け、10月18日（土）に放映
- (4) 2015年、産経ニュース（Web）及び朝日新聞デジタル（Web）に掲載

今後の展望

- (1) JR大阪駅周辺のさらなる活性化に向けて、協同プロジェクトを推進していきたい。
- (2) 企業と商学部とが協同プロジェクトを継続的に推進するための仕組み作りを考えたい。

研究者および連携メンバーの紹介



商学部 教授
荒木 孝治
(あらき たかはる)

専門は統計学・品質管理。ゼミでは過去に2回、山崎製パン株式会社とともに関大ランチパックの開発を行った。現在、エキマルシェ大阪やものづくり系企業、理工系学部との共同プロジェクトをゼミ生とともに推進している。



エキマルシェ大阪 営業管理
藤田 允
(ふじた じょう)

エキマルシェ大阪で2012年開業時より販促を担当。
エキマルシェ大阪で株式会社ジェイアール西日本デイルーサービスネットは、エキチカ商業施設「エキマルシェ」の開発運営、JR西日本の駅におけるセブンイレブンキヨスク・ハートインの運営及び駅構内店舗の開発運営、ホテル「ヴィアイン」の運営を行っている。

地域の有力な中小企業の課題を解決

有望な中小企業と学生がコラボレーションし、地域と企業の発展と学生の成長機会を創出。



M ラボ 課題解決ラボ発表会（2014年10月25日）

活動の概要

目 的	中小企業の活性化および、企業と学生とのマッチング
連携メンバー および役割	神戸新聞社・・・「課題解決ラボ」の主催 兵庫県内の中小企業（株式会社レック、井上食品株式会社） ・・・学生とのコラボレーション、調査のための商品・情報提供 関西大学商学部 西岡健一ゼミ・・・企業の課題調査および解決策の提案
活動地域	兵庫県内 / 関西大学千里山キャンパス
活動期間	2014年

連携の経緯

神戸新聞社が主催する中小企業庁・全国中小企業団体中央会の補助事業である「Mラボ（※）」の中核事業で、学生が企業の課題解決策を提案する「課題解決ラボ」の開催にあたり、主催者の神戸新聞社から西岡ゼミに参加の打診があり連携が開始した。

※「Mラボ」・・・中小企業と大学生の就職マッチングを目的とした情報発信や交流機会の創出などを展開する事業。

解決すべき課題

- (1) 中小企業の経営課題と地域経済の発展
- (2) 大学生に対する中小企業の認知度向上
- (3) 特に新卒雇用のミスマッチに対する対処



企業訪問の様子（於井上食品株式会社）



企業訪問の様子（於株式会社レック）

大学の役割

「課題解決ラボ」は、同企画に応募した大学と兵庫県内の企業が連携し、商品の販売促進戦略や新市場開発、さらには業務オペレーションの改革といった企業が抱える課題について、学生が解決策を提案するというもの。西岡ゼミの3年生が2チームに分かれ参加している。

学生はまず、商品やサービスに関する市場調査、企業へのヒアリングやフィールド調査等の綿密な調査により、課題の発生要因を探り、企業へ調査結果を報告する。その後、企業と打ち合わせを重ね、調査結果およびゼミの専門領域に基づく課題解決策を練り、10月の発表会でプレゼンテーションを行う。

2014年度の活動は以下のとおり。

（1）井上食品株式会社との連携

- 目的 : 「おつまみ」の市場開拓とマーケティング手法の提案
- 調査方法 : 同社から提供を受けた「おつまみ」を参考に、消費者アンケート調査を実施
- 調査で抽出した課題: 昔ながらの酒の肴ではなく、「食」に対する新たなコンセプト開発が課題
- 学生の提案 : ①「おつまみ」に対する新しい「食」のコンセプト提案
② 食に関する様々な「ソリューション」として、新たなマーチャンダイジングを提案

（2）株式会社レックとの連携

- 目的 : イノベティブなサービスを開発した企業における戦略とオペレーションの再設定
- 調査方法 : レック社全面協力による様々なフィールド調査
- 調査で抽出した課題: 市場拡大とビジネス分野拡大によるサービスコンセプトとオペレーションのズレ
- 学生の提案 : サービス提供オペレーションを強みとすることで、既存市場における顧客対応ではなく、新たなサービス開発と新市場進出が今後の成長戦略となる

成果

- （1）現実のビジネスに関する問題設定と解決案の立案を通じた活動による学びの場を学生へ提供
- （2）最終発表会での準グランプリ獲得（二年連続入賞）
- （3）TV（サンテレビ）、新聞（神戸新聞）等による関西大学のパブリシティ向上

研究者の紹介



商学部 准教授
西岡 健一
(にしおか けんいち)

エジンバラ大学ビジネススクール博士課程修了、PhD（エジンバラ大学）。日本電信電話株式会社ネットワークサービスシステム研究所、西日本電信電話株式会社等を経て、現職。専門はサービス・イノベーション論。ゼミではマルチプロジェクト体制と英語での発表機会を増やすことで、人材育成に取り組んでいる。

地域の生活文化を見つめ 人生を丸ごと記録する「聞き書き」

長谷川ゼミの学生が現地に赴き、聞き手として話し手と一対一で向き合い、話し手のこれまでの人生を聞き、それを話し手の言葉で文章にまとめ公表します。



学生による「聞き書き」の様子

活動の概要

目的	人々が自然とともに生きる中で育んできた有形、無形の文化、歴史、生きるための知恵、生き方を記録する
連携メンバーおよび役割	陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会…聞き書き対象者（話し手）の紹介 モンチアズール住民協会…聞き書き対象者（話し手）の紹介、ホームステイ先のアレンジ イパチンガ日伯文化協会（ANBI）…聞き書き対象者（話し手）の紹介、ホームステイ先のアレンジ トメアス総合農業協同組合（CAMTA）…聞き書き対象者（話し手）の紹介、ホームステイ先のアレンジ 関西大学商学部 長谷川伸ゼミ…聞き手の現地派遣
活動地域	関西大学千里山キャンパス / 岩手県陸前高田市 / ブラジル連邦共和国サンパウロ州サンパウロ市 / ミナスジェライス州イパチンガ市 / パラ州トメアス市
活動期間	2013年4月～（継続中）

連携の経緯

- (1) 2012年6月に陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会長による学術講演会「東日本大震災を忘れない：被災地 陸前高田からの教訓」を商学部で実施。その際に、長谷川が「聞き書き」の協力を要請。
- (2) 2012年8月に長谷川ゼミの学生が上記自治会長を始めとする被災者の方々への「聞き書き」を実施。
- (3) 2013年度には「聞き書き」をブラジル（サンパウロ、イパチンガ、トメアス）でも実施。

解決すべき課題

- (1) 震災による人口流出（陸前高田）
- (2) 他地域からの訪問人口の減少（陸前高田）
- (3) 震災記憶の風化（陸前高田）
- (4) 日本の若者による訪問の減少（ブラジル）

大学の役割

発展途上国での夏季研修にとりくんできた「国際協力・技術移転・人材育成の現場を歩く」長谷川ゼミナールは、2011年5月から東日本大震災の被災地への支援を始めたが、その途上で「被災地の聞き書き101」に出会った。「被災された方々が日常を取り戻していく上で拠り所となるのは、『被災地』という抽象的な括りではない、ご自身が積み重ねてきた日々の営み、暮らしに溶け込んだ生活文化ではないか」（東京財団・共存の森ネットワーク（編）『被災地の聞き書きプロジェクト101』2012年、3頁）。だから「聞き書き」は一人ひとりの人生、普段の暮らしを聞く。

このプロジェクトに共感したゼミ生たちが、2012年夏に被災地で「聞き書き」を行った。その結果、話し手（被災者）と聞き手（学生）が親戚のような関係になること、聞き手（学生）にとって生き方を見直す機会となること、といった「聞き書き」の果実が見えてきた。そこで2013年度は海外研修でも「聞き書き」を行うこととし、海外研修先の一つとして私はブラジルをゼミ生に提案した。これに8名のゼミ生が呼応しブラジルの日系の方々への「聞き書き」を2013年夏に行うに至った。

なお「聞き書き」の手順は次の通りである。長谷川ゼミの学生が現地へ赴き、話し手の仕事を見学したり手伝ったりするなどして信頼関係を築いた後、話し手と一対一で向き合い、話し手のこれまでの人生を聞き手（ゼミ生）が2時間程度で聞く。それを話し手の言葉で文章（6,000字前後）にまとめ、冊子やWEB上で公開する。

成果

- (1) 2013年度『聞き書き作品』（第1版）を発行し、関係者に頒布
- (2) 『佐藤一男聞き書き+インタビュー記録』を発行し、関係者に頒布

現場の声

・陸前高田の話し手

私は思い出っほらずっと宝物になるから、私は聞き書きとかそういうのもいいと思います。あってもいいよね。自分たちのとか、みんなのいろいろなを絵本みたいにするんでしょ？みんなね、年もいろいろだしね、やっぱりみんなの仕事とか場所も違ってるしね、年代も違うし。だからこういうことがあったとかわかるからいいと思います。自分たちで今の時代はわかってるけどもこう薄れていくこともあるでしょ。ほんとにこうその場だけは覚えてるけど。いつまでもね自分たちでは、わかんないこともあるからね。そっちの方ではこういうこともあったのかなあと思ったりね。よその避難所でもまた違うからね。

・ブラジル・サンパウロの話し手

夢っていったら、私の人生を本にしたかったことだから、あなたたちが今日叶えてくれてるよね。これってすごくおもしろいと思わない？だって自分が夢を持っていて、それを叶えようと思うんだけど、自分で叶えられない。私は、自分の本を書きたかったんだけど、書けない。でもそれを、偶然たまたまこうやってブラジルの裏側から来た二人の女の子たちが叶えてくれてるんだよ。ありがとう。だから、私は、なんで自分の人生であなたたち二人と出会えたのかがわかる。

・聞き手＝長谷川ゼミ生

聞き書きで一人の人と向き合うことで人とのつながりや感謝の気持ちを忘れないこと、自分の好きなことを続けることが大切であることを教えていただきました。

震災によって生活や環境が大きく変わってしまいましたが、前を見て強く生きているお二人に出会い、私も毎日を精一杯生きていかなければならないと強く思いました。

お二人が自分の中に住んでくれているような感覚があり、自分の私生活がうまくいかない時は立ち止まって、よく二人のお言葉を思い出します。

一緒にいた時間は決して長くはないけれど、ブラジルに帰るべき場所ができたような気がしました。

研究者の紹介



商学部 准教授
長谷川 伸
(はせがわ しん)

専門は国際技術移転論。長年ブラジルを研究対象としている。学生時代を仙台で過ごすなど東北に縁があり、3.11後は被災地支援を行っている。一般社団法人参画文化研究会理事。日本防災士機構防災士。

学生提案科目 「関大生の私にできること ～被災地（大槌町）に向き合う～」

被災地（岩手県大槌町）の「いま」に焦点をあてて、被災地の復興にいま必要なこと、被災地・被災者がほんとうに求めていることを理解し、関大生ができることを見つけます。



授業でのグループワーク（場づくりラベル図解）の様子

活動の概要

目的	被災地（大槌町）から学び、被災地（大槌町）のために関大生ができることを見つける
連携メンバー および役割	岩手県大槌町・・・町長講演 一般社団法人おらが大槌夢広場・・・講師派遣 関西大学社会学部教授 与謝野有紀・・・授業での講演者 関西大学社会的信頼システム創生センター（STEP）・・・大槌町長などの講演のセッティング 科目提案委員会社会性チーム・・・授業の企画運営 関西大学商学部 長谷川伸ゼミ・・・講師派遣とラベル図解指導
活動地域	岩手県上閉伊郡大槌町 / 関西大学千里山キャンパス
活動期間	2012年10月～2015年9月

連携の経緯

- (1) 関西大学と岩手県大槌町が2012年7月に同町の自律的復興支援を目的として連携協定を締結
- (2) 科目提案委員会社会性チームが2012年秋に被災地（大槌町）を題材とする授業を企画立案
- (3) 2013年度春学期に「関大生の私にできること～被災地（大槌町）に向き合う～」開講



この授業実践を「学生FDサミット2013夏」で発表する科目提案学生委員



学園祭で大槌町から仕入れた材料を使った商品を販売する様子

解決すべき課題

- (1) 震災による人口流出（大槌町）
- (2) 他地域からの訪問人口の減少（大槌町）
- (3) 震災記憶の風化（大槌町）

大学の役割

「被災地（大槌町）の『いま』に焦点をあてて、被災地の復興にいま必要なこと、被災地・被災者がほんとうに求めていることを理解し、関大生ができることを見つける」ことをねらいとした関西大学の学生（科目提案委員会社会性チーム）による授業を企画・運営（2013-2015年度春学期開講、履修者30-60名前後）。この授業へのゲストレクチャーとして、大槌町長と一般社団法人おらが大槌夢広場の代表理事を招いた。

この授業を履修した学生を中心として、2013年9月に大槌町スタディ&グルメツアー、11月に関西大学学園祭での大槌町産物コーナーの運営などが行われた。科目提案学生委員はこの授業実践を第9回三大学連携事業「震災における支援活動と防災・減災」ポスターセッション（2013年7月）、「学生FDサミット2013夏」（2013年8月）などで発表した。

現場の声

・履修生

私は一度ボランティアで被災地に行ったことがあるのでこの科目を発見した時、とるしかない！と思った。本当に期待どおりの授業で、とってよかった。たくさんの方がたくさんのことを実行しているので関大に入学してよかったとも思った。班活動では真剣に話し合うことができたし、先輩の話もたくさん聞いて嬉しかった。毎回の講演ではいつも泣きそうになりながらきちんとメモをとった。毎回の授業が本当に貴重であった。この授業のおかげでたくさんの人と出会い、たくさんの事を得ることができた。実行委員のみなさんも長谷川先生も、本当にありがとうございました。

（政策創造学部1年次）

この授業をとって本当によかった。この授業を履修した人全員の頭に「震災を風化させてはいけない」ことが少なくともインプットされたのだから、それもまた風化させない取り組みの1つとなる！たくさんのレクチャーを聞かせてもらう機会の中で、自分は「どうあるべきか」を何度も考えさせられた。「人との出会いの大切さ」「風化させないためには」で図解を作って、結論づけて、より理解を深めることができた。しかし実際のところ今思い返すと、「私ができること」って何があるの？って思った。けど私が今までラベルなどに書き込んだ「被災地に行く」「有言実行」という言葉を信じて、今できることからやっつけていこうと思う。

（商学部2年次）

関大生の私にできることは、子どもたちに震災について伝えていくことである。2回生の頃、被災地へ行った時、実際に見たもの、被災地の方から聞いた話を、教員となった時、子どもたちに伝えようと感じた。しかし、この授業を受け、ただ見たものや、感じたことを伝えるだけではなく、そこから「震災が来たらどうするか」を子どもたちに考えてもらいたい。「人を大切にすること」「命を大切にすること」をこの授業で学んだことを基に伝えるという強い思いが生まれた。

（文学部4年次）

研究者の紹介



商学部 准教授
長谷川 伸
(はせがわ しん)

専門は国際技術移転論。長年ブラジルを研究対象としている。学生時代を仙台で過ごすなど東北に縁があり、3.11後は被災地支援を行っている。一般社団法人参画文化研究会理事。日本防災士機構防災士。

高齢者の意思決定支援制度を構築する 開放型経済実験拠点の形成



社会人や高齢者の方に、本学経済実験センターの実験室にお越しいただき、ゲームやアンケートを通じて経済行動を収集しています。

z-treeを使用した経済行動調査の様子①

活動の概要

目的	高齢社会の日本における経済活動の重要な担い手である社会人・高齢者の経済活動データを収集・分析し、政策提言の遂行
連携メンバー	各市町村に在住の社会人・高齢者 関西大学社会学部准教授 小川一仁
活動地域	関西地方 / 関西大学経済実験センター
活動期間	2014年～（継続中）

連携の経緯

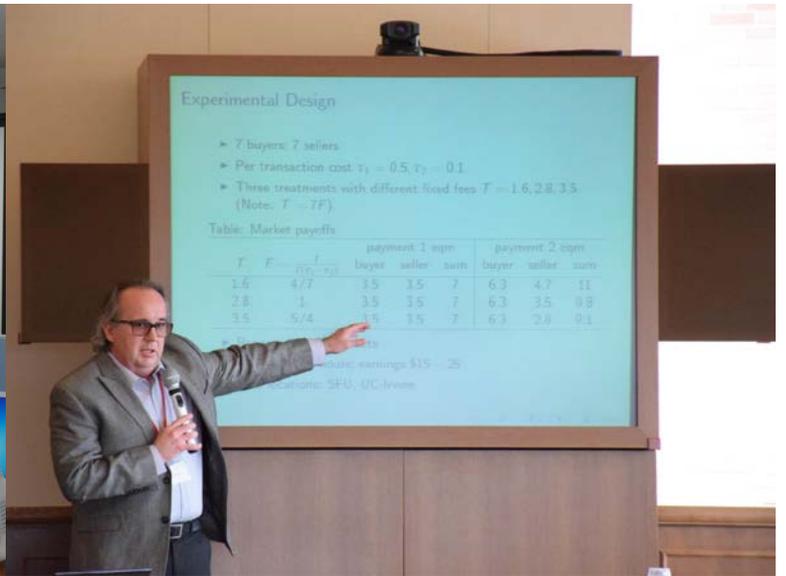
2014年6月、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択に基づき、関西大学経済実験センターが設置されたことを契機として連携を開始した。経済学の理論的成果が社会人・高齢者の経済行動を説明できるかどうか検討するため、本学主催の公開講座受講者や一般の方から希望者を募り、アンケート調査と経済実験を実施することとなった。

解決すべき課題

- (1) 「オレオレ詐欺」等の高齢者を狙った犯罪対策
- (2) 高齢世代・中年世代の健康政策
- (3) 地域活性化に資するリーダー発掘



z-treeを使用した経済行動調査の様子②



国際学会の様子

大学の役割

本学に拠点を置く経済実験センターでは、高齢者を中心とした社会人に簡単なゲームとアンケートを実施し、様々なデータを収集する。そこで収集したデータを分析し、以下の項目を検討し明らかにする。

- (1) 高齢者が経済的意思決定に関してどのような特徴を持っているのか
- (2) 詐欺や健康などで問題を抱え込みやすい人はどのような人か
- (3) 地域のリーダーとして資質がある人はどのような人か

以上の項目を明らかにし、研究内容によっては実験終了後すぐに調査の狙いや結果について簡単な解説を行う。最終的には、研究が一段落した段階で参加者に対し調査結果の配布を考えている。

成果

- (1) 赤の他人を信頼しすぎる人は「振り込め詐欺」に遭いやすい等、騙されやすい性格・性質の解明
- (2) 高齢者および社会人の経済行動データの蓄積
- (3) 経済実験センター主催の国際学会、ワークショップの実施

今後の展望

- (1) 地方の高齢者、社会人の経済的特徴を探る
- (2) 経済的特徴から政策提言を目指す
- (3) 研究プロジェクト自体の国際化
- (4) 現場での社会実験の立案と実施（計画中）

研究者の紹介



社会学部 准教授
小川 一仁
(おがわ かずひと)

2005年、京都大学大学院経済学研究科修了。博士(経済学)。2011年より関西大学社会学部准教授。専門は実験経済学。プロジェクトHPは<http://www2.kansai-u.ac.jp/cee/>

**関西大学主催
経済行動調査への
参加のご依頼**

2015年
9月5日(土)・10日(木) 参加は1回または2回
(9/5,10から1回、9/17,19から1回)

17日(木)・19日(土)
各日13:00-15:30ごろ

社会人や高齢者の皆さんの経済行動を調査・分析し、政策提言を行います。

主催: 関西大学経済実験センター
(文部科学省採択・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)

【会場】 関西大学経済実験センター
(ソリオネットワーク戦略研究機構5F 地図は裏面参照)

【対象】 社会人(学生は不可)

【定員】 各回28名(最大)

【謝礼】 最大3000円(平均2000円)

【交通費】 往復1000円まで実費をお支払いします

【概要】 簡単なアンケートやゲームに参加していただき、リスクに対するお考えや地域の人々といかに協力するかに関するお考え、寄付に関するお考え等を収集し、匿名化した上で統計学的に分析します。個人情報厳重に保管します。

【ご注意】 過去の実験に参加された方は、電子メールかお電話でお問い合わせ下さい。
参加申し込み・お問い合わせは裏面を参照ください。

「ながくて幸せのモノサシづくり」 ～市民・行政協働のまちづくり～

「市（町・村）は果たして誰のものなのか？」ありきたりの答えですが「住民」です。しかし、現実はどうかといえば、住民がまちづくりに関わることは少なく、どんな些細なことでも、役所にお任せになっていることが多い。住民主体でまちづくりを推進していくために、新たな行政のしくみに変えていくことが必要とされています。長久手市では、市民の力を引き出して、新しい行政のしくみづくりをするチャレンジをしています。



ワークショップの様子

活動の概要

目 的	住民が幸せに生活できる理想のまちづくりをイメージし、その実現を目指して市民と行政の連携により、ながくて幸せのモノサシづくり活動に取り組んでいます。
連携メンバー および分担	愛知県長久手市・・・活動の事務局、資料・施設・設備等の提供、幸せ実感調査の実施 ながくて幸せ実感調査隊・・・長久手市の幸せ実感調査の企画・分析（調査票作成、分析、まとめ） 関西大学社会学部教授 草郷孝好 ・・・市民・行政協働型自治システム及び幸せ実感調査全般のアドバイス （調査隊ファシリテーション、幸せ実感調査の設計・実施・分析・報告）
活動地域	愛知県長久手市
活動期間	2013年8月～（継続中）
費 用	愛知県長久手市による負担

連携の経緯

「幸福度が高いまち＝日本一の福祉のまち」実現を行政目標に掲げる愛知県長久手市から草郷研究室に対し、「新しいまちのかたちづくり」への協力要請があり、草郷が市のアドバイザーに就任し、連携関係が構築された。

解決すべき課題

- (1) 市民一人ひとりの幸福度が高いまちづくりの推進

大学の役割

草郷は、アクション・リサーチ（実践的研究）に取り組む「行動する社会学者」である。アクション・リサーチとは、問題に直面する当事者に対して、社会調査やワークショップなどを通じて、主体的な改善活動を促す先進的な研究手法を指す。

また、草郷は、ブータン発の斬新な社会発展モデル「GNH（国民総幸福）」を日本型GNHへとアレンジし、その導入も提唱している。日本型GNHのエッセンスは、市民自治に根ざす真に豊かな生き方を目指すことのできる地域社会の実現にあり、そのための具体的な仕組みとして、「地域ドック手法」、「地域生活プロセス評価手法」、「生活実感調査」、「エンパワメント評価」を展開している。

これらの手法を総合的にまちづくりに取り入れた代表的な例が、愛知県長久手市における活動である。

行政では、住みやすい市（町・村）を目指し、多様な行政サービスを展開している。だが、それは必ずしも、市民の主体性に根ざしたものではなく、市民が受け身に回り市役所任せにする例は多々見受けられ、長久手市においてもそれは同様であった。そこで長久手市では、2012年の町から市への移行を契機として、「幸福度が高いまち＝日本一の福祉のまち」を目指し、以下に紹介する「ながくて幸せのモノサシづくり」を始めた。

「ながくて幸せのモノサシづくり」の核とは、「市民と市役所の協働」による市民の行政参画、すなわち「住民主体のまちづくり」である。長久手市は、市民自治の実践協働研究に通じる草郷をアドバイザーに据え、現状と将来ビジョンを明らかにするための調査に取りかかった。

まず草郷は、独自の調査手法「地域ドック」を展開する。この手法は、地域を人間の体のようにみなし、その地域社会を構成する住民、行政、民間企業などが主体的に地域の「健康状態」に関する情報を収集・診断するものである。当然のことながら「診断」の先には、発見した「強み」あるいは「課題」を自分たちで育てたり、改善することを見据えている。草郷は「地域ドック」の概念の共有のため、「しあわせ」をキーワードとする市民講演会を実施。また、講演会に併せ、理想のまちづくりのために市民参加型のワークショップも行った。これが起爆剤となり、市民有志や若手市職員による「地域ドック」実践チームである「ながくて幸せ調査隊」が発足した。草郷は、調査隊に対し、市民主導型の生活実感調査づくりをアドバイス。調査隊独自の調査票も完成し、2014年2月にはついに「ながくて幸せ実感アンケート」を全市で実施し、調査結果の分析を行うまでに至った。

現在、「ながくて幸せのモノサシづくり」は第2段階を迎え、調査結果の市民へのフィードバックや地域における卓抜した取り組みの評価・発信を行うための「ながくて幸せ実感広め隊」が結成された。これは、地域に好影響を与えるキーパーソン間の繋がりを生むだけでなく、キーパーソンが成功体験を実感することにも直結する。すなわち、活動の主体者自身の幸福を生み、それが新たな活動となって地域に還流するという相乗効果が期待できるのである。

関西大学の役割は、市民と市職員の主体者としての力を引き出し、協働によるまちづくりを展開していく仕組みづくりへのチャレンジである。その取り組みは今まさに実を結びつつある。

成果

- (1) 市民と市職員による生活実感調査の協働（ながくて幸せ実感アンケート調査）
- (2) ながくて幸せ実感調査隊メンバー（市民と市職員）間及び同隊と市役所との信頼関係の醸成
- (3) 「ながくて幸せ実感広め隊」の結成

今後の展望

- (1) 調査結果の集計とフィードバック
- (2) 市民の幸福度を高めるためのまちづくり政策の検討

研究者の紹介



社会学部 教授
草郷 孝好
(くさごう たかよし)

愛知県岡崎市生まれ。東京大学経済学部卒業後、民間企業、世界銀行、国連開発計画、北海道大学、大阪大学等を経て関西大学着任。軽快なフットワークと鋭い観察眼を持って、住民主体の地域発展システムづくりに挑戦する実践的研究者。長久手の活動では、調査隊メンバーとは、お互いにニックネームで呼び合うなどオープンな人柄。スタンフォード大学M.A.（開発経済学）、ウィスコンシン大学マディソン校Ph.D.（開発学）。

サステイナブルな地域社会を支える しくみづくりとその支援

福祉・食・環境をつなげる地域の活動に関西大学の学生たちが参加。先進的な取り組みに学びながら、そのお手伝いをしました。



あいとうふくしモール

活動の概要

目的	地域の活動に不足しがちな若者の力を発揮して、地域内外の交流の促進や地域資源の掘り起しをはかる
連携メンバー	あいとうふくしモール（滋賀県東近江市） 関西大学社会学部准教授 大門信也 Myi's（学生企画組織）
活動地域	滋賀県東近江市愛東地区
活動期間	2013年10月～2014年9月

連携の経緯

2012年度から2013年度にかけて社会学部社会学専攻の大門信也ゼミでは、滋賀県東近江市とその周辺での、食やエネルギーをテーマとした地域社会の動向について調査を行った。また調査をきっかけとして、被災地支援のボランティアへの参加をはじめ、いくつかの地域との交流が生まれた。2013年度の後半から、ゼミ活動をこえて、学生を主体とした地域との連携を模索するチームが生まれ、地域交流イベントの企画運営を行った。



あいとうふくしモールにて開催される「もったいないやりとり市」

解決すべき課題

- (1) 高齢化に対する地域福祉の増進
- (2) 若者を軸とする地域内外の交流の促進
- (3) 社会資源（社会関係資本）の掘り起しと活性化
- (4) 絆を深める場の構築とその定着化

大学の役割

あいとうふくしモールが月1回で主催する「もったいないやりとり市」に地元の食材を使った屋台の出店や、地元小学生を対象とした企画を実施した。また、地域内の企画参加者へのヒヤリングや、地元小学校との交流など、企画の前後に行っている調査・打合せ等によって、地域の社会的資源の掘り起しを行った。

研究者の紹介



社会学部 准教授
大門 信也
(だいもん しんや)

専門は環境社会学。地域にねざしたサステナブルな社会構築の取り組みについて研究しています。2012年度から2013年度に滋賀県の湖東・湖南地域で、ゼミ生とともに地域の様々な活動に関する調査を行いました。

学生団体の紹介

Myi's

Myi's
(マイス)

(もったいないやりとり市・学生企画)

あいとうふくしモール開催の「もったいないやりとり市」の活性化のお手伝いのために結成された学生企画組織です。自分たちの力が地域社会にどのように役立つのかを模索してイベントの企画運営を行いました。

社会的信頼システム創生センター（STEP） ～違法駐輪排除実験～

憩いの場の創生によって商店街の違法駐輪排除を実現する社会実験活動を展開しています。



以前は違法駐輪の自転車がたくさん放置されていた、りそな銀行南森町支店前

活動の概要

目的	社会的信頼の創生による地域課題の解決
連携メンバー	大阪市北区役所 / 天神橋筋商店連合会 / りそな銀行南森町支店 / 地域住民 ピクデザイン事務所 山田悦央代表 / 提灯舗かわい / ランテック 小林卓氏 / 書道家 今柄紫峯氏 Think of Japan While Knitting(TJWK) / ガラス作家 岡本覚氏 / 職人研 関西大学TAFS佐治スタジオ 関西大学社会的信頼システム創生センター (Research center for Social Trust and Empowerment Process: 略称 STEP) 関西大学社会学部教授 与謝野有紀 / 同教授 林直保子
活動地域	天神橋筋商店街内（りそな銀行南森町支店ショーウィンドウ前）（大阪府大阪市北区）
活動期間	2010年8月～（継続中）
費用	文部科学省戦略的研究基盤形成支援経費等

連携の経緯

関西大学は1929年に天六学舎を開設して以来、天神橋筋商店街との関係を築いてきた。2006年からは天神橋筋商店連合会の協力のもと、社会学部生が「商店街の活性化」をテーマとする調査活動や、商店街訪問客に店舗や名所を案内する「町街人（まちがいど）」活動を展開。2010年のSTEP開設後には、それまでの協力関係を基に、日本初の商店街内の研究拠点「リサーチアトリエ」を開設し、さまざまな地域活性化活動や研究活動を発信することとなった。

解決すべき課題

- (1) 地下鉄出入り口付近の違法駐輪の解消
- (2) 商店街内の憩いの場の設置



りそな銀行南森町支店前で実施されたイベント てんこもりライブ (左) と書道パフォーマンス (右)

大学の役割

本事例は地域が抱える上記課題を「場の定義の転換」によって解決する社会実験活動である。りそな銀行南森町支店ショーウィンドウ前は、地下鉄出入り口付近であることから、「違法駐輪のメッカ」といわれるほど違法駐輪の多い場所であった。そこで、STEPでは同エリアの社会的定義を「違法駐輪をしても良い場所」から「地域住民が休み、談笑し、待ち合わせができる憩いの場」に転換することで違法駐輪を排除することとした。上記の計画実現には、商店街からの「社会実験活動の許諾」をはじめ、「設備の新設・撤去の許諾」「ショーウィンドウの利用許諾と展示物の確保」「専門家の助言を受けた空間デザイン」など、多くの団体・個人の協力行動を得ることが不可欠であった。STEPは関係者へのアプローチの他、リサーチアトリエで展開するさまざまな活動を通じた地域との接点の創出を経て、結果的に違法駐輪排除に向けた大規模ネットワークを構築。連携メンバーが資源を持ち寄ることで、興味を惹くいくつもの展示を実施し、「場の定義の転換」を実現した。

本事例は社会的信頼ネットワークの創生によって協力行動を生み出し、地域課題を解決した実践例である。ただし、この状況を持続的なものにするには「ネットワークを通じた相互の資源交換によって全体の利益が生まれ」「ある二者間の関係維持に第三者がコストを負担し」「特定のメンバーの損失を小さく」しなければならず、STEPでは本事例の持続に向けて現在も活動を続けている。

成果

- (1) 地域住民が休み、談笑し、待ち合わせができる憩いの場の創出
- (2) 違法駐輪の減少
- (3) 持続的かつ積極的な社会的信頼ネットワーク形成のための理論構築



本事業が介入する前の、りそな銀行南森町支店前の違法駐輪

今後の展望

- (1) 持続性の担保

研究者の紹介



社会学部 教授
与謝野 有紀
(よさの ありのり)

東京都生まれ。文部科学省の助成を受けた関西大学社会的信頼システム創生センター (STEP) のセンター長として、地域活性化に対する社会的信頼の機能を実践的に明らかにする研究を展開した。膨大な数のプロジェクトを統括し、安全安心や過疎化が進む地方のあり方など、社会的課題の解決に全精力をもって取り組む。



社会学部 教授
林 直保子
(はやし なほこ)

北海道出身。専門は社会心理学。近年は、社会の中で信頼が醸成される条件とはなにか、また、人の信頼感を支えている心理メカニズムとはどのようなものか、という研究テーマに取り組んでいる。

社会的信頼システム創生センター（STEP） ～天満の名水復活～

かつて大阪天満宮より湧き出た天満の名水を復活させ、大阪の地域活性化に役立てるプロジェクトです。



「天満天神の水」の取水口となる御神水舎「ガラスの祠」

活動の概要

目的	大阪の歴史の再評価による地域活性化
連携メンバー	大阪天満宮 / 天神橋筋商店連合会 / 特定非営利活動法人 天神天満町街トラスト ガラス作家 岡本覚氏 関西大学社会的信頼システム創生センター (Research center for Social Trust and Empowerment Process : 略称 STEP) 関西大学社会学部教授 与謝野有紀 / 関西大学環境都市工学部教授 楠見晴重
活動地域	大阪天満宮 (大阪府大阪市北区) 天神橋筋商店街 (大阪府大阪市北区)
活動期間	2011年～ (継続中)
費用	文部科学省戦略的研究基盤形成支援経費等

連携の経緯

かつて大阪天満宮には「五知の水」と呼ばれる井戸があり、「大坂四清水」の一つに数えられる名水が湧き出していた。また、文化・文政期の天満地区には130軒以上の酒蔵が立ち並び、酒造りが盛んだったとも言われる。STEPは天神橋筋商店連合会の土居会長との当時の天満に関するやりとりの中で地下水の復活を決意。大阪天満宮の寺井種伯宮司てらい たねのりの協力も得て、天満宮をフィールドとする天満の名水復活事業をスタートさせた。

解決すべき課題

- (1) 枯渇し、忘れられていた天満の名水の復活



揚水試験



御神水舎完成奉告祭のようす

大学の役割

かつて酒造りが盛んに行われた天満地区であったが、高度経済成長期における多量の地下水の汲み上げによって、大阪天満宮の井戸も数十年前に枯渇し、今では天満の名水を知る人は少なくなりました。

STEPでは、関西大学学長である楠見より、現在の大阪市内の地下水位は、地下水採取の規制条例によって著しく回復しているとの示唆を受け、STEPにおける各種の活動を通じて構築した社会的信頼ネットワークを基盤に、天満の名水復活を模索することとした。

STEPは地盤工学を専門とする楠見から、大阪天満宮では良質な地下水の採水可能性が高いとの示唆を受け、天神橋筋商店連合会と連携して本事業を大阪天満宮に提案。宮司の寺井種伯氏の賛同を得て、正式に大阪天満宮より調査依頼を受けることとなった。

2011年8月、大阪天満宮境内での水質調査を行い、安心安全に配慮した浄化システムを通し、良好な飲料水として利用できるとの結果がでた。同年10月に本掘を開始した。

「天満天神の水」と名付けられた天満の名水は、まろやかな軟水で、大阪の昆布出汁文化に適したものであり、祭りの神事で利用されるほか、氏子や参拝者にもペットボトルに詰めて提供されている。また、NPO法人天神天満町街トラスト（代表理事：土居年樹氏）では、市内の老舗料亭への普及事業も展開しており、今後はソーダ水や地ビールへの利用などを計画している。

STEPでは、名水の復活が「水都・大阪」の歴史の再評価ひいては大阪の地域活性につながるよう、産学神連携を推進していく。



天満天神の水

成果

- (1) 天満の名水復活
- (2) 商店街を中心とした新事業の創生

今後の展望

- (1) 天満の水を活用した大阪や天神橋筋商店街の地域活性化

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
楠見 晴重
(くすみ はるしげ)



社会学部 教授
与謝野 有紀
(よさの ありのり)

専門は地盤環境工学。地盤に関係する社会基盤施設の安全性に関わる問題や、自然災害の防止技術に関わる問題、地下水利用および地盤・地下水汚染に関わる問題に関して、景観、環境に配慮した最先端学理・技術の研究を行っている。関西大学学長。

東京生まれ。文部科学省の助成を受けた関西大学社会的信頼システム創生センター（STEP）のセンター長として、地域活性化に対する社会的信頼の機能を実践的に明らかにする研究を展開した。膨大な数のプロジェクトを統括し、安全安心や過疎化が進む地方のあり方など、社会的課題の解決に全精力をもって取り組む。

地域文化・芸術資源を可視化し、地域の結びつきを創生する

なにわ・大阪にかかわる文化・芸術資源をICTによって掘り起こし、地域の誇りと愛着を醸成することで社会的協力のプラットフォームを生み出す。



関テレ扇町スクエアにて開催した「淀川今昔明日ものがたり」

活動の概要

目 的	エリア・アセット（地域文化資源）を超高精細デジタル化し、多様な社会層を学生の力をかりながら接続する
連携メンバー	関西大学VOLCANOプロジェクト / 関西大学社会的信頼システム創生プロジェクト（STEP） 一般財団法人林原美術館 / ビジュアライゼーション・ラボラトリー大阪（VisLab OSAKA） 関西大学社会学部教授 林直保子 / 同学部教授 与謝野有紀 / 関西大学文学部教授 中谷伸生 関西大学総合情報学部教授 林武文 関西大学シニアURA 角谷賢二
活動地域	なにわ・大阪と文化、経済など重層的かかわりがある地域
活動期間	2014年4月～（継続中）

連携の経緯

関西大学は、天神橋筋商店連合会および大阪市北区とすでに連携協定を結び、同地域の地域活性化に取り組んできました。この展開として、なにわ・大阪のエリア・アセットの掘り起こしにあたり、同地域に焦点をあて文化資源の展示を行うこととなった。また、林原美術館（岡山市）所収の天満天神にかかわる文化資源の超高精細デジタル化を行い、ICTに関して先進的であるVislab OSAKAと協力しその展示を行うにいたった。

解決すべき課題

- (1) 地域に埋もれている文化資源の掘り起こしと再評価
- (2) 地域文化資源（エリアアセット）のICTを用いた可視化
- (3) エリアアセットの鑑賞者の育成
- (4) エリアアセットを用いた社会層の交流
- (5) 文化を基礎とした協力基盤の形成



林原美術館で超高精細画像を鑑賞する高校生①



大岡春卜の絵巻物『浪花及瀬川沿岸名勝図巻』撮影の様子

グランフロント大阪にて開催した「淀川今昔明日ものがたりⅢ」

大学の役割

本プロジェクトは、文化を切り口としているが、その背景にあるのは、日本全体にみられる孤立化の問題を「地域創生」の共通の基本課題ととらえ、人文科学、社会科学、情報学の共同研究に基づき、地方と都市が連携しながら地域内の課題を解決しようとするものである。また、地域創生を4つの発展段階に分けて整理し、「地域文化の再評価」、「地域文化への誇りと地域への愛着の醸成」、「誇りと愛着を基礎にした協力的行動の社会関係基盤の構築」、「社会関係基盤をプラットフォームとした社会問題の解決、社会効率の上昇」の各段階をクリアしながら着実な課題解決をめざそうとするものである。特に、第一段階である地域文化の再評価は、スタートとして極めて重要であり、大学のもつ美術史的な知的資源が大きく機能する。さらに、地域文化への誇りと愛着の醸成は、地域文化に人々が触れる機会の拡大と、鑑賞者として地域の人々が育っていくことの両者が必要であり、前者に関しては、本学の情報学的技術が、また後者に関しては社会心理学的知見が適用される。

これらを通じた社会関係基盤の構築と、それにもとづく社会問題の解決は、本プロジェクトの展開形として、現在設計されつつあるが、ここにおいては社会学的モデルの適用が考えられている。大学が、多様な社会層を結びつけるハブとなること、特に、本学に深くかかわるなにわ大阪の文化を中心としてこのようなハブになっていくことが大学の中心的な役割となる。



林原美術館で高精細画像を鑑賞する高校生②

成果

- (1) 超高精細デジタル展示「淀川今昔明日物語」シリーズ
- (2) 林原美術館特別展「すべて魅せます平家物語絵巻」特別協力

研究者の紹介



社会学部 教授
林 直保子
(はやし なほこ)

北海道出身。専門は社会心理学。近年は、社会の中で信頼が醸成される条件とはなにか、また、人の信頼感を支えている心理メカニズムとはどのようなものか、という研究テーマに取り組んでいる。



社会学部 教授
与謝野 有紀
(よさの ありのり)

東京都生まれ。文部科学省の助成を受けた関西大学社会的信頼システム創生センター（STEP）のセンター長として、地域活性化に対する社会的信頼の機能を実践的に明らかにする研究を展開した。膨大な数のプロジェクトを統括し、安全安心や過疎化が進む地方のあり方など、社会的課題の解決に全精力をもって取り組む。



文学部 教授
中谷 伸生
(なかたに のぶお)

日本美術史、特に江戸時代から近代までの日本絵画史と芸術論を専攻。江戸時代の文人画・写生派・狩野派から、明治以降の近代日本画・洋画の調査研究を進めている。



総合情報学部 教授
林 武文
(はやし たけふみ)

専門は視覚認知情報処理。視覚を中心とした人間の情報処理メカニズムを解明し、ヒューマンインタフェースにおける情報の提示方法を明らかにすることを目的に研究を行っている。

関大前ラボトリ 「まち・かん114（いいよ!）」（※）

関大前商店街に誕生した、地域と大学の交流拠点「まち・かん114（いいよ!）」。
地域と関大の相互理解の強化に向けて、関大生の自由なアイデアを実現するコミュニティスペースを運営しています。



町に開いたオープンなスペースです

※まち・かん114（いいよ!）…
地域×関大生をテーマにした関西大学のコミュニティスペース。
名称の由来は「まちなかコミュニティ関大前」の略称に拠点の住所の一部を組み合わせたもの

活動の概要

目 的	地域住民の方々と関大生が相互の理解を深めること (地域住民の方々に関大生を知ってもらう / 関大生が地域を感じる)
連携メンバー	地域住民の方々 / まち・かん114スタッフ / 関西大学社会学部教授 与謝野有紀 関西大学政策創造学部教授 奥和義 / 関西大学環境都市工学部准教授 岡絵理子
活動地域	まち・かん114を中心に関大前周辺エリア全域 (大阪府吹田市)
活動期間	2014年8月～ (継続中)

連携の経緯

近年、地域における住民の役割は、地域環境の整備やコミュニティ形成の主体者へ変遷を遂げており、大学もその一翼を担うことが求められている。一方で、大学がその責務を果たすにはいくつかの解決すべき課題を抱えており、地域との良好な信頼関係の構築はその最大のものである。そこで関西大学では、関大前商店街内に活動拠点を設置し、学生独自の視点による魅力ある関大前のまちづくりを展開するプロジェクトを開始した。

解決すべき課題

- (1) 大学周辺地域の魅力あるまちづくりへの参画
- (2) 地域と大学の信頼関係の構築



地域、学校、教員、学生間で協議会を行っています



施設の内壁のペンキ塗りにはいろんな人が参加しました

大学の役割

本活動の始動にさきがけ、商学部、社会学部、政策創造学部、環境都市工学部から学生が選出され、拠点の開設準備を行うこととなった。また、教員からは、与謝野有紀（社会学部）、奥和義（政策創造学部）、岡絵理子（環境都市工学部）が、アドバイザーとして参加している。拠点開設では学生が中心となり、「デザインをどうするか」「誰のために何を行うか」「学生が関わる意義は何か」など、活動の根幹に関わる部分について日々議論を深めていった。

1年間の準備期間を経て、施設のリノベーションをはじめ、活動の理念および拠点の運営方法を決定。活動内容については、地域の方に関大生を理解してもらうため、学内の各種団体による自由な利用を促進することとした。活動を通じて、拠点が解決すべき地域の課題を発見・解決していくことを目指しており、拠点の外観も活動内容に応じて柔軟にその装いを変化させていく予定である。

2015年6月の拠点オープン後は、関大生の手によってさまざまな利用方法が示されている。七夕に開催された社会学部生企画のイベント「関大浴衣デー」では、拠点にイベント本部が置かれ、軒先には多くの地域住民の願い事を託す短冊を吊るすための笹が飾られた。

また、8月には「まち・かん114」主催イベント「POP OUT TOWN（ポップアウトタウン）」が開かれ、地域の小学生と共に、関大前商店街の写真を用いたジオラマクラフトを制作した。ジオラマクラフトには参加者の「関大前にこんなものがあればいいな」が自由に置かれ、関大前商店街の理想の未来像が表現された。

現在、拠点は大学の授業日に合わせてオープンしており、これまで以上に地域住民と関大生が集うコミュニティスペースを目指して活動している。

成果

- (1) 地域と大学の交流拠点設置
- (2) 各種イベントの実施

今後の展望

- (1) 関大前商店街の方々とのさらなる連携体制構築
- (2) 関大生の拠点に対する認知度向上
- (3) 多くの学生団体による拠点の利用
- (4) 拠点運営メンバーの募集



いろんな世代に開いたスペースです

研究者および学生の紹介

まち・かん114（いいよ！）

政策創造学部 教授
奥 和義
(おく かずよし)

社会学部 教授
与謝野 有紀
(よさの ありのり)

環境都市工学部 准教授
岡 絵理子
(おか えりこ)

関大前通りのまちづくりの拠点として、学生の活動や学校の情報を発信していき、地域との連携をとっていくコミュニティスペース。

専攻は国際経済学。主たる研究テーマは明治期から現在までの日本貿易の発達史で、日本貿易の史的発展を企業活動の国際的展開、消費者行動の変化、各国政府の貿易政策などの視点から多面的にとらえることに学問的興味を持つ。

地域活性化に対する社会的信頼の機能を実践的に明らかにする研究を行う。膨大な数のプロジェクトを統括し、安全安心や過疎化が進む地方のあり方など、社会的課題の解決に全精力をもって取り組む。

都市計画と住宅を専門とする。実際のまちの動きを、まちの人々とのかかわりを通して学生たちに伝えたい、体感してほしいと考え、教育・研究を行う。



池田市細河地区 地域産業の発見と発信



池田市細河地区の観光活性化に向けて、地域の児童を巻き込んだ環境教育および地域産業振興に関する活動を展開しています。

耕作放棄地で育てた大根の収穫

活動の概要

目的	大阪府池田市細河地区における地域産業の振興による観光活性化
連携メンバーおよび役割	池田市役所・・・小学校・関係団体との交渉・企画実施の支援 細河地域コミュニティ推進協議会・・・企画全体のマネジメント・地域協力者との調整 関西大学政策創造学部 橋口勝利ゼミ・・・地域振興プログラムの企画と運営
活動地域	大阪府池田市細河地区
活動期間	2009年～（継続中）

連携の経緯

池田市と関西大学は、地域分権の推進に関する条例制定に向けた相互協力や前池田市長の客員教授への招へいなどを契機として2008年に連携協定を締結。さらなる地域分権推進に向け、細河地区の活性化に大学として取り組むことについて打診があり、活動が始まった。

解決すべき課題

- (1) 地域産業の担い手減少
- (2) 新たな産業の育成（農業活性化）



収穫した大根から土を落とす



細河産植木を利用したクリスマスリース作り

大学の役割

活動当初、橋口ゼミは池田市の橋渡しにより、細河地域コミュニティ推進協議会との協力関係を構築。地域の児童への環境教育を兼ねた観光活性化策を提言すべく活動を開始した。

活動初期はお寺や田園風景などを活用したウォークラリーの実施によって地域資源の発掘を果たした。それらの活動によって豊富な地域資源に触れる中で、活動は地域産業体験型の活動に発展。植木を使ったクリスマスツリーや炭焼きアートを地域の児童とともに企画・実施した。

そして現在、活動はさらに発展を遂げ、細河地域コミュニティ推進協議会が主催するイベント「ほそかわフェア」内で、地域の児童と協働して地域の名産である細河大根の栽培と収穫を行っている。収穫された大根は池田市全域の小学校の給食材料として提供され、その日は学生が考案する大根の献立が採用される予定である。

これらが実現するまでの市や給食センターとの調整は、橋口ゼミの学生が担った。

本活動が当初より児童への環境教育を兼ねていたことは先述のとおりである。これは児童に対し、故郷への誇りや肯定的なイメージを与え、未来の地域の担い手を育成することを狙ったものであり、長期的な地域振興策であるといえる。今後も地域産業に根付く活動を展開していくことを予定している。

成果

- (1) 地域資源の発掘
- (2) 各種企画の実施
- (3) 細河大根の栽培・収穫と給食でのふるまい



大根の種まき

現場の声

・橋口ゼミの学生

将来の細河を担う子供たちに、いかにして細河の魅力、伝統を伝えていくことができるのかを常に意識して活動しています。単に大学生の口から、その地域について話すことには意味がありません。何かを伝える場合は実際に現地の人の口から子供たちに向けてメッセージを発信してもらったり、それが実現できないときは現地の人に取材を行って得た知識を、イベントを通じて私たちが子供たちに伝えます。今年度も子供たちには里山の保全問題や細河で有名な植木に関して「現地の声」を通じた体験学習をしてもらいます。その中で子供たちが細河という地を少しでも理解し、細河という地に少しでも興味を持ってもらえたら嬉しいです。

研究者の紹介



政策創造学部 准教授
橋口 勝利
(はしぐち かつとし)

専門は地域経済史。ゼミのモットーは「企画力」と「行動力」です。地域では多くの出会いがあります。熱い気持ちで地域の課題に取り組んで、一緒に成長していきましょう。

「環境先進都市いけだ」を目指した 小学校出前授業プロジェクト

関西大学政策創造学部橋口勝利ゼミナール、池田市市民生活部環境にやさしい課、NPO法人いけだエコスタッフと協働で、これまで4年間（2011年度～2014年度）池田市子ども環境基本計画に取り組んできました。



小学校出前授業の様子

活動の概要

目 的	「池田市子ども環境基本計画」を、子どもたちの具体的学びに繋げて市内への浸透を図ること
連携メンバー および役割	池田市市民生活部環境にやさしい課・・・小学校・関係団体との交渉、企画実施の支援 NPO法人いけだエコスタッフ・・・企画全体のマネジメント、小学校との事前交渉、地域協力者との調整 池田市立緑丘小学校、池田市立細河小学校・・・環境教育プログラムの検討と実施 関西大学政策創造学部 橋口勝利ゼミ・・・環境教育プログラムの企画と運営
活動地域	大阪府池田市
活動期間	2011年度～（継続中）

連携の経緯

池田市は、環境都市を目指して、「池田市新環境基本計画」を策定。これに伴い「子ども環境基本計画」も合わせて策定された。橋口ゼミは、この「子ども環境基本計画」策定に参画したこともあり、この計画を具体的に実現させるために、小学校への環境教育の企画・運営を担当することになった。

解決すべき課題

- (1) 環境教育にむけた教育プログラムを作ること
- (2) 子どもたちの意欲を高めるような授業内容を作ること
- (3) 地域企業や住民との連携を図り、教育プログラムに巻き込むこと



小学校出前授業の様子（グループワーク）



小学校出前授業の様子（クイズ大会）

大学の役割

池田市内小学校へ向けた環境出前授業は、学生、池田市役所環境にやさしい課、NPO法人エコスタッフと協働で、2011年度から実施している。授業は、1年間で5回行った。

授業内容の立案、授業運営は基本的に学生が担当する。授業形式は、小学生を4～6名のグループに分け、環境に関わるテーマについて議論する。そして、提案、実行、報告へと繋げていく。大学生は、講義の運営、各グループのファシリテーターとして参加し、学習効果の向上を図っていく。

特に2013年度の事業は、池田市細河地域を拠点とする各事業所6カ所と連携して実施するなど、地域とのつながりの深化を目指すものであった。今後も環境学習を通じて地域コミュニティの深化を図ることを本事業の目的としていきたい。

本事業は、学生が企画、交渉、授業運営を行う中で、池田市役所環境にやさしい課職員、NPO法人エコスタッフ、そして小学校教員の方々から手厚い助言や協力を得ることで、活動実績が高まっている。そして小学生への教育活動を通じた交流も深まって、学生たちの取り組み意欲も年々高まっている。

今後も環境学習の成果が上がるよう、学生とともにチャレンジしたい。

成果

- (1) 2011年度：小学校内の廃油の回収量増加、電気料金減少などを実現
- (2) 2012年度：小学生は、グループごとに緑丘小学校区の将来図を作成、報告へ繋げた
- (3) 2013年度：現場での企業取材を重ね、解決案をプレゼンテーションすることで、地域企業の課題や解決策を小学生自身の課題としてとらえて実践する地域学習につながった
- (4) 2014年度：家庭内で発生する「ごみ」を利用してリサイクル品を作成することで、小学生たちに問題解決への実践力を養うことに繋がった。

今後の展望

- 課題
- (1) 「環境」を子供たちにわかりやすく伝えること
 - (2) 地域住民や地域企業との連携を深めること
- 展望
- (1) 環境学習プログラムを池田市全域、そして全国へ発信すること
 - (2) 大学生の自主性、企画力、行動力を高めていくこと

研究者の紹介



政策創造学部 准教授
橋口 勝利
(はしぐち かつとし)

専門は地域経済史。ゼミのモットーは「企画力」と「行動力」です。地域では多くの出会いがあります。熱い気持ちで地域の課題に取り組んで、一緒に成長していきましょう。

現場の声

・橋口ゼミの学生

環境授業に携わせていただく中で、授業内容を自分たちで一から企画実施することの難しさ、やりがいを強く感じています。このような経験は初めてのため、試行錯誤しながら取り組んでいますが、私たちが一生懸命伝えようとすると、子どもたちも一生懸命理解しようとしてくれる姿がとても印象的でした。また、伝え方によって子どもたちの行動も変化するということを学びました。この授業では、私たち大学生、市役所、NPO、小学生が一体となって一つの授業を作り出し、皆で成長できたと思っています。子どもたちにとって、大人になっても記憶に残るような授業を目指しています。

京都伏見 日本酒振興プロジェクト

食文化の変化や多種多様なアルコール飲料の出現により、現在の日本酒市場は難しい局面に差し掛かっています。そんな日本酒の認知度向上に向け、学生目線での再興策提言に取り組んでいます。



齊藤酒造「蔵開き」にて学生が企画したイベント（日本酒酒粕ハンドパック体験）

活動の概要

目的	日本酒の認知度向上
連携メンバー および役割	齊藤酒造株式会社・・・学生との協働 関西大学政策創造学部 橋口勝利ゼミ・・・蔵開きイベントでのコンテンツ企画・実施
活動地域	京都府京都市伏見区
活動期間	2009年～（継続中）

連携の経緯

齊藤酒造株式会社より、以前から親交のあった橋口ゼミに対し、日本酒のイメージアップに学生の協力を得たいとの打診があり、同社が主催する蔵開きイベントでのコンテンツ企画運営に携わることとなった。

解決すべき課題

- (1) 若い世代の日本酒離れ
- (2) 日本酒に対するイメージアップ
- (3) 日本酒のまち・伏見の地域振興



齊藤酒造 蔵開きの風景



みのおFMに出演し、情報発信を行った橋口ゼミ生

大学の役割

この活動は、例年開催される齊藤酒造株式会社主催の蔵開きイベントにおいて、齊藤酒造株式会社との連携企画提案と当日の実施運営に取り組むものである。企画は学生が中心となって提案するが、そこに至るまでには齊藤酒造株式会社の社員との議論や日本酒に関する調査なども実施しており、連携先のニーズを汲み取ることに配慮している。

当日は蔵開きということもあり、これまで継続して日本酒の利き酒を行ってきたが、会場装飾や齊藤酒造史をテーマとする展示のほか、日本酒の飲み方提案など、従来の利き酒とは一味違う企画をプロデュースしている。また、2013年からは日本酒検定や美容酒粕パックなどが学生の提案で始まり、当日は例年に類を見ない盛り上がりを見せた。特に女性や若年層の参加が多くみられたことが大きな収穫であった。

広報面では、年度によっては齊藤酒造株式会社の社長と学生リーダーがイベント当日にラジオ出演するなど、企画の本筋から離れた部分でも連携活動を展開している。

齊藤酒造株式会社は2015年度に120周年を迎え、蔵開きイベントはさらに規模が拡大することが予想される。今年度も、先輩の意志を引き継ぐ橋口ゼミ生が新たな企画提案を行う予定である。

成果

- (1) 蔵開きイベントでの継続的なコンテンツ発信
- (2) 蔵開きを通じた地域内交流の促進

今後の展望

- (1) 若者の日本酒離れを食い止められるような企画やアイデアの創出
- (2) 日本酒を生活の中で身近に感じ、親しみを持ってもらえるようなイメージアップを図る

現場の声

- ・橋口ゼミの学生

利き当てチャレンジや酒粕ハンドパックでは、毎年男女問わず幅広い世代の方が参加されます。これらの企画を通し、日本酒文化を発信するなかで、去年の春から日本酒に関する知識を深めることができるイベントを開始しました。蔵見学ツアーにおいて、私たち伏見班は日本酒造りの説明を学生目線で行うことで、とても緊張しますが、お客様に楽しく伝えることができ、喜んで頂けたときの達成感とやりがいは何ものにも代えがたいものです。蔵開きを通して、日本酒を身近に感じて頂けたら嬉しいです。

研究者の紹介



政策創造学部 准教授
橋口 勝利
(はしぐち かつとし)

専門は地域経済史。ゼミのモットーは「企画力」と「行動力」です。地域では多くの出会いがあります。熱い気持ちで地域の課題に取り組んで、一緒に成長していきましょう。

東日本大震災避難者とふるさとをつなぐ活動 ～歌や運動、遊びの交流事業を通して～

東日本大震災の被災地から大阪府堺市に避難してきている方とふるさとをつなぎ、子供たちの学習環境・体力向上に寄与する活動を行っています。



福島県南相馬市立高平小学校での合唱のワークショップと音楽鑑賞授業①

活動の概要

目的	大阪府堺市で避難生活を続けておられる東日本大震災被災者の子供たちの体力促進、学習支援などの活動を実施し支援につなげる
連携メンバー および役割	堺市危機管理室…各機関間の調整 社会福祉協議会…会場（堺市総合福祉会館の3Fにあるプレイルーム）の提供 避難ママのお茶べり会…広報（ブログやメールマガジンなどを利用）と会場の確保 関西大学政策創造学部 橋口勝利ゼミ…イベントの企画・運営、避難してこられたママや子どもたちの支援（学習面、体力面など多方面からのサポートを行う）
活動地域	大阪府堺市 / 福島県
活動期間	2014年～（継続中）

連携の経緯

大阪府堺市は、府内でも東日本大震災の避難者の方が多いエリアであり、その方々の多くは、母子形態での生活を余儀なくされ、経済的負担や住環境問題が大きな課題となっている。橋口ゼミは以前から継続的に福島県での支援活動を展開しており、日常的に上記のような悩みに触れていた。そこで、堺市と関西大学の連携事業の一環として、堺市の避難者の方々への支援活動を行うこととした。

解決すべき課題

- （1）時間経過とともに薄まる東日本大震災避難者の方への支援や関心
- （2）避難者の方の子どもへのサポート不足（引っ越しや転校による環境変化、体力低下などの問題）
- （3）保護者同士の交流の場やイベントの不足



昨年の「天満音楽祭」に出演した橋口ゼミの学生



福島県南相馬市立高平小学校での合唱のワークショップと音楽鑑賞授業②

大学の役割

避難者は前述のような課題を抱え、今後も物心両面から継続的な支援を必要としているが、震災から4年が経過し、震災の記憶が風化しつつある。

そこで橋口ゼミでは、子どもを対象とした体力・学力の向上を促進するイベントを企画。その時間に母親同士の交流の場も設け、保護者の精神的負担軽減にもつながるような支援を心がけている。

また、被災地から距離のある大阪で支援を行うには、現地の実情を知ることも有用である。橋口ゼミは福島県における子どもの心のケアや教育支援活動の現場を訪問し、福島と大阪の双方向での情報伝達を可能にする調査活動およびワークショップを行った。

福島県南相馬市立高平小学校では、合唱のワークショップと音楽鑑賞を行い、歌の力によるふれあいと交流を行った。その様子は2015年10月開催の「天満音楽祭」にて上映され、ゼミ生たちが肌で感じた被災地の様子や、被災地の方々の思いを歌声と共に大阪の地に届け、共有することができた。

これからも橋口ゼミでは、子どもたちと一緒に勉強したり、遊んだりする場や、母親同士のつながりの場を創出しながら、子育て支援の課題・方法の模索と、避難者とふるさとをつなぐ活動を継続していく予定である。

成果

- (1) 避難者の子供たちの地域文化への理解促進
- (2) 避難者保護者間のコミュニケーション促進
(被災地の現状・展望への意見交換を含む)

今後の展望

- (1) 年月とともに変化している被災地および避難者の方の情報を発信
- (2) 子どもを対象とした体力・学力の向上を促進するイベントの継続

現場の声

・橋口ゼミの学生

私達は、自主避難の方への心の支援、そして東日本大震災発生から5年が経過した福島県の現状の発信を活動の軸としています。張りつめた環境で生活をしているからこそ私達学生と交流し、普段見られない子供達の笑顔やゆっくりとした時間をすでもらっています。

また、福島に直接足を運ぶことで、地域の過疎化や風化の問題に直面しました。

そして福島は、今、現実的な問題とともに、“心の復興”へと進んでいます。月日がたちメディアの報道が少なくなっていく中で、天満音楽祭を通し、被災者の思い、現状、そして私たちが住む大阪の現状を発信しています。

研究者の紹介



政策創造学部 准教授
橋口 勝利
(はしぐち かつとし)

専門は地域経済史。ゼミのモットーは「企画力」と「行動力」です。地域では多くの出会いがあります。熱い気持ちで地域の課題に取り組んで、一緒に成長していきましょう。

コミュニティFMの番組づくりへの参加

ゼミ活動の一環として、コミュニティFMの番組づくりに参加して、防災や商店街の活性化等のテーマに関して、若者目線で何ができるのかを提案する活動。



コミュニティFM 放送の様子①

活動の概要

目的	学生が、フィールドワークによって実際の社会について学ぶとともに、社会にその成果を還元する
連携メンバー および役割	千里ニュータウンFM放送株式会社・・・番組枠を提供することによって学生のコミュニティFM放送への参加機会を提供 関西大学政策創造学部 橋本行史ゼミ
活動地域	大阪府吹田市
活動期間	2012年4月～（継続中）

連携の経緯

ゼミ学生が参加する「防災」をテーマとする学生政策コンペにおいて、大学内でのサテライトスタジオの設置を政策提案して優秀賞をいただいた。その調査時における取材活動が信頼を生んで、FM千里（正式名称は、千里ニュータウンFM放送株式会社）から、ゼミ学生が主体となった番組制作の依頼を受けた。

解決すべき課題

- (1) 地域密着型番組の作成
- (2) 若者目線の活用
- (3) まちづくり、地域活性化への貢献



コミュニティFM 放送の様子②

大学の役割

学生が実際に作成したコミュニティFMの番組が、「やっぴんねん関大！“防災の巻”」である。放送部の部員にMCを依頼し、ゼミ学生が取材内容を報告した。大学で内容を録音して放送局に持ち込み、2012年4月14日から9月22日まで6か月間に亘って放送された。番組内容は、吹田市の災害史について郷土史研究会会長への取材、吹田市の防災対策についての総務部危機管理室主幹への取材、当時の共通科目に採り上げられた防災授業の紹介、阪神淡路大震災の教訓について人と防災未来センター（兵庫県）への取材、福島県の被災地へ訪問した学生とのトーク、現地でのボランティアの話などに広がった。2013年4月からは、北千里のまちづくりをテーマにして、局のアナウンサーとゼミ学生が生放送でトークを繰り広げる新しい企画が始まった。番組名は「やっぴんねん関大！“まちづくりの巻”」で、毎週水曜日16時40分～17時の間、2013年4月から12月末まで放送された。商店街やニュータウンに賑わいをもたらすことと、商店街でどのようなビジネスを起こせるかの2つのアプローチから、北千里のショッピングセンターの活性化を目的にして、各4人で2チームを組んで、放送に取り組んだ。4月から6月までは放送局を出て、商店街のドームの下に仮設スタジオを組んで放送した。7月からは移動中継車の中でも放送をおこなった。2014年4月からは、深井麗雄ゼミにバトンタッチして、「やっぴんねん関大！“おおさかまち探し”」を放送、コミュニティFMの番組づくりに取り組んでいる。

成果

- (1) 若者の参加による地元や商店街の方々への元気の誘発
- (2) コミュニティFM放送への参加という貴重な体験をすることによる学生の成長

今後の展望

- (1) 学生参加の社会連携活動の難しさは、企画や活動を次の世代にどうバトンタッチするかにある
- (2) 学生の番組づくりは、コミュニティFMの活動領域を今後どう広げていくかの実験でもある

研究者の紹介



政策創造学部 教授
橋本 行史
(はしもと こうし)

約20年にわたる公務員生活を経て大学教員へ。2010年、関西大学に着任。専門は行財政改革と地域活性化。最近では条件不利地域の活性化研究に力を入れている。

小学校英語指導のための 教員研修システム構築

小学校における英語指導を取り巻く環境は、近年めまぐるしい変化を遂げています。指導方法に課題を抱える現場の先生方の支援に向け、大学院生派遣による研修システム開発に取り組みます。



研修の様子（手本の実演）

活動の概要

目的	小学校（英語活動）における持続可能な校内教員研修システムの構築
連携メンバー および役割	吹田市内の教育課程特例校（※）・・・教員研修システム受入にかかる校内調整 ※教育課程特例校・・・学校や地域の特色を生かした特別の教育課程を編成することができる学校 （吹田市では小学1年生からの外国語活動などを編成） 吹田市教育委員会・・・関係者間の調整 関西大学外国語学部准教授 池田真生子（代表）／同学部教授 今井裕之（分担者）／ 同学部教授 竹内理（分担者）・・・教員研修システムのコンテンツ開発、小学校教員の意識および 指導状況調査、派遣大学院生の育成 関西大学外国語教育学研究科卒業生・・・派遣大学院生への事前教育 関西大学外国語教育学研究科大学院生・・・研修の講師役、研修教材作成
活動地域	大阪府吹田市内の教育課程特例校 / 関西大学千里山キャンパス
活動期間	2015年4月～（継続中）

連携の経緯

現在、小学校における英語教育を取り巻く環境は激しい変化にさらされており、現場では指導に関する多様な課題が生じている。これまで英語指導に関する研修の講師として多くの小学校を訪問してきた池田、今井、竹内は、それらの課題の解決に向けて研究テーマを設定。吹田市教育委員会の協力を得て、教育課程特例校の指定を受けた吹田市内の小学校をフィールドに、持続可能な英語教育研修プログラムを開発することとなった。

解決すべき課題

(1) 英語指導方法に関する研修制度の未整備



研修の様子（グループワーク）



研修の様子（導入）

大学の役割

本活動では現場の教員が抱える課題の可視化を起点として取り組みを開始した。

まず、現場の教員へのグループインタビューを通じた英語指導にかかる意識および指導状況調査を通じて、以下の課題を明らかにした。

- ①頻繁に変化する指導内容に対応した研修制度が未整備
- ②外部講師を招いた研修を実施したとしても人選および費用の面で継続が困難

そこで、持続的かつ（指導内容の変化に）柔軟な教員研修システムの整備を具体的施策として設定。従来の、教員が直接研修を行う形ではなく、英語教育を専門とする外国語教育学研究科の大学院生を派遣する方法を考案した。

現在は、派遣する大学院生に対して、外国語学教育研究科修士（教員経験者）で、小学校英語に関する専門的知識と豊富な実務経験を持ち合わせた外部講師による特別なトレーニングを課している。

今後は、独自の研修教材の作成を経て、2015年度秋季より、院生を小学校へ派遣して研修を実施する。

この活動は、小学校教員の英語指導に関するスキルを向上させ不安を軽減するだけでなく、教員を目指す大学院生にとっては、実務を身近に感じる経験を得ることとなる。また、吹田市にとっても研修のモデルケースが確立されれば市全体の教員の利益にも繋がっていくと考えられる。今回の取り組みを主軸として、英語指導に秀でた人材の輩出を目指していく。

今後の展望

- 課題
- （1）生活パタンの異なる小学校教員と大学院生間の各種調整
 - （2）研修システム確立にかかる経費捻出

- 展望
- （1）教員研修システム確立
 - （2）研修実施後の教員や大学院生などへの追跡調査

研究者の紹介



外国語学部 准教授
池田 真生子
(いけだ まいこ)

英語教育学を専門とし、学習方略の指導に関する研究を中心におこなっている。最近では、方略指導における他者の役割（協働学習）、小学校英語教育などにも研究の幅を広げている。



外国語学部 教授
今井 裕之
(いまい ひろゆき)

専門は英語教育学。教室でのコミュニケーションを通じた外国語学習を研究している。また、その成果を評価するスピーキングの開発も行っている。



外国語学部 教授
竹内 理
(たけうち おさむ)

専門分野は、英語教育学（学習方略、学習者要因）と外国語教育におけるメディアの利用。メディアを利用した教授方略やCALL/e-Learningの理論的枠組みに関する研究を行っている。

英語絵本の読み聞かせプロジェクト



絵本の読み聞かせの様子①

活動の概要

目的	英語絵本に親しんでもらう機会の提供
連携メンバー	吹田市立幼稚園 / 高槻市立幼稚園 / 関西大学外国語学部 石原敏子ゼミ
活動地域	吹田市立幼稚園 (大阪府吹田市) / 高槻市立幼稚園 (大阪府高槻市)
活動期間	2012年～ (継続中)

連携の経緯

関西大学外国語学部 石原敏子ゼミでは、主に英米で出版された絵本を扱い、絵本の持つ文化的意味を探る研究を行っている。研究の発展・成果の還元として、絵本の魅力を子どもたちに知ってもらうため、課外での英語絵本の読み聞かせを企画。外国語学部長を通じて受け入れを希望する幼稚園を探した結果、吹田市立幼稚園、高槻市立幼稚園にて実施することとなった。

解決すべき課題

- (1) 子どもたちが普段目にすることの少ない英語の絵本に接する機会の創出



絵本の読み聞かせの様子②



絵本の読み聞かせの様子③



英語を使ったアクティビティ

大学の役割

石原ゼミの学生が、幼稚園を訪問し絵本の読み聞かせを行っている。扱う英語絵本は、教員の助言を受けながら学生が中心となって選定。学生たちは園児らの関心を引くため、読み聞かせだけではなく、紙で人形を作る、絵本の場面を大きな絵にする、英語の歌やダンスを織り交ぜる等、楽しく英語に接することができるよう工夫を凝らしている。また、英語絵本に加え、学生が制作したオリジナル絵本を使った読み聞かせも行っている。英語絵本との触れ合いが、幼い人たちにとって異文化との関わりへの扉を開ききっかけとなることを望んでいる。

成果

- (1) 英語絵本を介した楽しい時間の共有
- (2) 子どもたちの異文化への関心の向上

今後の展望

- (1) 英語絵本の読み聞かせの継続
- (2) 子どもの創造性へとつながるアクティビティの導入



打ち合わせと事前練習の様子

研究者の紹介

外国語学部 教授
石原 敏子
(いしはら としこ)

専門は、英語・英米文学。
主に英米の絵本を研究しています。絵本は、子どものみならず大人の読物です。より多くの人に絵本が愛されるよう努力しています。

現場の声

・石原ゼミの学生

絵本選びをはじめとして、プロジェクトの計画・実施まですべて自分たちで行う中で、共働の楽しさを知りました。子どもたちの今後の学習に役立てたらうれしいです。

市民による環境政策研究への支援 ～千里リサイクルプラザ主导研究員・評議員として～

行政と市民が協力して取り組む、環境に関する研究や啓発活動に対して、積極的に
関与しながらサポートしています。



小学校での草木染めの出前講座

活動の概要

目的	市の環境に対する意識の啓発
連携メンバー および役割	公益財団法人 千里リサイクルプラザ・・・市民研究員の事務的サポート 千里リサイクルプラザ市民研究員・・・環境に関する研究活動および啓発活動の実施 関西大学外国語学部教授 内田慶市・・・市民研究員との協働と助言
活動地域	大阪府吹田市内
活動期間	2009年7月～（継続中）

連携の経緯

本活動の主要メンバーの一人である内田は2008年まで吹田市教育委員長を務めていた。任期終了後、吹田市より改めて依頼があり、千里リサイクルプラザ主导研究員・評議員に就任することとなった。

解決すべき課題

- (1) 市民研究員の自主的活動への高度な支援



環境市民講座の様子

大学の役割

千里リサイクルプラザでは、市民研究員が構成メンバーとなって活動を行う複数のプロジェクトチームを設置しており、内田は主担研究員・評議員として、研究活動および啓発活動に関与している。

まず、市民研究員は研究活動の検討と報告のため、プロジェクトチーム定例会（週1回）と全プロジェクトチームの代表者会議（月1回）を実施しており、内田はそこで各種助言等を行う。また、不定期ではあるが、専門分野を活かし、セミナーを開催するほか、キャンパスと北京をテレビ会議システムで繋ぎ、北京におけるエコ活動の報告会を主催することもあった。

また、研究成果を活かした啓発活動では、小学校における「総合的な学習の時間」に市民研究員が出向き、草履作り、草木染め、紙すきなどの出前講座を実施したり、布のリユース・リサイクルのフォーラムなどを実施。内田はそこにも参加し、活動のサポートや児童とのふれあいを行っている。

このように、あくまで市民主体の活動の側面サポートによって、市民の自主的な環境意識向上を促進している。

成果

- (1) 複数の啓発活動の実現による市民の環境に関する意識向上

今後の展望

- (1) 活動の継続と発展



小学校でのマイパネルの出前講座

研究者の紹介



外国語学部 教授
内田 慶市
(うちだ けいいち)

元々中国語学を専門とするが、この10年来は新しい学問体系の文化交渉学の確立を目指して奮闘中。特に近代の東西言語文化接触の研究を主要テーマとしている。中国近世語学会会長、東アジア文化交渉学会副会長、日本中国語検定協会理事等を務めるほか、吹田市教育委員等も歴任。博士（文学・文化交渉学）。

市民の健康増進と競技力向上のための スポーツ教室

～スポーツ科学の体現を目指して～

地域住民を対象に各種スポーツ教室を実施しています。からだの動きの基本から専門的な技術指導まで、スポーツ科学の理論と実践を統合した指導を行っています。



ソフトボール教室

活動の概要

目的	市民の健康増進・スポーツ振興・技術力向上
連携メンバー	堺市 / 各種スポーツ指導者 / 関西大学人間健康学部教授 小田伸午
活動地域	大阪府堺市内
活動期間	2011年～（継続中）

連携の経緯

本活動の中心を担う小田は、スポーツ科学の専門家であり、これまでトップアスリートの動きの研究など、スポーツの理論と実践に関するさまざまな実績を積み重ねてきた。そこで、小田は自身の所属する関西大学人間健康学部の所在地である堺市の地域住民に対し、自身の研究成果を還元するスポーツ教室を実施することとなった。

解決すべき課題

- (1) 地域住民の競技種目における競技力および指導力向上
- (2) 地域住民の健康増進
- (3) 地域のスポーツ振興



ゴルフ教室



バドミントン教室

大学の役割

大学の役割は主に以下の3点である。

①スポーツ教室の主催（ソフトボール、バドミントン、ゴルフ）

大学の資源を活用して各種目におけるスポーツ教室を主催している。市内の小学校～高校の運動クラブや社会人など、競技毎に幅広く対象を設定している。

②スポーツ科学に基づく競技者への指導および指導者の育成

機能解剖学に裏付けされた、基本的なからだの使い方や種目毎の適正な動き方などの実践的知識を与えている。また、動作分析装置（3次元動作分析）を用いた講習を交え、科学分析の実践化を図っている点も、本活動特有の取り組みである。なお、これらは各種目の指導理論の根幹を支えるものであり、教室に参加する指導者の指導力向上にも繋がっている。

③各種目を専門とする指導者のコーディネート

小田が形成してきた人脈および大学の資源の活用により、各種目の専門家や授業を通じて小田の理論を身に着けた体育会に所属する大学生などを招へいしている。これにより、教室では専門的な技術指導も可能としており、理論と実践の統合を実現している。

成果

- (1) 参加者の競技成績の向上
- (2) 参加する指導者の指導力向上

今後の展望

- (1) スポーツ科学に基づく指導を可能とする人材の増加

研究者の紹介

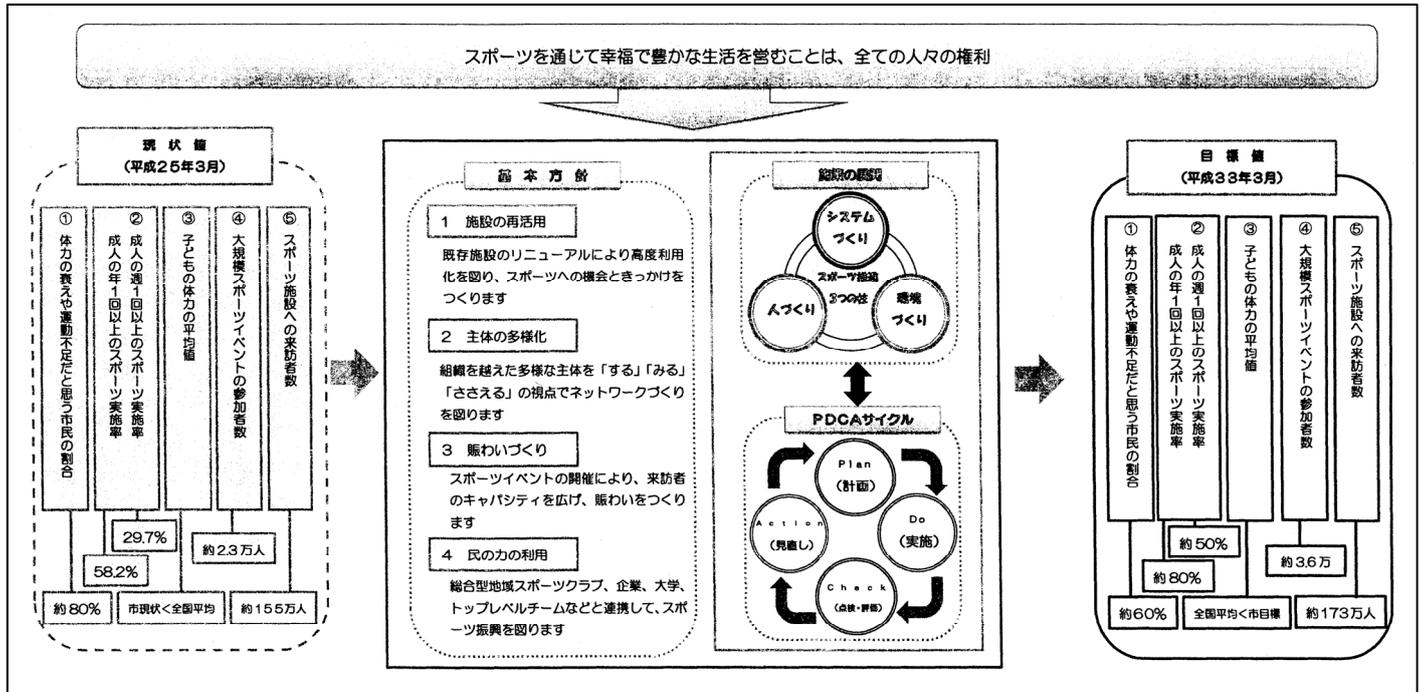


人間健康学部 教授
小田 伸午
(おだ しんご)

専門はスポーツ科学。科学と感覚（客観と主観）の総合的な分析により、これまでの日本のスポーツ界における数々の「錯覚」を発見。以来、学理と実践の調和を目指し、学内外で研究成果に基づく指導を行っている。

スポーツ推進審議会の運営

高槻市のスポーツ推進計画の策定と実施に向けてスポーツ推進審議会の会長を務め、会議の進行と意見の調整に寄与しています。



スポーツ推進審議会が策定した「高槻市スポーツ推進計画」概要図

活動の概要

目的	スポーツ推進計画の策定に向けた審議会の答申作成と、計画の実施過程における修正案の提言
連携メンバー	大阪府高槻市 / スポーツ推進審議会委員（高槻市民や学識経験者等） / 関西大学人間健康学部教授 西山哲郎
活動地域	大阪府高槻市
活動期間	2013年5月31日～（継続中）

連携の経緯

高槻市からスポーツ推進審議会委員への就任について依頼があったことを契機として連携が開始。

2011年スポーツ基本法の制定に伴い、全国の自治体にスポーツ推進にかかる取り組みが義務付けられ、同市においても審議会が設置された。その際、市内にキャンパスを置く大学から有識者を招致したいという同市からの要請を受け西山が委員就任。審議会の中で会長に選出され進行調整役を務めることとなった。

解決すべき課題

(1) スポーツ推進計画の策定

大学の役割

スポーツ推進審議会の中で会長を務め、スポーツ推進計画の策定と実施に向けて、会議の進行と意見の調整に寄与している。

高槻市は2011年から2020年までの10年間の総合戦略プランを掲げており、その中では「行き交う人々にぎわう魅力あるまち」という将来都市像が描かれている。審議会でもその方針に則り、2020年をゴールとするスポーツ推進にかかる答申を作成。サイクリング・ウォーキング道の整備や障がい者スポーツの振興に加え、子どもの体力向上や高齢者の健康寿命の延長等を目指して、具体的に数値化された目標を設定することとなった。

少子高齢社会におけるスポーツの推進計画は、壮年者の行う競技スポーツだけでなく、高齢者や障がい者を視野に入れた健康スポーツの促進が重要である。ウォーキングやハイキングのように以前ならスポーツと見なされなかったものを含め、楽しさを追求する視点を高槻市に継続して提供していく。

成果

- (1) スポーツ推進にかかる答申の作成と実施過程における修正案の提言

今後の展望

- (1) スポーツ推進計画の実施とその過程における問題解決
- (2) 高槻市でのスポーツ指導者不足解消に向けた教員志望学生の投入

研究者の紹介



人間健康学部 教授
西山 哲郎
(にしやま てつお)

スポーツ文化の価値を、個人の健康維持や人間関係に広がりをもたらしものとして評価するだけでなく、地域社会から国際社会までの政治や経済に影響を及ぼすものとして捉え、そのあるべき活用法を検討している。さらに人間の身体文化について、現代社会で通用する能力の探究や人類の未来を開くための可能性を追求している。

7 阿武山・今城塚古墳コース

藤原鎌足・継体大王に
会いに行こう

全 長：約10.3km
所要時間：約3時間55分



▲阿武山古墳
高槻と茨木の市境にある阿武山。その中腹にある古墳は「貴人の墓」の名で知られ、一説には藤原(中臣)鎌足の墓所ともいわれています。



▲史跡 新池ハニワ工場公園
日本最大級の埴輪工場であった国指定の史跡を公園として整備。窯や工房などを復元し、埴輪について楽しく学べます。
TEL:072-695-8274



▲関鶏野神社
アマテラスオオミカミなどを祀り、古くは八幡大神宮と呼ばれていました。すぐ北側に古墳時代前期の前方後円墳、関鶏山古墳があります。



▲今城塚古代歴史館
古代を体感できる歴史博物館。復元された石棺や埴輪、ジオラマの展示などにより、今城塚古墳の全容がわかります。
TEL:072-682-0820



▲史跡 今城塚古墳
総長約350m、総幅約340m。6世紀前半に構築された古墳としても、淀川流域の古墳としても最大級の前方後円墳。継体大王の墓と推定されています。

高槻市のハイキング道(一例)

「関西ワールドマスターズゲームズ2021」を盛り上げるプロモーション活動

～インターカレッジコンペティションへの企画プレゼンテーションを通して～

2021年に関西で開催されることが決まった「ワールドマスターズゲームズ（※）」を広く知ってもらい、競技への参加者や応援に来る方を歓迎し、関西地方を盛り上げるための活性化案を検討しています。



インターカレッジコンペティション2014決勝大会の様子

※ワールドマスターズゲームズ（以下、WMGとする）・・・国際マスターズゲームズ協会（IMGA）が4年ごとに主催する、30才以上の成人・中高年の一般アスリートを対象とした生涯スポーツの国際総合競技大会

活動の概要

目的	「関西WMG2021」を成功させることにより、スポーツで関西の経済や地域活性化に貢献する
連携メンバーおよび役割	一般社団法人関西経済同友会・・・「WMG」の誘致 関西広域連合・・・「WMG」の誘致と運営 スポーツコミッション関西・・・「WMG」招致活動の業務の一部委託、 インターカレッジコンペティションの実施 関西大学人間健康学部 西山哲郎ゼミ・・・インターカレッジコンペティションへの参加
活動地域	滋賀県 / 京都府 / 大阪府 / 兵庫県 / 和歌山県 / 鳥取県 / 徳島県 / 奈良県 / 大阪府大阪市 / 京都府京都市 / 兵庫県神戸市 / 大阪府堺市
活動期間	2014年～（継続中）

連携の経緯

関西広域連合による誘致活動が実を結び、2021年、関西で「WMG」が開催されることとなった。しかし、日本での「WMG」の知名度はまだ低い。そこで、関西経済同友会主導で設立したスポーツコミッション関西では、「関西WMG2021」活性化に向けた「インターカレッジコンペティション」を主催。関西大学からは人間健康学部の西山ゼミが参加することとなった。

マラニック

マラソンの要素にピクニックの娯楽を複合させたもの。
このマラニックではスピードは特に重要視されない。
遠足気分を周囲を楽しみながら走ることを特徴とする。



地域の町おこしとコラボ

例) アニメフェスタ (日本橋) +日本食・ご当地名産
阿波踊り (徳島) +日本食・ご当地名産
まんぱくin万博 +グルメ+文化体験

- ・日本食：天ぷら、寿司、ラーメン、うどん...
- ・催し：よさこい、和太鼓、三味線 (学生有志の協力)
- ・伝統文化体験：書道、縁日、茶道...



インターカレッジコンペティション2014 プレゼン資料

解決すべき課題

- (1) 「関西WMG 2021」の認知度の向上
- (2) 「関西WMG 2021」誘致による関西地域の活性化

大学の役割

生涯スポーツの世界大会「WMG」2021年大会は、関西で開催されることが決定した。アジアで初めての開催となるが、日本では2019年にラグビーワールドカップ、2020年に東京オリンピックを控え、「WMG」に対する注目は分散しているのが実情である。

しかし「WMG」は、単なるスポーツイベントではなく、ツーリズムの側面が非常に高いイベントであり、「関西WMG2021」の成功可否は関西経済の活性化を左右すると考えられている。そこで、「関西WMG2021」を成功させ、観光資源が豊富な関西の強みを活かし、国内外にPRしていくための「インターカレッジコンペティション」を開催することとなった。

2014年度のインターカレッジコンペティションは、「関西WMG2021の誘致による関西経済の活性化」をテーマに、従来の思考にとらわれない大胆かつユニークな発想と豊かな感性を持つ学生から広く集める目的で開催された。西山ゼミは、「WMG」に付随するイベントを通じて地元の文化を世界に紹介する試みや、スポーツ・ツーリズムという観点から関西地域の魅力を再発見する試みを行った結果、「組織委員会賞 (審査員特別賞)」や「プレゼンテーション賞」を受賞。

コンペを通じ、大会を一過性のイベントで終わらせることなく、スポーツを通じて関西を元気にしていこうという思いのもと、関西活性化のため、研究や調査を重ねている。

成果

- (1) インターカレッジコンペティション2014において「組織委員会賞(審査員特別賞)」、「プレゼンテーション賞(特別賞)」を受賞

今後の展望

- (1) 「関西WMG2021」成功に向けた、活性化プランの継続策定

現場の声



・中尾紗永子
(人間健康学部人間健康学科
スポーツと健康コース4年生)

私たちは、スポーツ文化の多様な活用法を研究するゼミでの学びを生かし、200人へのアンケート結果をもとに開催候補地やイベント内容を検討して、観光気分を楽しめる新感覚マラソン「マラニック」を提案しました。

研究者の紹介



人間健康学部 教授
西山 哲郎
(にしやま てつお)

スポーツ文化の価値を、個人の健康維持や人間関係に広がりをもたらしものとして評価するだけでなく、地域社会から国際社会までの政治や経済に影響を及ぼすものとして捉え、そのあるべき活用法を検討している。さらに人間の身体文化について、現代社会で通用する能力の探究や人類の未来を開くための可能性を追求している。

身体表現 / ダンス・ワークショップ



参加者同士の交流を軸とした身体ほぐしと創作表現を内容とするダンスのワークショップ。高齢者を対象とし、「しなやかな心と身体」の獲得を目指しています。

Performance Theater KAYMO（学生サークル）との活動の様子（堺キャンパス祭にて）

活動の概要

目的	身体表現を通じたコミュニケーションと表現力の向上 / その結果としての精神活動の活性化と健康の維持増進
連携メンバー	大阪府堺市 / 関西大学人間健康学部 原田純子ゼミ / Performance Theater KAYMO（学生サークル）
活動地域	関西大学堺キャンパス
活動期間	2011年～（継続中） 現在はひと月2回のペースで実施
費用	学内における各種資金

連携の経緯

人間健康学部は開設当初より、地域の活性化に貢献するための様々な連携事業を行ってきた。本講座は、その一つとして始まった。堺市の高齢人口の増加はもとより、それまで市がやっていた出張型の健康測定などのプログラムが無くなったこともあり、堺キャンパスが地域の健康管理の拠点になればという思いから企画・運営するに至った。

解決すべき課題

- (1) 心身の健康を目指す独自のプログラムの開発
- (2) 異年齢間の交流
- (3) 地域との連携強化



ワークショップの様子①



ワークショップの様子②

大学の役割

初年度は全5回の特別講座として、翌年度は月2回の年間活動としてそれぞれワークショップを実施した。2014年度には関西大学の創作ダンス・サークル「KAYMO（カイモ）」との連携活動に発展し、以降、継続的な活動となっている。また、参加者と学生による創作作品の堺キャンパス祭での披露やクリスマス・パフォーマンスも行っており、身体表現という「自己開示」のあり方が、心身の健康につながることを実証している。

これらの活動は、参加者同士または参加者と学生の交流の場に加え、学生にとっての、世代の異なる方への接し方や指導方法を学ぶ場を生み出している。さらに、参加者と学生が地域コミュニティを形成したことも重要なポイントである。この活動がお互いの「居場所」を創出したのはもちろんのこと、例えば、学生が参加者から干し柿の作り方や掃除の仕方を学ぶなど、地域に根付く知恵が伝達されていることは非常に意義深い。このようなコミュニティにおける活発な繋がりが、新たな心身の健康を生み出すフィールドとなることが期待される。

成果

- (1) 参加者同士のコミュニケーションの活性化
- (2) 心身の健康の維持・増進
- (3) 健康習慣（身体ほぐしなど）の獲得
- (4) 参加者と学生の交流
- (5) 学生の学び

今後の展望

- (1) 大学独自のダンス・プログラムを提供する
- (2) 高齢者だけでなくインクルーシブ（包括的）な活動として展開する
- (3) 成果を含めた広報を強化・充実させる
- (4) 学生主体のプログラムとして運営する
- (5) コミュニティを活性化させる

現場の声

・参加者（70代女性）

ストレスを一瞬忘れて楽しい気分をもって帰り、また頑張ろうという力になっている。身体ほぐしは家でもやっている。ダンスは気持ちと身体をリフレッシュする大事な時間。

・サポート学生

自分達の祖父母の年齢に近い参加者から学ぶことが多いです。とても積極的に動かれ、創作のヒントをいただくこともあります。

研究者の紹介



人間健康学部 教授
原田 純子
(はらだ じゅんこ)

専門は舞踊教育学。

“ダンスはすべての人のために”をモットーに、人間教育としての創作ダンス・身体表現を研究、実践しています。インクルーシブなダンスのワークショップを実現したいと思っています。

堺エコロジー大学連携 熊野本宮子どもエコツアー



“健全な青少年の育成と環境保全”をテーマに、堺市住民（子ども）×学生×田辺市住民が交流する新しいスタイルの体験学習。小学5～6年生対象のキャンプツアーです。

キャンプツアー（2013年第2回）の様子

活動の概要

目的	「環境モデル都市」である堺市の子どもたちに、自然体験を通じた環境学習の基盤を形成してもらう
連携メンバーおよび役割	大阪府堺市・・・企画、参加者への告知、受付、キャンプへの添乗、予算の管理 和歌山県田辺市・・・企画、活動場所の貸与、キャンプの運営補助 田辺市熊野ツーリズムビューロー・・・旅行に関する業務全般 関西大学人間健康学部教授 村川治彦 / 同学部教授 原田純子 / 同学部准教授 灘英世 / 同学部准教授 安田忠典・・・企画、キャンプリーダー（学生）の養成、キャンプの運営全般、前後の学習指導
活動地域	和歌山県田辺市本宮地区 / 大阪府堺市堺区
活動期間	2015年4月～11月（キャンプ実施は8月27日～8月30日・3泊4日、8月8日プレキャンプ、10月3日振り返りの集い）
費用	学内における各種資金および受益者負担

連携の経緯

2010年の人間健康学部開設の際に、堺市との地域連携を模索するなかで、安田が別頁の「水辺の楽校」の運営委員として参画。そこで「堺エコロジー大学」の事務局と協働したのが契機となって、安田が堺エコロジー大学運営委員に就任。人間健康学部の学生のパワーを生かした堺エコロジー大学のコンテンツとして、2008年度より全学共通科目「野外活動実習」のフィールドとして訪れていた田辺市本宮地区へ子どもたちを誘うツアーを企画・運営するに至った。

解決すべき課題

- (1) 若年者向け自然体験学習機会の不足
- (2) 都市と山村との地域連携・交流の活発化
- (3) 本宮地区の活性化
- (4) 熊野本宮の観光コンテンツの開発
- (5) 堺エコロジー大学の環境学習プログラムの開発



キャンプツアー（2013年第1回）の様子

大学の役割

「体験学習法」を専攻する人間健康学部のゼミ学生たちが、子どもたちの自然体験を支援するキャンプを企画。活動的な若年者向けの環境教育プログラムを模索していた堺エコロジー大学へ提供。実質的な企画と運営はほぼすべて学生が担当した。キャンプのフィールドとしては、市町村合併以前から堺市と旧本宮町の繋がりがあったことなどから、世界文化遺産として登録されている熊野本宮大社や熊野古道を擁する和歌山県田辺市の協力を得た。

なお、この活動は両都市が2014年5月に友好都市提携を結ぶに至る起爆剤の一つとなった。

成果

- (1) 子どもたちの成長を支援できた。
学生の学びも深い。
- (2) 堺市と田辺市との連携の強化
(2014年5月、堺市・田辺市友好都市提携締結)
- (3) 教育旅行等、熊野の新たな観光コンテンツ開発に寄与できた
- (4) 堺エコロジー大学プログラムの活性化
- (5) 参加希望者激増につき定員30名として抽選を実施するに至った

今後の展望

- (1) 堺市、田辺市、関西大学の連携事業として定着させること
- (2) 拠点として使用した施設（旧皆地小学校）の整備
- (3) 施設を基盤としたさらに多様なプログラムの展開
- (4) 学部、あるいは大学全体での関わり方の模索

研究者の紹介



人間健康学部 准教授
安田 忠典
(やすだ ただのり)

人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めています。そんな若い力を求めている現場とコラボできます！

現場の声

・参加者の保護者

弟も5年生になったら絶対参加するそうなのでまた再来年よろしくお願いします！
どうかこのプロジェクトが末永く続きますように！

・堺市役所担当者

参加者倍増、皆地の拠点の復活等、昨年以上にいろいろな要素が加わった難易度の高い事業にも関わらず大成功に終わったのも、皆さんのおかげです。

楽しいんやさかい 大和川水辺の楽校 がっこう

遊び、自然体験、自然学習の場として水辺を利用することで、子どもたちの自然体験や生活体験の不足を補うことを目的とする、国土交通省のプロジェクトの一つです。



水辺の楽校の様子

活動の概要

目 的	河川の水辺を利用して、子どもたちの自然体験や生活体験、環境学習の場をつくり、その成長を支援する
連携メンバー および役割	大和川水辺の楽校協議会…企画・運営 大和川線沿線連絡協議会（三宝 / 錦西 / 錦綾 / 浅香山 / 東浅香山 / 新浅香山 / 五箇荘東の7校区） …企画・運営 国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所堺出張所…企画・運営・施設貸与 堺市教育委員会学校教育部学校企画課…企画・運営・参加者募集 堺市建設局土木部河川水路課…事務局 関西大学人間健康学部 安田忠典ゼミ、村川治彦ゼミ、灘英世ゼミ …企画・運営、学生ボランティア派遣 ほか
活動地域	大和川（大阪府堺市）
活動期間	通年（2015年度はこれまで5月6日、27日、6月22日、8月22日に公開プログラム実施）
費 用	各種補助金 / 学内における各種資金

連携の経緯

国交省が推進するプログラムとして2007年にスタートした「大和川水辺の楽校」は、2010年に開設された関西大学堺キャンパスから至近の大和川河川公園を会場に展開していた。そこで関西大学は地域への貢献活動として、開設年度から運営委員、学生ボランティアを派遣し、会議場所の提供等も含めて全面的に参画。一昨年からは浅香山浄水場近辺のつつじ祭りとはジョイントして独自のプログラムを推進している。

解決すべき課題

- (1) 独自のプログラム作成
- (2) 運営基盤（事務局、物品、会議場所等）の整備
- (3) プログラム参加者の発掘
- (4) 広報体制の強化
- (5) 地域との連携強化

大学の役割

水辺の楽校協議会の運営委員を務め、企画・運営に携わる。

堺キャンパスのボランティアネットワークに登録した学生がキャンパス至近の大和川公園にて開催される「水辺の楽校祭り」に参加。また、安田ゼミの学生が協議会にオブザーバー参加し、学生が企画・運営する講習会や「水辺の楽校祭り」のコンテンツを提供している。

成果

- (1) 「水辺の楽校」の継続、発展
- (2) 安定した運営の基盤形成
- (3) 地域住民の運営による関係機関間の連帯感醸成
- (4) 子どもたちやボランティア学生の学び
- (5) 5月の水辺の楽校祭りが1000名超と大盛況

今後の展望

- (1) プログラムをさらに洗練していく
- (2) 市民、とくに地域住民へのさらなる定着
- (3) 大学としての参加をさらにアピール
- (4) 学生の参加をさらに促進する
- (5) 成果も含めた広報の強化

研究者の紹介



人間健康学部 准教授
安田 忠典
(やすだ ただのり)

人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めています。そんな若い力を求めている現場とコラボできます！

大和川水辺の楽校を開校します！

水質が大きく改善した大和川で、生き物観察、水質調査などを行う水辺の楽校を開校します。

日時：10月6日(日) 午前10～12時

場所：大和川河川敷

(大和川河川事務所 川がわ：地図参照)

※駐車場はありませんので公共交通機関を利用して下さい。



- ◆内容：生きもの観察、水質調査
- ◆費用：無料
- ◆対象：小学生とその保護者
- ◆服装：動きやすい服装、川に入れる靴（サンダル不可）
ひざ程度まで水に入ります（強制はしません）
- ◆持ち物：タオル、水等、帽子
- ◆申し込み：9月2日から下記電子メール（水辺の楽校事務局宛）へ氏名・住所・学年・参加人数を送信してください。info@sakai-mizube.org
※先着40人です
- ◆問合せ先：水辺の楽校事務局（TEL:070-5503-6261）
河川水路課（TEL:072-228-7418 FAX:228-7868）

※雨天中止です。堺市で晴れていても奈良県など（大和川上流域）で雨が降り増水した場合も中止となります。周辺の気象にご注意ください。

水辺の楽校リーフレット

現場の声

・参加学生

「水辺の楽校まつり」などの行事に参加するなかで、地域の方々の温かさや、子どもたちの元気や素直さなど、私たちはいつも素敵なお褒めをいただいています。まるで家族が集まったようなひと時を過ごせるのです。スタッフの会議にも出させていただいているのですが、みなさん、この活動からさまざまな喜びや楽しさを見出しておられ、ボランティアの本来のかたちを学んでいるような気がしています。

地域で子育てを支えよう ～子どもと親が楽しめるあそびの伝承～

親子の交流の場を創出し、地域ぐるみの子育て支援システムの構築をサポートしています。



新聞紙を使った企画の様子

活動の概要

目的	大学を地域の子育て支援拠点とする / 子育てを日常的・社会的に支える仕組みを整備する
連携メンバー および役割	堺市役所…企画、広報 NPO法人子育てネットみちくさ…活動の主体 関西大学人間健康学部教授 山縣文治…企画、広報、活動場所提供
活動地域	関西大学堺キャンパス
活動期間	2012年～（継続中）
費用	堺市と関西大学との地域連携協力資金

連携の経緯

以前より連携のあった堺市およびNPO法人子育てネットみちくさから、大学のキャンパスを活用した子育て支援事業を実施することについて打診があり連携が開始。関西大学人間健康学部ではスポーツ、福祉をキーワードに地域連携を推進しており、子育て支援の拠点として本学が最適であるとの考えから、山縣を中心に、関西大学堺キャンパスにて事業を実施することとなった。

解決すべき課題

- (1) 子育て支援の仕組み整備
- (2) 親子が集える場所の創出



人形劇の様子



運動会の様子

大学の役割

親子で楽しめる遊びを伝承するプログラムを、NPO法人子育てネットみちくさが中心となって企画。そこに山縣が、専門分野である子育て支援、社会福祉の知見を活かした助言を行っている。

過去の実施内容は以下のとおり。

- (1) 新聞紙を使った企画（くしゃくしゃ びりびり ふ～わふわ）
新聞紙を破って作った山に飛び込むなど、普段家庭ではできない遊びを親子で体験した。
- (2) 夏祭り（みんなであそぼう！わ～いわい！夏まつりだよ～）
お祭り用のうちわづくりやロケット風船づくり、魚つりゲームなど、親子で楽しめる縁日さながらの遊びを提供した。
- (3) 運動会（みんなであそぼう！ フレー！ フレー！ うんどうかいごっこ～）
タオルを使った電車ごっこや玉入れ、かけっこなどの種目を、剣道場、柔道場を活用して実施した。
- (4) 人形劇（みんなであそぼう！ おっくんのぱっくんシアターがやってくる～！）
人形劇「おっくんのぱっくんシアター」を招き、手作りの小道具を使った人形劇を観劇した。
- (5) リズム遊び（リズムでチャチャチャ）
歌のリズムに合わせて動物になりきって、身体を動かしたほか、子育てネットみちくさのメンバーによる、ミュージカル風のエプロンシアター（※）を実演した。

※エプロンシアター…エプロンを舞台に見立てて行う幼児向けの劇。エプロンのポケットからキャラクターが登場し、マジックテープ等でエプロンに貼り付けていき、劇を進行させる。

また、本活動は山縣が所属する人間健康学部の所在地である関西大学堺キャンパスにも波及している。堺キャンパスでは、学生が構成する人間健康学部祭典実行委員会が中心となって「堺キャンパス祭」を開催しており、学生だけでなく地域住民も多数参加している。その実行委員会が山縣に対し、堺キャンパス祭を地域の児童も参加できるイベントにしたいと相談したことを契機として、2014年度から学生と子育てネットみちくさの連携による子ども向けブースが設置されている。

成果

- (1) 保護者が抱える育児への不安や負担感の軽減
- (2) 親子の交流の場の創出
- (3) 地域の子育て支援拠点としてのキャンパスの認知度向上

研究者の紹介



人間健康学部 教授
山縣 文治
(やまがた ふみはる)

学生時代から子ども家庭福祉に関心を持ち、教員になってからもその課題を追い続けている。

高槻市と関西大学との ポスター協働制作事業

コンピュータグラフィックスやデザインを学ぶ学生が、授業で得た知識や技術をもとに、高槻市の施設などで使用するポスターの制作に取り組んでいます。



学生が作成したポスターの一例

活動の概要

目的	高槻市・・・情報発信の強化による市の施策等の周知 関西大学・・・学生のグラフィックス制作の基礎および実践的なデザインリテラシーの修得
連携メンバーおよび役割	高槻市・・・ポスター制作依頼、候補作品の選定、完成したポスターの掲出 関西大学総合情報学部准教授 井浦崇・・・高槻市からいただいたテーマの絞り込み、候補作の選定 関西大学総合情報学部生・・・ポスター案の制作
活動地域	大阪府高槻市
活動期間	2011年～（継続中）

連携の経緯

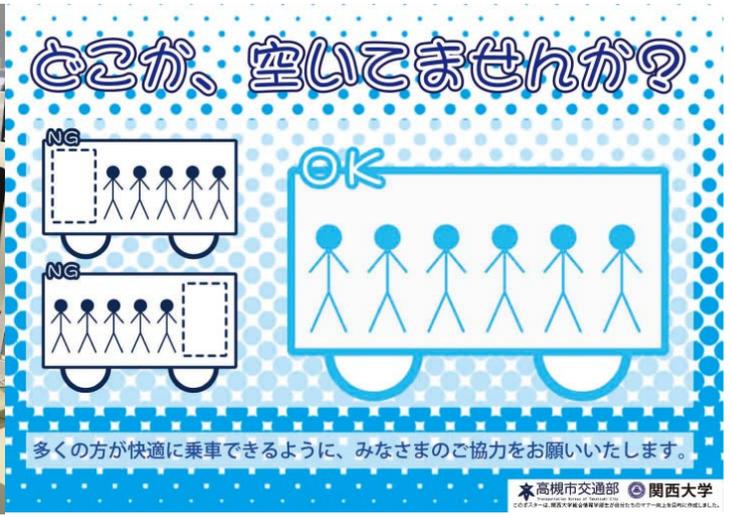
高槻市と関西大学との協働事業を模索していた中で、グラフィックス基礎実習が新設され、高槻市と関西大学が協議した結果、本事業に発展した。

解決すべき課題

- (1) 市内のイベントや施策のPR不足



グラフィックを学ぶ授業のようす



「マナーアップ作品コンクール」市バス賞 受賞作品

大学の役割

本事業は、総合情報学部の学生が授業で得た知識や技術を活かして、高槻市の施策やイベントに関する広報ポスター制作に取り組むものである。高槻市と関西大学総合情報学部とで締結したポスター制作にかかる協定のもとに実施されている。

まず、高槻市はPRポスター制作を希望する部局の集約を行い、その後、大学側は学生が制作するのにふさわしいテーマを5つ程度選定する。それらのテーマは「高槻シティハーフマラソン大会」や「高槻市美術展覧会」、選挙啓発や道路交通のルールなど多岐にわたっている。

学生はその中からテーマを1つ選び、授業の課題として提出。学内および高槻市での選考を経て選出された優秀作品は、ポスターとして市内の施設などに掲出され、市のイベントや施策のPRなどに役立てられている。

また、総合情報学部では、「マナーアップキャンペーン」の一環として作品コンクールも行っており、応募作の中から「市バス賞」に選ばれた作品は、市内を走る高槻市営バス全車両に掲示されている。

成果

- (1) 高槻市…PR効果の向上と経費の削減
- (2) 市民…市内のイベントや施策の周知、マナーの向上
- (3) 学生…ポスターなど印刷物の実例を制作することで、グラフィックデザイン制作の基本概念を学ぶことができる

今後の展望

- (1) 事業の継続

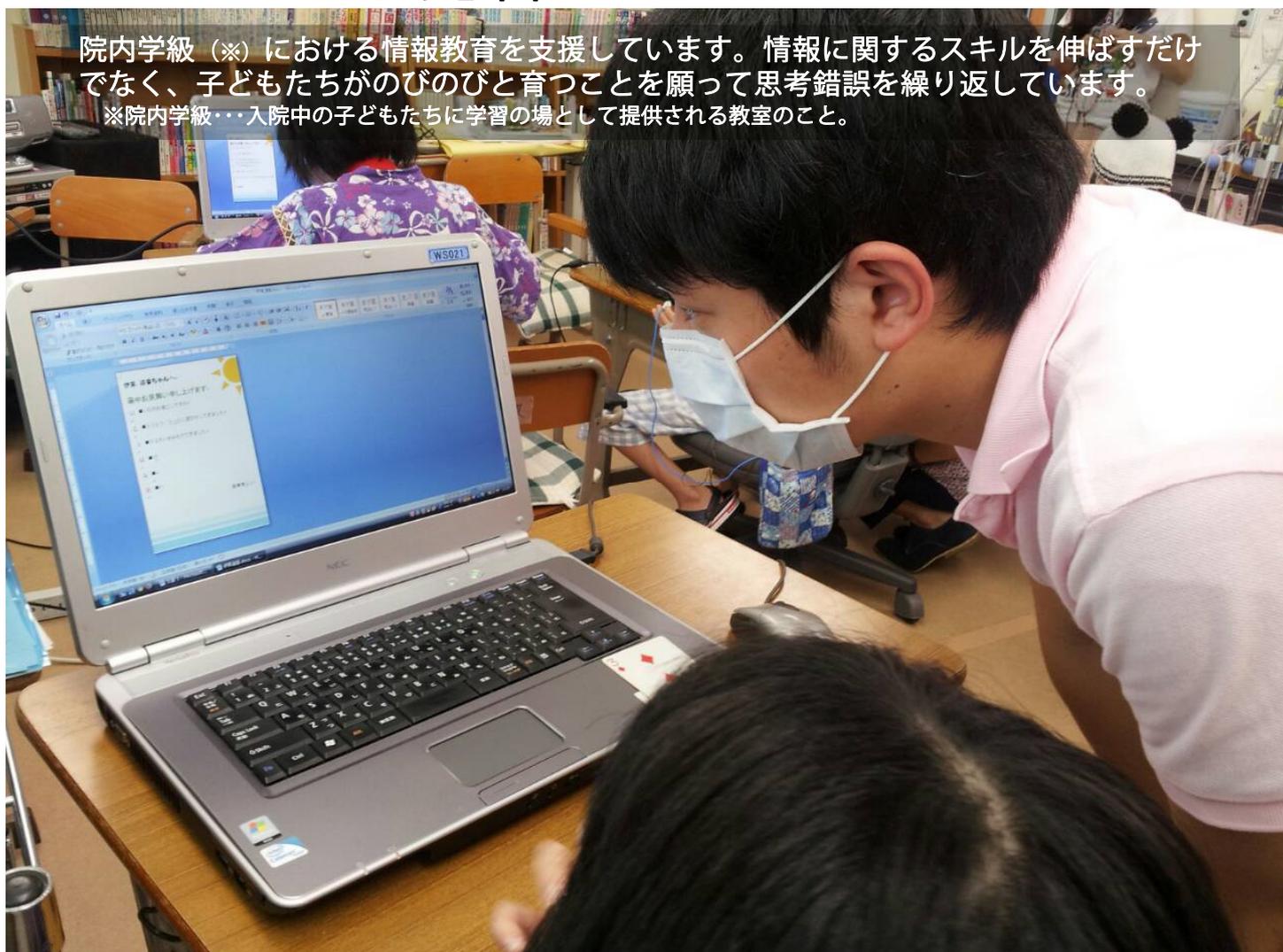
研究者の紹介



総合情報学部 准教授
井浦 崇
(いうら たかし)

専門はメディア・アート。デジタルメディアにおける映像と音楽の新しい創造性をテーマに、視覚と聴覚の相互作用による表現効果を研究。美術家、音楽家として作品制作も行っている。

小児科プロジェクト



院内学級（※）における情報教育を支援しています。情報に関するスキルを伸ばすだけでなく、子どもたちがのびのびと育つことを願って思考錯誤を繰り返しています。

※院内学級・・・入院中の子どもたちに学習の場として提供される教室のこと。

院内学級の児童への暑中見舞いを作成する学生メンバー

活動の概要

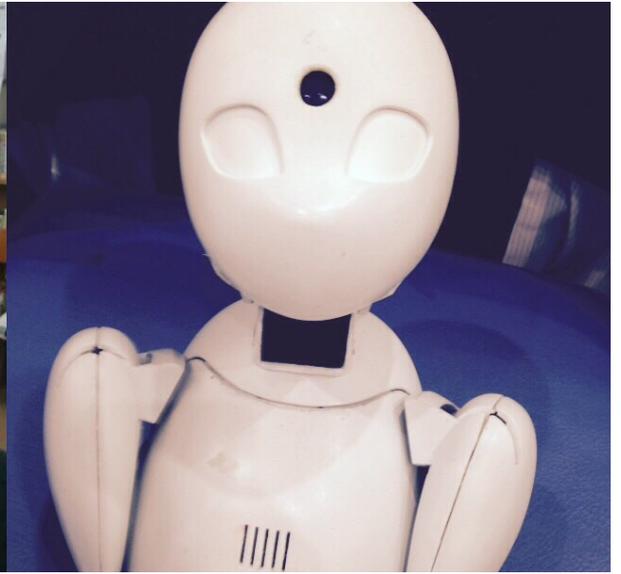
目的	情報に関する能力の向上 / 現在の環境に対してポジティブな思考で学習する意欲創出
連携メンバー および役割	院内学級の教諭 ・・・クラス運営全般、生徒の個性に合わせた対応に関するアドバイス、その他学生サポート全般 小児科プロジェクト学生メンバー・・・授業および不定期イベントの企画立案、授業で使用する映像教材開発 関西大学総合情報学部 久保田・黒上研究室・・・プロジェクト進捗状況の管理、学生に対するアドバイス
活動地域	大阪府内の病院
活動期間	2008年～（継続中）

連携の経緯

院内学級に通う児童を以前通っていた小学校の卒業式に出席させる取り組みに、本プロジェクト初期メンバーの学生が参加したことがきっかけとなった。取り組みはテレビ会議システムを通じて卒業式に参加してもらうものだったが、その際、関西大学総合情報学部生が自身の学習成果を社会貢献に繋げる重要性を実感。入院児童への情報教育活動に発展することとなった。



プロジェクト会議の様子



OriHime

大学の役割

大学で情報を学ぶ学生が、小児科病棟に入院する児童の情報教育をサポートしている。学生は普段の学習成果を活かしつつ、児童の目線に合わせた独自の教育プログラムを立案し、授業を展開する。教育プログラムは現場の教員からアドバイスを受けて、各回の参加児童に合った授業を提供し、暑中見舞いや自己紹介カードの作成など、達成感を得られるよう工夫している。

また、体調が芳しくなく院内学級に出られない児童のケアにも取り組んでいる。具体的な例としては、学生が京都の名所を巡ってその様子を病院の児童にテレビ会議システムで生中継するものである。中継ではクイズの出題や事前撮影した京都に関する学習コンテンツの放映を行うことに加え、児童による現地の方へのインタビューも行っている。ほかにも、児童が病院の外の世界を体感するために、新型ロボットのOriHimeを他校で実験中である。

さらに、児童や病院との信頼関係を築くために授業時間外の関わりも大事にしている。院内の夏祭りや運動会への参加、卒業祝賀会でのアカペラ披露などを通じて、日常的に関わり続けることを心がけている。

以上のように本プロジェクトでは、情報教育・映像編集・情報機器操作等、学部の強みを存分に活かしつつ、児童とのコミュニケーションによる信頼関係をベースに活動を展開している。

成果

- (1) WordやPowerPointを使用して、作品作りを行うことで、意欲の向上・パソコン利用能力向上に繋がった
- (2) 毎月授業を行うことで、学生の立場が認識され児童との信頼関係ができた

今後の展望

- (1) 教育内容を刷新し、常に児童に興味を持ってもらえる授業展開を目指す
- (2) 児童全員との関わりを持つことで、更なる信頼関係の構築を目指す
- (3) 児童の興味・関心に合った授業展開を行い、学習意欲の向上・体調改善を目指す

研究者の紹介



総合情報学部
久保田・黒上研究室
(くぼた・くろかみけんきゅうしつ)

大学院の課題研究科目「ICTと新しい教育」を担当する久保田賢一、久保田真弓、黒上晴夫の3名の教員と大学院生がアクティブラーニングをテーマに活動する研究室です。フィールドでの体験を重視した学習活動を展開し、学部生と連携した活動を進めています。研究室には、国内外で地域の人々と協働した課題解決に向けた活動に取り組むさまざまなプロジェクトがあります。

現場の声



・高市直弥（4回生）

児童と私たちは切磋琢磨できる良きパートナーです。彼らの素直な言葉は感動や悔しさを与えてくれます。今後も一人でも多くの児童に心を開いてもらえるよう高みを目指します。

生涯学習支援プロジェクト

幅広い年齢層を対象に、情報格差を解消するための多様な生涯学習プログラムを実施しています。



講座風景

活動の概要

目 的	地域内の情報格差の解消 / 情報機器能力向上による豊かなくらしの実現
連携メンバー および役割	高槻市今城塚公民館・・・授業内容や対象年齢層の検討にかかる学生との協働 生涯学習支援プロジェクト学生・・・企画提案、教材作成、当日授業 関西大学総合情報学部 久保田・黒上研究室大学院生・・・プロジェクトの進捗状況の管理、学生に対する アドバイス
活動地域	高槻市今城塚公民館（大阪府高槻市）
活動期間	2009年～（継続中）

連携の経緯

本プロジェクトの前身はフィリピンにおいてボランティア活動を行うプロジェクトであり、その活動の中で、学生は海外における多様な社会問題を目の当たりにした。この経験は学生の目を国内の社会問題に向けさせる契機となり、数人のメンバーによって現在のプロジェクトが発足した。プロジェクトメンバーは専門分野を活かせるテーマとして「地域の情報格差」を設定。幅広い年齢層を繋げる拠点である公民館との協議を経て、活動を開始した。

解決すべき課題

(1) 地域内のさまざまな年齢層における情報格差を解消する各種コンテンツの企画と実行



授業で使う資料



研究室に招いての講座

大学の役割

この活動は、学生が持つパソコンのスキルや知識をもとに、操作に関する講座を行うものである。学生は自主的に、立案→実行→改善のサイクルを回すことで、コンテンツの企画運営を行っている。

まず、「立案」は学生と公民館職員との協議から始まる。公民館は実生活に関する各種事業を展開しているため、地域住民に関するさまざまな学習ニーズを把握している。そこで、プロジェクトメンバーは公民館職員との協議の中で、対象や内容検討に必要な情報をヒアリングした後、プロジェクトメンバー間で企画立案と教材・指導マニュアルの作成を行う。

「実行」するプログラムは、対象に応じて変更するため、年度毎にその内容は異なるが、概ね各回2時間の講座を年間20回程度実施している。対象として、情報弱者になってしまいがちな高齢者層への講座は定期的を実施しており、クリックなどの基本動作から、最終的にはメールで課題を提出するところまで段階的に学習可能な企画を実施している。また、児童や高校生の保護者向けには年賀状や住所録作成に関する講座を行うなど幅広い年齢層にアプローチしている。さらに、プログラム終了後も生涯学習支援プロジェクトHPの質問フォームを通じて質問を受け付けており、まさに「生涯」学習可能な体制の維持に努めている。

「改善」については、講座終了後のアンケートをもとに公民館職員からのフィードバックを得て、次の企画立案に繋げていく。

情報格差の解消と情報機器能力向上による地域の豊かなくらしの実現に向け、生涯学習支援プロジェクトは常に前進を続けている。

成果

- (1) 地域住民の情報機器およびソフトウェア操作に関する能力の向上

今後の展望

- 展望 (1) 新たな対象年齢層（子育て世代等）へ働きかけ、パソコンに対する要望を調査し、講座を実施する
(2) 対象年齢層を拡大することで、公民館の利用者を増加させ、他世代の交流を図り、地域を活性化させる

- 課題 (1) 現在、学部の2年生から大学院生が所属しているため、知識に差異がある。受講生に対しては、学生の授業の均質化が求められる。先輩から後輩への指導が欠かせないと考えられる。
(2) 受講の応募が定員を超過した場合、授業を受けられない人がおり、その方々への対処の実施

研究者の紹介



総合情報学部
久保田・黒上研究室
(くぼた・くろかみけんきゅうしつ)

大学院の課題研究科目「ICTと新しい教育」を担当する久保田賢一、久保田真弓、黒上晴夫の3名の教員と大学院生がアクティブラーニングをテーマに活動する研究室です。フィールドでの体験を重視した学習活動を展開し、学部生と連携した活動を進めています。研究室には、国内外で地域の人々と協働した課題解決に向けた活動に取り組むさまざまなプロジェクトがあります。

現場の声



・井上彩子（大学院修士1年）

プロジェクトを通じて縁が繋がった受講者の方々にとって、困った時に頼れる存在でいられるように、講座終了後も寄り添っていきたくと考えています。公民館を拠点に多世代が共生できるまちの実現を目指します。

限界集落フィールドワーク① ～雪かきや祭りの体験を通して～

雪かきや夏祭り「松上げ（※）」への参加を通して、京都市左京区久多くた地域を学生の力で盛り上げ、日本の社会問題「限界集落」に挑んでいます。

※松上げ…高い灯籠木の上に作った笠に松明を投げ上げ愛宕神社へ奉納する火祭り。市の無形民俗文化財に指定。



夏祭り「松上げ」に参加する学生の様子

活動の概要

目的	限界集落地区の活性化および効果的な情報発信
連携メンバーおよび役割	「自然満喫村 もりんちゅ」（京都府京都市左京区久多）のオーナー…活動拠点と久多地域の情報を提供 久多里山協会…祭りの運営 久多地域の住民の方々…学生メンバーへの各種協力 大津市立葛川 <small>かつらがわ</small> 小学校…学生メンバーと小学生との交流の場の提供 関西大学総合情報学部 久保田・黒上研究室…プロジェクト進捗状況の管理、学生に対するアドバイス プロジェクト学生メンバー…企画・運営、広報
活動地域	京都府京都市左京区久多地域
活動期間	2012年12月～（継続中）
費用	企業や財団、地域の助成金の獲得を目指している

連携の経緯

カンボジアの学生を日本に受け入れる機会があり、ホームステイ等を企画。その中で雪かきを体験してもらうプログラムを考えていたところ、ボランティアを募集していた「もりんちゅ」のオーナーと出会う。結果的にその年は雪かきを体験してもらうことはできなかったが、田舎暮らし体験施設の「もりんちゅ」には、他にも様々なプログラムがあり、カンボジア人学生とともに1泊2日のホームステイを行った。そこから久多地域との交流が始まった。

解決すべき課題

- (1) 過疎化
- (2) 少子高齢化
- (3) 人手不足



雪かきの様子



久多地域にホームステイに訪れたカンボジア人学生

大学の役割

学生の力が地域への刺激になるような交流を目指し、一人暮らしの高齢者の方の家の周りの雪かきや、歴史あるお祭りの運営等のスタディツアーを企画している。学生にとってはTV等でしか触れることのなかった田舎暮らしを体験し、限界集落・少子高齢化問題を考えるきっかけづくりの場にもなっている。また、カンボジア人学生とともに久多地域の「もりんちゅ」（築250年の古民家を改装）にてホームステイを行う機会を企画している。カンボジア人学生は、限界集落の実情や、田舎の文化など、彼らのイメージにはない日本の側面について理解を深めている。また、その際には地域の小学校を訪問し、日ごろ外国人や大学生と接する機会の少ない小学生との交流も図っている。

限界集落の地域活性化は一朝一夕で解決できる問題ではなく、集落に大きな変化をもたらすことはできないかもしれない。だが、地域活動への参画を通して信頼関係を築き、その活動や集落の様子をSNSを使って広く発信、若い世代へ情報を届けることで地域活性化の起爆剤になることを目標としている。

成果

- (1) 各イベント参加者の地域の実情に対する認識の深まり
- (2) 久多地域の情報発信
- (3) 久多地域と学生メンバーとの信頼関係構築
- (4) 葛川小学校の小学生への、大学生や外国人学生とのコミュニケーションの場の提供

今後の展望

- (1) 関わりを継続すること
- (2) 久多での映像製作や短期のスタディツアープログラムを構想中
- (3) ハワイ大学との短期交換プログラムの受け入れ先として検討中

研究者の紹介



総合情報学部
久保田・黒上研究室
(くぼた・くろかみけんきゅうしつ)

大学院の課題研究科目「ICTと新しい教育」を担当する久保田賢一、久保田真弓、黒上晴夫の3名の教員と大学院生がアクティブラーニングをテーマに活動する研究室です。フィールドでの体験を重視した学習活動を展開し、学部生と連携した活動を進めています。研究室には、国内外で地域の人々と協働した課題解決に向けた活動に取り組むさまざまなプロジェクトがあります。

現場の声



・楠健太郎（4年生）

当初は、京都市内にこんな世界があるのかと驚きました。人との繋がりが生んだプロジェクトですが、責任を持って久多と関わり続けるにはどうすれば良いかと常に自問自答しています。

久多にはかまどで炊いたご飯、地元の野菜、自分で採ってその場で揚げる山菜など、都会では味わえない美味しいものがたくさんあります。冬はとても寒く雪が深い集落ですが、出会うのは暖かい人達ばかりです。ぜひ一度訪れてみてください。

限界集落フィールドワーク② ～北山友禅菊の復活～

京都市左京区久多（くた）地域のシンボルフラワーである「北山友禅菊」を蘇らせるため、耕作放棄地を活用して友禅菊の植栽を行っています。



友禅菊を植栽する学生の様子①

活動の概要

目的	限界集落地区の活性化および効果的な情報発信
連携メンバーおよび役割	「自然満喫村 もりんちゅ」（京都市左京区久多）のオーナー…活動拠点と久多地域の情報を提供、facebookでの情報発信 久多地域の住民の方々…学生メンバーへの各種協力、苗木の提供 facebookを見て集まった方々…植栽への協力 関西大学総合情報学部 久保田・黒上研究室…プロジェクト進捗状況の管理、学生に対するアドバイス プロジェクト学生メンバー…久多地域に根付いた活動をするため、住民が求めていることを調査し、活動する
活動地域	京都府京都市左京区久多地域
活動期間	2013年4月～（継続中）
費用	企業や財団、地域の助成金の獲得を目指している

連携の経緯

京都市左京区久多地域での交流を通して、少子高齢化による耕作放棄地の増加を知った。地域に根付いた活動を目指す学生は土地の有効活用策として、かつて久多地域のシンボルフラワーであった「北山友禅菊」の植栽を久多住民と共にやる。友禅菊を地域の観光資源として蘇らせ、久多の活性化に役立てるための植栽活動が始まった。

解決すべき課題

- (1) 過疎化
- (2) 少子高齢化
- (3) 人手不足



友禅菊を植栽する学生の様子②



友禅菊畑

大学の役割

2年前まではカヤ畑と化していた田んぼを住民が耕作できる状態に戻したものの、人手不足で計画が流れたままだった。そこで学生はもう1度友禅菊の育成可能な環境にするため、手作業で雑草を抜き、土を起こし、丁寧に土地を再生させた。土地の整備が終わると、プロジェクト学生メンバーと地域の方々と協力しながら、友禅菊の苗の植栽を行った。交通機関の不便さは時に泊り込みの作業を必要としたが、同時に地域の方々との交流を生み、信頼関係を築くこととなった。また、facebookで活動内容を発信したことで、久多地域に興味を持った一般の方々も久多に訪れ、植栽活動に協力した。多くの方々の共同作業を経て、計画していた地区への友禅菊植栽活動を終了。現在は除草作業を行いつつ、苗木の成長を待つのみとなった。

この植栽活動は、久多地域の方々との交流が継続的に行われたことで可能となった。北山友禅菊が開花するのは2~3年後。友禅菊を再び久多地域のアピールポイントにするためには、今後地域とのさらなる連携が必要である。限界集落と呼ばれる地域の活性化を目指して、久保田・黒上研究室はこれからも活動を継続していく。

成果

- (1) 観光資源の創出
- (2) 耕作放棄地の有効活用
- (3) 久多地域の情報発信
- (4) 久多地域と久保田・黒上研究室との信頼関係構築

今後の展望

- (1) 友禅菊の観光資源化
- (2) 活動の継続のための仕組み作り

研究者の紹介



総合情報学部
久保田・黒上研究室
(くぼた・くろかみけんきゅうしつ)

大学院の課題研究科目「ICTと新しい教育」を担当する久保田賢一、久保田真弓、黒上晴夫の3名の教員と大学院生がアクティブラーニングをテーマに活動する研究室です。フィールドでの体験を重視した学習活動を展開し、学部生と連携した活動を進めています。研究室には、国内外で地域の人々と協働した課題解決に向けた活動に取り組むさまざまなプロジェクトがあります。

現場の声



・楠健太郎（4年生）

研究室の活動の中で、海外に関わり異文化を体験することは多くありましたが、久多での活動は日本の中で自分たちの生活とは異なる体験ができる貴重な機会になっています。

現在は地域活性化の手段の一つとして、友禅菊の復興に取り組んでいますが、今後更に活動の幅を増やし、多くの人が興味を持ち、足を運ぶきっかけになる活動を現地の人と協力しながら行いたいと思います。

情報科サポートプロジェクト

高校が授業として行う情報教育に大学生が参加してサポートしています。生徒はもちろん、先生方、学生等、関係する全ての人にとっての学びの「場」を創出する取り組みです。



授業中の風景

活動の概要

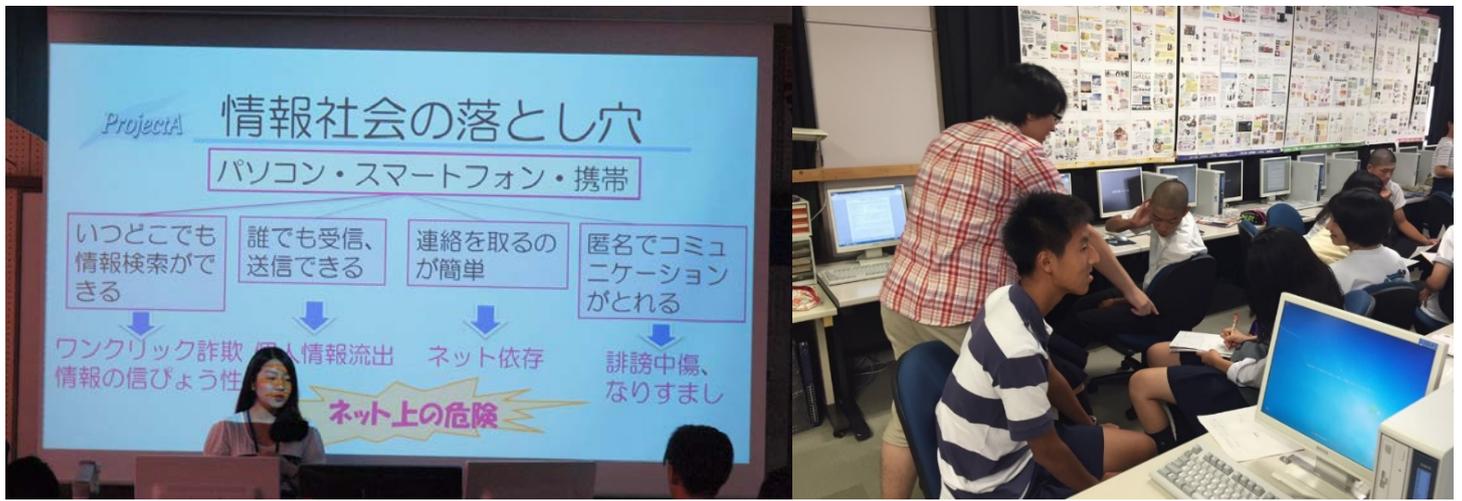
目的	生徒を主体とした教科情報の授業展開 / 高校生のキャリア観醸成
連携メンバー	大阪府、兵庫県の高等学校の情報科教諭 / 関西大学総合情報学部 久保田・黒上研究室
活動地域	各高等学校における教育現場
活動期間	2002年～（継続中）

連携の経緯

2002年、地域の高等学校から情報教育に関する授業支援の要請を受けたことをきっかけとして連携を開始した。この要請は、学習指導要領の改訂に伴い高等学校で情報科が新設されたことを機に浮上した。

解決すべき課題

- (1) 情報教育の促進
- (2) 高校生にとって身近なコミュニケーション相手づくり
- (3) (情報教育に限らず) さまざまな学習機会の創出



実際に授業で説明を行う学生

グループワークでアドバイスをする学生

大学の役割

高等学校の情報科において、授業案の作成から実施まで、学生が授業全体をサポートしている。現在は全3校と連携しており、1校につき平均5人前後の学生が参画して活動を展開。高校のニーズや特徴に応じてオーダーメイドで授業を組み立てていくため、授業内容は各高校によって異なるが、その一例を以下に紹介する。

【ケース1】学生は2学期から本格的に授業に参画している。授業方針である「高校生への情報教育とキャリア教育の同時展開」を行うため、PCを用い、自らの将来についての長期的な計画を立てる授業を行う。高校生は、2学期に書籍やインターネット等を用いて、大学や将来の職業を広く調査する。3学期には大学に関する調査結果を基にPCで資料を作成し、学年全体に向けてプレゼンテーションを行う。

【ケース2】年間を通じて授業の支援を行う。情報の取捨選択や情報機器操作、さらには著作権やSNS上での情報モラルについての講義を行う。情報モラルに関する授業では、高校生自らが書籍やインターネット等を用いて各項目について調査し、理解を深める。最終的には、何らかのテーマを掲げたプレゼンテーションを行い、調査結果を共有し学び合う。

以上のように、情報収集および情報機器操作の能力向上に加え、自分自身のキャリア観構築やプレゼンテーション技術の習得を目指して活動している。

成果

- (1) 高校生が主体的に学ぶ授業を展開し、特に授業内に発表する機会を取り入れたことで情報の正しい取り扱い方のみならず、「伝える力」も養うことができた。
- (2) 進学や将来の職業に関して調査し共有してもらうことで将来意識の向上を図ることができた。

今後の展望

- (1) 生徒や教員に応じた新しい教材を提案し、情報社会で活かせる力を育てていきたい。

研究者の紹介



総合情報学部
久保田・黒上研究室
(くぼた・くろかみけんきゅうしつ)

大学院の課題研究科目「ICTと新しい教育」を担当する久保田賢一、久保田真弓、黒上晴夫の3名の教員と大学院生がアクティブラーニングをテーマに活動する研究室です。フィールドでの体験を重視した学習活動を展開し、学部生と連携した活動を進めています。研究室には、国内外で地域の人々と協働した課題解決に向けた活動に取り組むさまざまなプロジェクトがあります。

現場の声



・若松紗知子(4年生)

生徒に何を学んでほしいのかを常に意識しながら教材づくりや授業実践に取り組んでいます。日を追うごとに様々な知識や技能を身に付けていく生徒の姿を見ると、この活動をやってきてよかったと本当に思います。

ICT活用授業デザインワークショップ

学校に急速に導入されているICTを有効に活用するために、現職教員と学生・院生が協同してワークショップを行いながら、授業デザインに取り組んでいます。



ワークショップの様子

活動の概要

目 的	子どもが考え表現することを核にした授業のデザインを、ICTの有効利用との関連で実現すること
連携メンバー および役割	株式会社学研ホールディングス …学研が開発したデジタルコンテンツや教材等を授業で使って効果を検討している スカイ株式会社…会議室と大型プロジェクションを使用してワークショップを実施 現職教員…ワークショップに参加し授業構想の発表・検討・報告を行う 関西大学総合情報学部教授 黒上晴夫…ワークショップ全体のスーパーバイズ 関西大学大学院生…ワークショップのファシリテーションに関するアドバイス 関西大学学部生…ワークショップの立案、準備、司会
活動地域	ワークショップは大阪・新大阪で開催（対象は兵庫県・大阪府・京都府・奈良県など在勤の現職教員）
活動期間	2002年～（継続中）

連携の経緯

活動開始当初は、教育映像の制作企業などの協力を得て、デジタルコンテンツの活用方法を現職教員と学生・院生とともに考える研究会であった。その後多様なICTの導入を背景に、また授業の焦点が「わかる授業」から「考える授業」に移行する中で、単元の流れとICT活用をより有機的・全体的にデザインする必要性を感じ、また全員でそれを考えることの重要性に鑑み、現在のワークショップに活動を変更した。

解決すべき課題

- (1) ICTの有効利用
- (2) 知識・技能の活用型授業のデザイン

大学の役割

学校に急速にICTが導入されている。また、新学習指導要領では習得した知識や技能を活用する授業が求められている。ICTは、知識や技能の習得に用いるのは容易だと思われるが、一方でアイデアを共有したり表現したりする学習者中心の授業をサポートする力も大きい。このワークショップでは、ICTを活かしながら知識・技能の活用場面をどのように無理なく単元全体の流れの中で実現するかを議論しながらデザインする。

毎回のワークショップでは、参加する教員がこれから実施する単元を一つとりあげる。基本的な流れは以下のとおりである。

- ①教科書や指導書の記述について整理する。
- ②授業の実施校の施設やそれまでの学習状況などを背景に、確実に内容を理解させるための流れについて検討する。
- ③教科書の情報では不足する点、学習内容の順序を変更すべき箇所などを洗い出す。
- ④思考を誘い、理解を深めるためにはどのような学習活動が必要かを明らかにする。
- ⑤学習内容の分かりやすい提示、思考の深化、考えたことの共有・発表、などの場面におけるICTの活用方法を検討する。

この流れを基本として、各単元のデザインにあてはめながら資料を揃えて流れを微調整する計画を学生・院生がたてる。ワークショップの司会は学生が行う。教員は、ワークショップに参加しながら全体を見て必要なときにアドバイスを行う。

成果

- (1) 現場におけるICT活用の促進
- (2) 現場における活用型授業の促進
- (3) 学部生の授業に関するセンスの醸成
- (4) コミュニティの形成

今後の展望

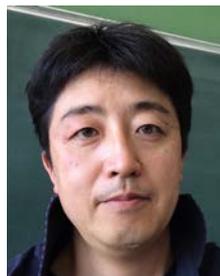
- (1) 若手メンバーの勧誘
- (2) ワークショップの成果を振り返る機会の確保
- (3) ワークショップ会場の確保

現場の声



・浅香一世氏（高槻市立北清水小学校教諭）

教育に熱意をもった人たちが集まるIW研に参加するとアイデアがうまれます。ワークショップで議論し、情報交換をするからです。毎回楽しく参加しています。



・早川文氏（高槻市立阿武山小学校教諭）

研究者と現場の人間が互いに情報や知恵を出し合い、一つの具体物を創っていくところが、大きな魅力の一つです。普段得ることのできない考え方や情報を得ることができます。

研究者の紹介



総合情報学部 教授
黒上 晴夫
(くろかみ はるお)

思考スキルを育てる方法、カリキュラムと授業のデザイン、ICTの有効利用などを研究の中心とし、学校の授業研究のアドバイスを行っている。

卓球競技へのレイティング導入 ～年齢・性別・身体的能力に捉われない大会を目指して～

卓球競技における新たな技能レベル認定制度「レイティング」の導入に取り組んでいます。技能レベルを客観的に把握することで年齢・性別・身体的能力等に左右されない大会運営のサポートと日本トップ選手の育成を目指します。



レイティング制度による卓球大会の様子①

活動の概要

目的	卓球競技における技能レベル認定制度の確立および大会運営のサポート、日本トップ選手の育成
連携メンバー	羽曳野市卓球連盟 各種卓球競技団体 関西大学総合情報学部教授 林勲
活動地域	連携する卓球競技団体の所在地
活動期間	2000年～（継続中）

連携の経緯

本活動の主軸を担う林は、米国での研究期間中、現地のレイティング創設者との交流で、レイティング制度の趣旨および同制度の大会運営や競技者への波及効果について情報を得た。帰国後、レイティングが日本の卓球界において制度化されていない実情を知った林は、レイティング制度の普及と発展に取り組むこととなった。

解決すべき課題

- (1) 年齢・性別・身体的能力に捉われない技能レベル認定制度の確立と選手育成、スポーツ交流



レイティング制度による卓球大会の様子②

日本卓球レイティング推進協議会

理念

レイティングにより、年齢や性別差、身体差、能力差、技術差を超え、老若男女が卓球能力の向上を目標に、また、卓球技術の交流やスポーツを通して人として思いやり豊かな交流を推進するスポーツイベントを発信する。

トップ10

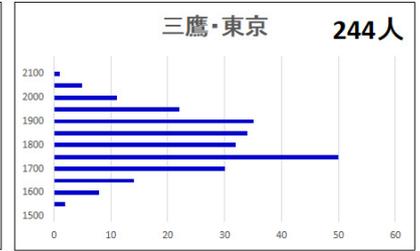
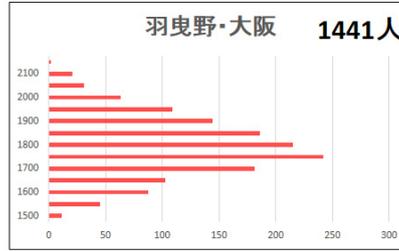
羽曳野・大阪

No.	会員番号	レイティング
1	1300032	2128
2	1400042	2114
3	1500215	2095
4	1200201	2091
5	1040050	2087
6	1400257	2085
7	1400084	2074
8	1500284	2073
9	1000067	2071
10	1400156	2070

三鷹・東京

No.	会員番号	レイティング
1	1350011	2058
2	1350010	2033
3	1450088	2031
4	1450011	2024
5	1450048	2008
5	1450052	2008
7	1350057	1989
8	1450028	1983
9	1450012	1978
10	1350012	1976

レイティング・ヒストグラム



大学の役割

レイティング制度の普及にあたり、林は主に以下の役割を担っている。

①制度導入にかかる普及団体設立および関係機関との調整

林は普及団体として「日本卓球レイティング推進協議会」を設立し、レイティングの専門家や著名な卓球世界メダリストを招へいし、羽曳野市卓球連盟をはじめ、関係機関に制度利用を働きかけ、複数の団体で制度利用が始まった。現在、協議会は会員管理やレイティング計算等、制度の支柱となる作業全般を担っている。

②レイティングにかかるプログラミングと計算

詳細な説明は割愛するが、レイティングとは、対戦する競技者の勝敗とレイティング（ポイント）差に応じて変動レイティング値が決まり、その変動レイティング値を各競技者のレイティング値から加点あるいは減点する技能認定法である。地域の卓球競技団体ではレイティング大会が開催され、大会参加者は自動的に協議会会員となり、試合結果によって会員のレイティング値が更新される。大会毎に上記の膨大な計算に加え、新規会員の初期値設定など多くの計算処理を行うため、林は専門的知識を活用し複雑な計算処理のプログラムを構築して、その大会の運営方法と計算結果を卓球競技団体に提供している。

③レイティング制度のさらなる普及

制度利用団体のさらなる拡充に向け、各地方の競技団体に対して制度利用を働きかけている。

最後に、レイティング制度が技術交流や人間交流の促進に繋がる理由について以下に説明する。これまでの実績から、レイティングは競技者の技能レベルを正確に評価できることが確認されている。したがって、レイティング大会では、レイティング値のみで技能レベルを評価でき、例えば年齢・性別・障がいの制限を超えた大会運営が可能となる。すなわち、競技者技能の正当な評価、大会運営の公平性の確保、年齢・性別・障がいを超えた社会交流の促進など、従来の常識の枠を越えたスポーツ交流を実現できる。大学の学際的知見によりスポーツを通じて新たな人間交流を生み出した一例であると言える。

成果

- (1) 2,500人以上の会員登録
- (2) 複数の卓球競技団体でレイティング大会を実施

今後の展望

- (1) レイティングシステムのさらなる普及と日本トップ選手の育成

研究者の紹介



総合情報学部 教授
林 勲
(はやし いさお)

専門は脳知能情報学。脳からの信号でロボットを操作する脳コンピュータインタフェース、人とロボットが協調学習するシステム、スポーツ動作から技・スキルを獲得する身体知獲得、戦術戦略の知識化と情報可視化などの研究を行っている。

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

社会調査士を目指す学生が専門的知見を活用して高槻市の社会調査を行っています。完成度の高い郵送調査は高い回収率を実現しています。



調査票の郵送準備を行う学生の様子

活動の概要

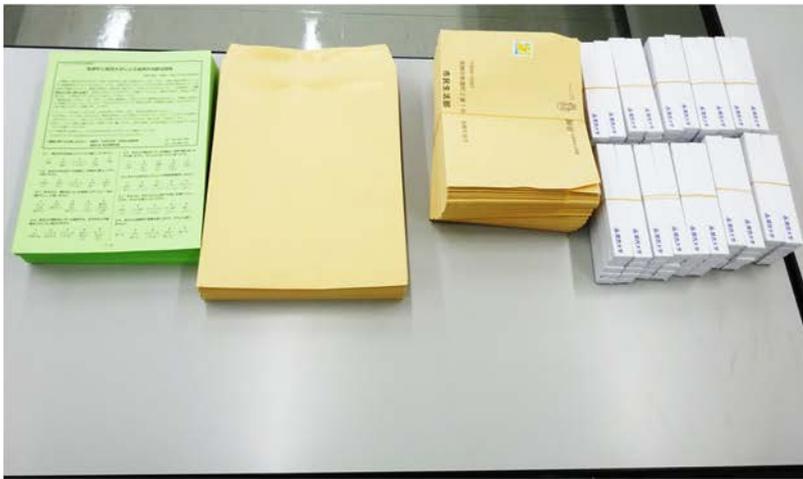
目的	高槻市内全域への郵送調査による高槻市民意識調査の実施
連携メンバー および役割	高槻市・・・調査対象者の抽出、宛名ラベルの作成 関西大学総合情報学部・・・調査票の作成・発送、データの入力・管理、報告書の作成
活動地域	大阪府高槻市
活動期間	2011年～（継続中）

連携の経緯

関西大学総合情報学部では2010年度に社会調査士カリキュラムを導入し、2011年度より「社会調査実習」を開講している。実習内容として地域住民に対する郵送調査を検討したところ、地元自治体として既に大学との間で包括的な地域連携協定を締結している高槻市と連携して高槻市民への郵送による意識調査を実施することになった。

解決すべき課題

- (1) 高槻市の施策の基礎資料となるデータを取得し、市政と市民生活に関する現状を把握する
- (2) 高槻市民の生活とものの見方に関する研究と教育を行うため、市民の日常に関する意識を把握する



郵送物一式



意識調査を通じて完成した報告書

大学の役割

郵送調査による市民の意識調査を行うこの事例は、高槻市と大学の協議による役割分担の策定から始まった。協議の中では双方のメリットが合致し、上記「連携メンバーおよび役割」のとおり役割を決定。高槻市のパートナーとして活動を展開することとなった。

調査の方法や内容について高槻市側と協議しながら、郵送調査について教科書的に推奨される手法および先行成功事例を参考に準備を行い、独自性・専門性の高い郵送調査を実施した。以下は採用された手法の一部を紹介したもの。

①調査票

目立ちやすさと読みやすさを追求し、裏面が透けにくい厚口紙を使用。フォントや質問の順番にも配慮した。また、挨拶文は必要最低限にとどめ行間も十分に空けるなど、特に1ページ目の印象に配慮した。

②予告ハガキ

調査票到着への心の準備と調査に対する期待感向上のために予告ハガキを送付した。

③発送・返送用封筒

調査票を折り曲げなくとも良いよう発送・返送いずれも角2サイズ封筒を利用した。また、返送にかかる負担を軽減するため、シール加工済みの封筒に切手を貼付した返信用封筒を同封した。

④同封物

回答時の便宜を図り、ボールペンを関西大学のロゴのある箱に入れて同封した。

⑤調査票送付日

調査票および調査予告ハガキは、夏休みを避けるため、お盆休み終了後に送付した。さらに調査票は週末に届くように調整した。

成果

- (1) 調査開始時より毎年継続して6割程度の回収率を実現
- (2) 毎年度末に調査報告書を発行し、調査結果を公開

今後の展望

- (1) 郵送調査の継続実施と回収率の維持あるいは向上

研究者の紹介



総合情報学部 准教授
松本 渉
(まつもと わたる)

専門は社会調査、非営利組織論。
市民の意識調査の実践と分析、そして調査法の研究を継続するとともに、マスコミの世論調査の助言などを行っている。

オリックス・バファローズ 観客動向調査研究2013

萩谷総合公園野球場（高槻市）で行われるオリックス・バファローズの試合の観客動向調査。総合情報学部（同市にキャンパス）で社会調査やマーケティングを学ぶ学生が調査・分析し、発表しました。



球場で調査を行う学生

活動の概要

目的	野球観戦についてのマーケティング調査の実施 / 大学とプロ野球 オリックス・バファローズとの連携強化
連携メンバー および役割	オリックス野球クラブ株式会社（オリックス・バファローズ） …野球ビジネスのレクチャー、球団として要望する調査項目の提示 関西大学総合情報学部准教授 松本渉 / 同学部教授 徳山美津恵…調査設計と実施、データの分析と報告
活動地域	萩谷総合公園野球場（大阪府高槻市） / 関西大学高槻キャンパス
活動期間	2013年5月8日（オリックス・バファローズでの研修）～2013年11月19日（研究発表会）

連携の経緯

球団側から高槻市にある萩谷総合公園野球場で行われる二軍の公式戦の観客動向調査について、近隣にキャンパスが位置する関西大学総合情報学部にて打診があった。同学部で調査を専門とする教員2人が検討した結果、双方にとってメリットとなることから、両教員とそのゼミ生が調査プロジェクトに取り組むことになった。

解決すべき課題

- (1) 市民球場での試合実施と告知の効果測定
- (2) 学生視点での分析と提案に関する期待



球団の方の助言を得ながら研修を受ける様子



成果発表時の様子

大学の役割

本プロジェクトでは、オリックス・バファローズの求める専門的な調査の必要性にこたえ、関西大学総合情報学部において調査を専門とする2ゼミ（社会調査とマーケティング）合同で市民球場（萩谷総合公園野球場）での同球団の公式試合に関する調査と分析を行った。

まず、5月に同球団を訪問して野球ビジネスに関する研修と試合開催の球団側の意図に関するヒアリングを行った後、大学内にて学生たちが自分たちの手で調査手法と調査項目を決定し、7月6日の試合当日に調査を実施した。

その後、ゼミ内外の時間を利用してデータの入力と分析を進めた。最終的に、11月19日に関西大学高槻キャンパス内にて、球団関係者と高槻市関係者、関西大学総合情報学部生の前で分析結果と戦略提案についてのプレゼンテーションと質疑応答を行った。

成果

- (1) 関西大学高槻キャンパス内で球団と高槻市に対し調査結果を発表
- (2) 球団への調査データと分析結果の提供
- (3) 学生が社会調査の実際を体験

今後の展望

- (1) 新しい視点での再調査
- (2) 他学部ゼミを含めた取り組み

現場の声

- ・オリックス野球クラブ株式会社

球団ビジネスの基本で地域密着であり地元高槻の関大生が調査する意味は大きい。その調査結果は球団、行政の大きな関心事であり『役に立つ調査』をしていただいた意義は大きい。

- ・学生

調査設計から分析までの一連の作業を行う中で、社会で活躍する方々と関わったこと、プロスポーツをビジネスの観点で見ることが出来たことが非常に有意義な点でした。

研究者の紹介



総合情報学部 准教授
松本 渉
(まつもと わたる)

専門は社会調査、非営利組織論。市民の意識調査の実践と分析、そして調査法の研究を継続するとともに、マスコミの世論調査の助言などを行っている。



総合情報学部 教授
徳山 美津恵
(とくやま みつえ)

専門はマーケティング、ブランド論。地域ブランドの研究を継続する中で、自治体の各種委員を歴任するだけでなく、ゼミ生とともに地域活性化プロジェクトに取り組む。

オリックス・バファローズ 観客動向調査研究2014

前ページに掲載したオリックス・バファローズ観客動向調査の2014年度における活動の事例です。総合情報学部と商学部の学生が専門性を活かした調査・分析および提案を行いました。



球場で調査を行う学生

活動の概要

目的	野球観戦についてのマーケティング調査の実施 / 大学とプロ野球 オリックス・バファローズとの連携強化
連携メンバー および役割	オリックス野球クラブ株式会社（オリックス・バファローズ） …野球ビジネスのレクチャー、球団として要望する調査項目の提示、 「大学生によるマーケティングプレゼンテーション」開催 他大学ゼミナール…調査・分析および報告 関西大学総合情報学部准教授 松本渉 / 関西大学商学部准教授 宮崎慧 …調査設計と実施、データの分析と報告
活動地域	萩谷総合公園野球場（大阪府高槻市） / 関西大学高槻キャンパス
活動期間	2014年4月～11月

連携の経緯

2013年度における観客動向調査研究を受け、オリックス野球クラブ株式会社が再度の調査実施を大学に依頼。2014年度は松本ゼミと宮崎ゼミが調査活動を実施することとなった。また、同社の意向に基づき、2014年度は関西大学以外に大阪商業大学と京都産業大学がそれぞれの視点で調査・分析のうえ、集客力向上に向けた提案を行うこととなった。



成果発表時の様子①

成果発表時の様子②

解決すべき課題

- (1) 市民球場での試合実施と告知の効果測定
- (2) 学生視点での分析と提案に関する期待

大学の役割

本プロジェクトは、2013年度に引き続き、大学生がオリックス・バファローズ2軍戦来場者の観客動向調査・分析を行ったのち、集客力向上に向けた提案を行うものである。

関西大学からは、調査とマーケティングを専門に学ぶ松本ゼミと宮崎ゼミが参画。各ゼミ生が中心となって調査手法と調査項目を作成のうえ、同球団の公式試合において合同で調査・分析を実施した。また、他大学では大阪商業大学と京都産業大学からそれぞれゼミが別球場で各々の調査活動を展開した。

11月にはオリックス・バファローズが高槻市内で3大学合同の「大学生によるマーケティングプレゼンテーション」を主催。関西大学の学生からは来場者に応援の楽しさを知ってもらうことを目的に「応援グッズの無料貸し出し」などを提案した。他大学からも「SNSによる2軍選手の成長ストーリー発信」や「初心者向け野球ルールガイドの配布」などが提案され、参加大学の学生の間で活発な議論が行われた。

成果

- (1) 関西大学高槻キャンパス内で球団と高槻市に対し調査結果を発表
- (2) 球団への調査データと分析結果の提供
- (3) 学生が社会調査の実際を体験
- (4) 異なる学部の学生間の交流と異なる大学の学生間での意見交換の実現

今後の展望

- (1) 球団および大学双方にとって最良の調査研究活動の模索

研究者の紹介



総合情報学部 准教授
松本 渉
(まつもと わたる)

専門は社会調査、非営利組織論。市民の意識調査の実践と分析、そして調査法の研究を継続するとともに、マスコミの世論調査の助言などを行っている。



商学部 准教授
宮崎 慧
(みやざき けい)

マーケティング・リサーチ、マーケティング・サイエンスを担当。マーケティングデータの分析手法を開発する研究を主に行っている。

堺市と関西大学との地域連携事業 堺市の文化資本を活用した 地域活性化に関するプロジェクト

堺市の文化資本の一つである和菓子をキーワードにしたマップシステム（紙媒体のアナログマップとデジタルマップの連携システム）の作成と情報発信による同市の観光活性化に取り組みました。



完成した「S-Mapi」

活動の概要

目的	若者をターゲットにした堺市の観光活性化のサポート
連携メンバー	大阪府堺市広報部広報課シティプロモーション担当・観光部観光企画課・観光推進課 / 株式会社ハル / 関西大学総合情報学部 堀雅洋ゼミ / 同学部 徳山美津恵ゼミ
活動地域	大阪府堺市内 / 大阪市内 / 関西大学高槻キャンパス
活動期間	2013年10月1日～2014年3月31日



堺市で行われた「堺文化財特別公開」にて地図アプリをPR



難波駅周辺で「S-Mapi」を配布する学生

連携の経緯

2013年度より堺市と関西大学の地域連携事業のプロジェクト募集が全学的に始まった。連携メンバーである堀が堺市広報部広報課シティプロモーション担当とこれまでもプロモーションサイトの構築等で地域連携の取り組みをしていたこともあり、同市観光部担当者と打合せを重ねる中で、新たな観光活性化の取り組みとして、堺市の文化資本を発信するマップシステムの構築というアイデアを実現させることになった。

解決すべき課題

(1) 堺市における観光の活性化

大学の役割

本プロジェクトに参加した総合情報学部掘ゼミ・徳山ゼミの学生が、堺市内でのフィールドワークを行うことで、同市が有する様々な文化資本を観光という観点で整理し、和菓子をはじめとする観光のキーワードと計画を作成した。その過程の中で、総合情報学部の強みを活かし、マップアプリとアナログのマップ^{えすまび}を組み合わせたマップシステムの「S-Mapi」を作成し、それを軸とした情報発信を行った。

現場の声

・株式会社ハル

堺市の観光促進をテーマに、ターゲットでもある学生自身が調査することで若年層のニーズやコミュニケーションの実態が伺えた意味のあるプロジェクトではないかと考えます。

・学生

学生の身軽さを活かし何度もフィールドワークを行うことで堺の生の情報を知ることができました。また、最初から最後まで学生自身がやりきる事で多くの貴重な経験ができたと思います。

研究者の紹介



総合情報学部 教授
堀 雅洋
(ほり まさひろ)

専門は知識情報学。様々な特性のユーザに対して情報のアクセス容易性を保証するための評価手法とデザイン原理を明らかにすることを目指している。



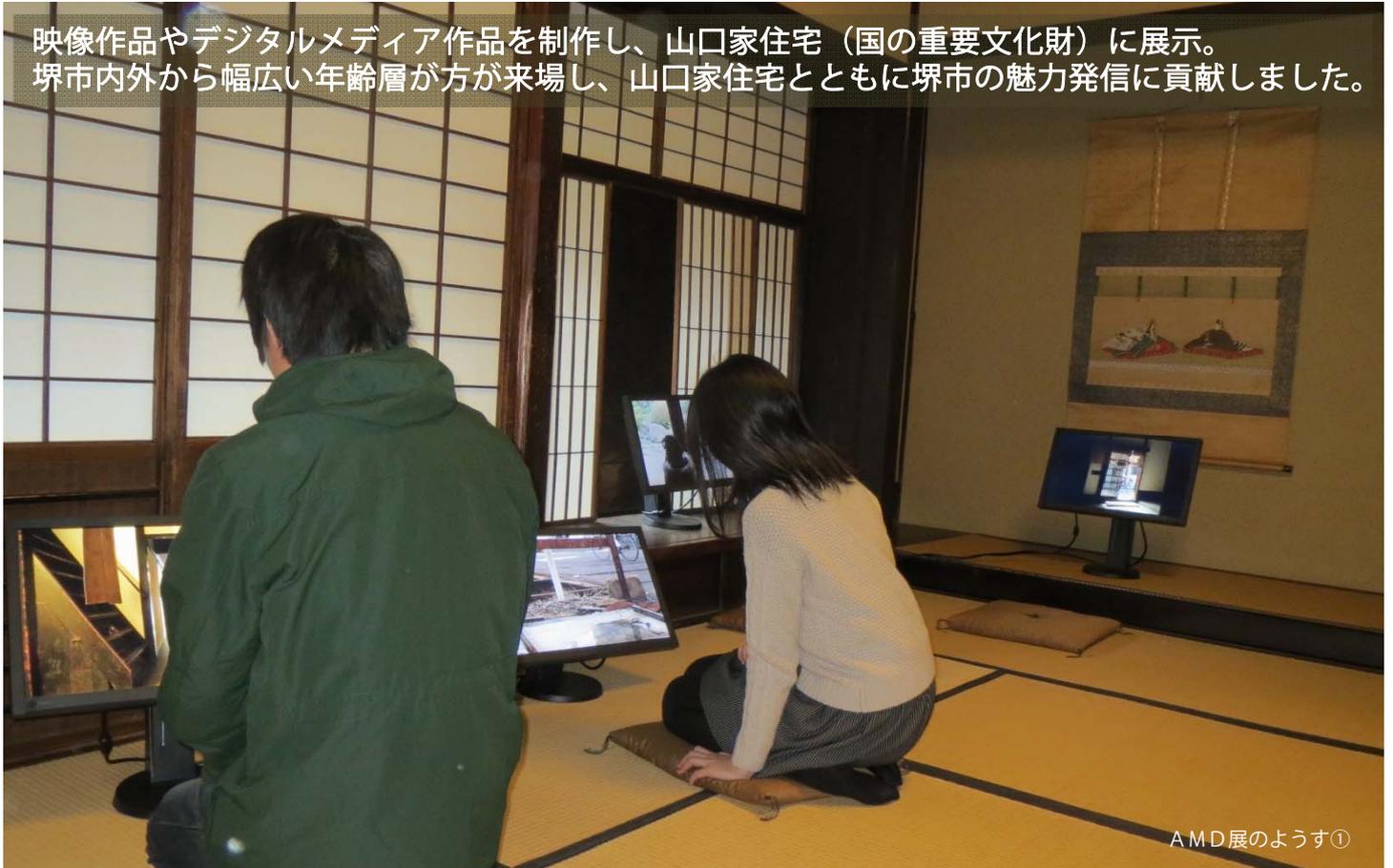
総合情報学部 教授
徳山 美津恵
(とくやま みつえ)

専門はマーケティング、ブランド論。地域ブランドの研究を継続する中で自治体の各種委員を歴任するだけでなく、ゼミ生とともに地域活性化プロジェクトに取り組む。

メディアアート作品と地図アプリで 堺の町屋の魅力を発信

～堺市立町家歴史館・山口家住宅「Art Media Design 展」～

映像作品やデジタルメディア作品を制作し、山口家住宅（国の重要文化財）に展示。
堺市内外から幅広い年齢層の方が来場し、山口家住宅とともに堺市の魅力発信に貢献しました。



AMD展のようす①

活動の概要

目的	学生などが制作したデジタルメディア作品の展示 / 山口家住宅ならびに堺市の魅力発信
連携メンバー	堺市市長公室広報部シティプロモーション担当 堺市文化観光局文化部文化財課 アーティスト 伊東宣明氏、バク・ヨンヒョ氏、大島幸代氏 関西大学総合情報学部 堀雅洋ゼミ、井浦崇ゼミ、松下光範ゼミ、荻野正樹ゼミ
活動地域	大阪府堺市
活動期間	2014年9月～2015年3月（作品展は2015年3月7～8日に開催）

連携の経緯

堺市はかねてより市のプロモーションについて模索していた。堀と懇談する中で、デジタルメディア作品を展示する案が挙げられ、山口家住宅を会場に「Art Media Design 展（AMD 展）」を実施することとなった。

解決すべき課題

- (1) 堺市の知名度の向上
- (2) 堺市の観光活性化
- (3) 山口家住宅など堺に数多くある文化的資本の魅力発信



AMD展パンフレット

AMD展の様子②

大学の役割

「山口家住宅（堺市立町家歴史館）」は、江戸時代初期に建てられた町家で、国の重要文化財にも指定されている貴重な建造物である。

関西大学総合情報学部の4つの研究室と特別協力アーティストは、堺市の協力の下、山口家住宅をはじめとする堺市の魅力を発信することを目的に、デジタルメディア作品の展示会「AMD展」を2日間にわたり開催した。

主な展示作品は以下のとおり。

- ・山口家住宅の魅力発信を目的に制作した特設サイト「堺町家物語」
- ・写真の一部だけを動かすことで観る者の注意をその部分に集める「シネマグラフ」映像
- ・山口家住宅400年の歴史を障子に投影する「Back to the 山口家」
- ・話しかけると返事を返してくれる「老夫婦型会話ロボット」

これらの作品は昔ながらの町家に溶け込み、来場者は懐かしくも新しい空間を体感することとなった。

同展は、堺環濠都市北部地域における町家の魅力を重点的に取りあげ、堺市内外の幅広い層に同地域の町家に来訪する機会を提供。平成23年より同地域内（七まち界限）で民間の町家を開放して行われている「ひな飾りめぐり」と時期を合わせて開催することによって、より効果的な地域の魅力発信につながった。

成果

- (1) 堺市で初めて、重要文化財の町家を会場としたデジタルメディアの作品展を開催
- (2) 例年、山口家住宅への来場者が少なくなる冬の時期に、2日間で計280名が来場
- (3) デジタル技術を用いた情報提示の試み紹介

今後の展望

山口家住宅を利用したアート展の開催について堺市とともに検討を続ける

研究者の紹介



総合情報学部 教授
堀 雅洋
(ほり まさひろ)

専門は知識情報学。様々な特性のユーザに対して情報のアクセス容易性を保証するための評価手法とデザイン原理を明らかにすることを目指している。



総合情報学部 准教授
井浦 崇
(いづら たかし)

専門はメディア・アート。デジタルメディアにおける映像と音楽の新しい創造性をテーマに、視覚と聴覚の相互作用による表現効果を研究。美術家、音楽家として作品制作も行っている。



総合情報学部 教授
松下 光範
(まつした みつのり)

専門はインタラクティブシステムデザイン。様々な情報処理システムの、機能性の高さ（インテリジェンス）と使いやすさ（インタラクション）とを両立するシステムの実現ならびにその方法論について研究を行っている。



総合情報学部 教授
萩野 正樹
(おぎの まさき)

専門は認知ロボティクス。ヒトが発達段階で身につけていく認知能力をロボットに持たせることで、ヒトの持つ認知メカニズムの原理を研究している。特に高次視覚野、社会的なルールの学習、言語獲得等、環境への適応能力について、実際のロボットの発達原理に迫ることをテーマとしている。

学生団体KUMC・社会安全学部生による防災・安全教育

学生団体KUMCと社会安全学部生が高槻市の2014年度防災教育研究委嘱校を中心に防災・安全教育に参画。各校では出張特別授業を行ったほか、防災行事に参加。高槻ミューズキャンパスでは、児童・生徒に施設を案内したほか、防災教育を実践。



関西大学安全ミュージアムを見学する小学生

活動の概要

目的	地域の学校の防災・安全教育への協力・参画による地域社会の防災・減災への貢献 社会安全学部における学習成果の実践
連携メンバー	高槻市教育委員会 / 高槻市立磐手小学校 / 高槻市立奥坂小学校 / 高槻市立第八中学校 関西大学学生団体KUMC 関西大学社会安全学部「経営学概論」「リスクマネジメント論」「危機管理とリーダーシップ」 「基礎演習（2015年度2クラス）」受講者 / 関西大学社会安全学部 亀井克之ゼミ
活動地域	高槻市立磐手小学校・奥坂小学校・第八中学校（大阪府高槻市） / 関西大学高槻ミューズキャンパス
活動期間	2013年4月～（継続中）
費用	ボランティア

連携の経緯

藤井寺市の小学校で防災の出張授業をした経験を持つ学生団体KUMCは、高槻市の小学校各校に「防災・安全の出張授業をします！」と電話でのアプローチを行った。まず磐手小学校からオファーがあり、2013年以来、実績を重ねてきた。やがて高槻市教育委員会から、KUMCに対して、2014年度防災教育研究委嘱校（同市が指定する小中学校）での防災・安全教育について協力依頼がなされるようになった。同時に、関西大学高槻ミューズキャンパスにおける小学生対象の施設見学と防災・安全教育の実施についても、同市から打診があり実現に至った。

解決すべき課題

- (1) 具体的な防災・安全教育の模索（独自性・双方向性・地域性の実現）
- (2) 防災・安全教育の教材作成・準備



高槻ミュージックキャンパスの備蓄倉庫を見学する小学生
(高槻市ホームページより)



基礎演習受講生による防災教育の様子

大学の役割

KUMCIは亀井の指導の下、高槻市内の小中学生を対象に防災・安全教育を行っている。以下はその一例である。

①小学校への出張防災授業

5年生の児童を対象に、災害対応シミュレーション「クロスロード」を用いて、災害時に迫られるさまざまな判断の疑似体験を実施。児童は「避難所に避難する時にペットを連れていきますか？」などの約20問の設問に「はい」「いいえ」で回答した後、各設問について意見交換を行った。

②小学生の関西大学への訪問学習

5～6年生の児童が、防災や危機管理を専門とする関西大学社会安全学部を訪れ、座学、見学および実践活動を行った。座学はリスクマネジメントの研究者である亀井が担当。災害時に選択を迫られた際、どう決断すべきかについて児童と学生が意見交換を行った。見学ではミュージックキャンパス内の安全ミュージアムや防災倉庫を見学。学生が各施設の案内を行った。最後に、災害時の模擬訓練では簡易バケツリレーや伝言ゲームなどを実施。災害時に必要となる互いに協力する必要性を学習した。

成果

- (1) 2015年1月11日兵庫県庁・毎日新聞社主催「ぼうさい甲子園」において学生団体KUMCIが「だいじょうぶ賞」受賞。これは2014年度高槻市防災教育研究委嘱校を中心に防災・安全教育の出張特別授業を行い、防災・安全関連行事に参画してきたことが評価されたもの。
- (2) 2014年10月20日奥坂小学校5・6年生180人が高槻ミュージックキャンパスを訪問し、社会安全学部「経営学概論」を受講して大学生と防災ゲーム「クロスロード」合同演習
- (3) 2015年1月22日社会安全学部「経営学概論」受講者有志33名が磐手小学校に赴いて「クロスロード」合同演習。
- (4) 2015年5月25日奥坂小学校2年生76人が高槻ミュージックキャンパスを訪問し、社会安全学部「基礎演習（2015年2クラス）」受講生が施設を案内し、バケツリレーなどで防災教育を実践。
- (5) 2015年1月、亀井克之研究室の協力で高槻市が発行した防災副読本『たかつきの防災 めざせ！防災リーダー』を市内の小学5年生全員に配布。2015年3月、高槻市教育委員会『たかつきの防災教育—子どもたちの命を守り抜くために—』を刊行。本連携事例を紹介。
- (6) 2015年9月8日奥坂小学校5年生90名が高槻ミュージックキャンパス施設見学し亀井ゼミ生と「クロスロード」演習

現場の声

- ・ 武田彩（社会安全学部2年生
「経営学概論」受講生）

小学生が、あんなにも、防災について目をきらきらさせながら頑張っている姿を見て、私自身も大変勉強になりました。最近の子どもは主体性がないなどと言われていますが、このような防災教育をする事でも、主体性は生まれ、また、かけがえのない命を守る事にも続くと思えました。

今後の展望

- (1) KUMCIによる高槻市の学校での防災・安全教育の出張授業の継続、教材開発
- (2) 社会安全学部生による高槻市の学校での防災・安全教育への協力・参画
- (3) 高槻ミュージックキャンパスに高槻市立小学校・中学校の児童・生徒が訪問した際に、社会安全学部生による施設案内と合同防災・安全学習

研究者の紹介



社会安全学部 教授
亀井 克之
(かめい かつゆき)

専門は経営学。リスクマネジメント論。企業のリスクマネジメントのほか、さまざまな事象にリスクマネジメントのフレームワークを適用して研究している。2014年より日本リスクマネジメント学会理事長。KUMCI顧問。

学生団体の紹介

- ・ 学生団体KUMCI

社会安全学部生が2010年4月に結成し、2013年7月に関西大学準登録団体となった。「防災教育班」「防災製品の共同開発班」「ハザードマップ班」「イベント班」に分かれて活動して社会貢献している。部員数は100名を超える。「大学で学んだ『防災・減災』の知識を地域社会へ発信する」が団体の理念。

間伐材や地場の木材を使用した木の塀によるブロック塀代替プロジェクト



地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材や地場の木材を活用した木の塀で代替するための商品開発・普及についての産学連携。

実際に設置された木の塀（大阪市天王寺区）

「スーパーフェンス」Tシャツを着用した学生と港製器工業 岡室昇志社長

活動の概要

目的	地震の際に倒壊する危険性のある老朽化した危険なブロック塀を間伐材・地場木材を活用した環境に優しい木の塀で代替し、防災・減災・環境に寄与すること／ 着実に受注を受け、全国森林組合連合会から「間伐材マーク（※）」を取得し、東北各地で設置した「スーパーフェンス」を使った倉庫に対して自治体等から表彰状を受けるようになった現在、防災・環境問題に役立つ商品・技術として、さらなる認知度向上を図ること
連携メンバーおよび役割	港製器工業株式会社…木の塀「スーパーフェンス」および関連製品の技術開発、普及、施工、展示・広報 全国森林組合連合会…「間伐材マーク（※）」の認証 関西大学社会安全学部 亀井克之ゼミ…木の塀「スーパーフェンス」を、広告・マーケティング面から支援、イベントでの展示・広報の支援
活動地域	大阪府高槻市／大阪府吹田市／関西大学高槻ミューズキャンパス／関西大学千里山キャンパス 岩手県上閉伊郡大槌町など全国のスーパーフェンス採用地
活動期間	2012年6月～（継続中）
費用	各種補助金

※間伐材マーク…間伐材や間伐材利用の重要性をPRし、間伐材を用いた製品を表示する間伐材マークの適切な使用を通じて、間伐材推進の普及啓発および間伐材の利用促進と消費者の製品選択に資するもの

連携の経緯

2011年6月、関西大学社会安全学部生が、関西の学校で余った机や椅子を綺麗に整備し、東日本大震災で被災した学校や仮設住宅に贈る「勉強机プロジェクト」に取り組んだ。その際、作業場を提供してくださったのが高槻市の港製器工業株式会社であった。これを契機に、地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を木の塀「スーパーフェンス」で代替する港製器工業株式会社のプロジェクトについて、主としてマーケティング面で協力することとなった。



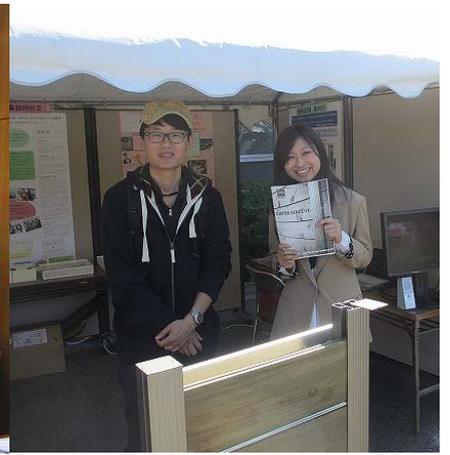
解決すべき課題

- (1) 木製のため経年で反りやすいことなど、技術的課題の解決
- (2) 「間伐材マーク」取得にふさわしい認知度向上
- (3) 間伐材や地場木材の調達・流通
- (4) コストの軽減
- (5) 学会や研究会の研究発表で取り上げた際に特定商品の宣伝と扱われることの払拭
- (6) ブランドの案出
- (7) 学生による取り組みの洗練

日仏シンポジウム「中小企業経営者の健康」会場での展示
フランス中小企業学会理事長のオリビエ・トレス教授



2015年7月7日 港製器工業株式会社本社におけるミーティング



「関大防災Day2013」の様子

大学の役割

どんなに防災・減災や地球環境問題に役立つ製品であっても、①開発者が中小企業である、②大量生産できない、③価格が高めとなる、④認知度を向上するのが容易ではないというような現実的な課題がある。

そこで亀井克之ゼミでは、以下の活動を行っている。

(I)関西大学社会連携部が行うイベントでの展示・広報、(II)関西大学社会安全学部が行うイベントでの展示・広報、(III)木の堀についてのブランド策定、(IV)広告・マーケティングに活用するイラスト・デザイン作成や写真の撮影、(V)ポスティング、(VI)口コミ、(VII)採用地現場訪問、(VIII)展示会における出展の協力、(IX)研究報告会・学会・セミナーにおける報告の支援、(X)「間伐材マーク」を取得した商品にふさわしいマーケティング面での支援。

現場の声

- ・柴田文哉（社会安全学部・亀井ゼミ4年生）
（高槻シティハーフマラソンを完走して）
「スーパーフェンス」ランニング・チームのTシャツを着てアピールしながら走りました。
- ・竹馬流美（社会安全学部・亀井ゼミ3年生）
港製器工業の工場で金属の強度試験機による実演を見たとき、安全・安心に関して本当にしっかり取り組む企業なんだなと思いました。このプロジェクトでは実際に社長さんと交流しながら行える点がすごいです。

成果

- (1) 岩手県大槌町の復興作業員の宿泊施設「ホワイトベース大槌」（2014年4月完成）等、東日本大震災の被災地や、各地で受注・施工例が着実に増加
- (2) 2014年10月に全国森林組合連合会から間伐材マークを取得
- (3) 東北に設置した「スーパーフェンス」を活用した倉庫に対して2015年1月に自治体等から表彰状
- (4) 2014年11月14日京都市国際交流会館での日仏シンポジウム「中小企業経営者の健康」など学会における展示
- (5) マスコミ掲載（『朝日新聞』2014年5月24日朝刊に亀井のコメントと共に掲載）
- (6) 学生によるマーケティング面での協力・工場視察・現場訪問の継続
- (7) 「スーパーフェンス」ランニング・チームを結成し、作成したTシャツを着用して出走するマラソン大会（2014年大阪マラソン、2015年高槻ハーフマラソン等）などのスポーツイベントを通じてのPR
- (8) 港製器本社工場を見学した2014年度社会安全学部招へい研究者レオ・ポール・ダナ教授（ニュージーランド）や2014年11月日仏シンポジウムの際に展示を見学したトレス教授（フランス）による国際的PR
- (9) 2015年10月18日大学コンソーシアム大阪主催「地域連携学生フォーラム2015」で亀井ゼミ生による発表
- (10) 2015年11月13日「関大防災Day」における千里山キャンパス総合図書館前での展示

今後の展望

- (1) 各地の森林組合との連携による間伐材と地場木材活用の推進
- (2) 東日本大震災の被災地における採用の推進
- (3) 「間伐材マーク」取得商品にふさわしいブランド案出、ロゴ開発、コピー開発、パンフレット・DVD改訂
- (4) 日本リスクマネジメント学会などの学会・研究会、関西大学イベント、地域社会のイベント、防災・減災イベント、展示会での展示。マラソン大会などスポーツイベントにおけるTシャツを用いたPR
- (5) 防災・減災、地球環境問題貢献型商品のマーケティングの研究

研究者の紹介



社会安全学部 教授
亀井 克之
(かめい かつゆき)

専門は経営学。リスクマネジメント論。
企業のリスクマネジメントのほか、さまざまな事象にリスクマネジメントのフレームワークを適用して研究している。2014年より日本リスクマネジメント学会理事長。

老舗大国・日本の現状についての研究と外国への紹介

なぜ日本は老舗（長寿企業）の数が世界で一番多いのか？老舗大国・日本の現状を研究し、外国に紹介すると共に老舗企業との連携事業を行っています。



大和郡山市・本家菊屋訪問調査の様子。代表取締役社長・菊岡洋之氏（26代目）と。

活動の概要

目 的	日本に老舗（長寿企業）が多いことの原因と老舗の現状に関する調査および企業の発展に資する情報発信
連携メンバー	関西大学社会安全学部 亀井克之研究室 ……老舗企業訪問調査のコーディネート、訪問・インタビュー調査、研究論文・卒業論文・修士論文の執筆、学会・研究会での報告、老舗企業の商品・サービスについての提案およびマーケティング支援 英国BBC記者 キム・ギトルソン氏…訪問・インタビュー調査、ドキュメンタリー作成、本の執筆 老舗企業（辰馬酒造「白鹿」／本家菊屋（和菓子）／堀金箔紛／いづう（寿司）／月桂冠／吉川木材・奈良きもの芸術専門学校 他）…訪問・インタビュー対応、連携の機会の提供、講演
活動地域	全国・老舗企業所在地、特に関西地域
活動期間	2015年6月～（継続中）
費 用	文部科学省 科学研究費補助金、英国BBC予算 等

連携の経緯

従来から「事業承継」「ファミリービジネス」「老舗」に関する教育・研究を行っていた亀井克之研究室に対して、2015年冒頭に英国BBCキム・ギトルソン記者より、日本の老舗企業に関する共同調査の提案がなされた。老舗企業への取材・訪問調査のコーディネートを通じて、訪問先企業との連携の機会がもたらされた。

解決すべき課題

- (1) 亀井研究室…老舗および中小・ファミリー企業への訪問・インタビュー調査による従来の教育・研究の補完
- (2) 英国BBC…老舗大国・日本における調査・取材の効率化
- (3) 老舗企業…日本が老舗大国であることの原因（老舗大国であることそのものも含め）に関する研究の深化を通じた、国内外への一般的・学術的な情報発信



奈良市・吉川家（吉川木材・奈良きもの芸術専門学校）訪問の様子



2015年7月22日 高槻ミュージックキャンパスでの共同研究報告

大学の役割

亀井研究室の役割はまず何よりもコーディネーションにある。日本が世界一の老舗（長寿企業）大国であるという意外と知られていない事実について、研究と外国への紹介をするため、以下の①～⑤の役割を担った。①外国メディア・研究者に老舗を紹介し、調査をアレンジする、②外国メディア・研究者に日本の老舗研究者（日本経済大学経営学部長・大学院事業承継研究所長・後藤俊夫教授、静岡文化芸術大学・曾根秀一専任講師、他）を紹介し、共同研究をアレンジする、③大学研究室と老舗企業を結び、連携を模索する、④老舗企業に関する卒業論文や修士論文の作成を指導する、⑤①～④について学部生・大学院生が関わり合う。

上記役割の中で具体的には以下の活動を行った。

(I) ギトルソン記者と亀井による調査（ギトルソン記者独自の調査を除く）

2015年7月9日 西宮市・辰馬本家酒造株式会社（創業1662年）

訪問調査、代表取締役・辰馬健仁氏インタビュー

7月10日 大和郡山市・株式会社本家菊屋（創業1585年）

訪問調査、代表取締役社長・菊岡洋之氏インタビュー

7月10日 奈良市・吉川木材・奈良きもの芸術専門学校

訪問調査、吉川弘樹氏インタビュー

7月13日 京都市中京区・堀金箔紛（創業1711年）

訪問調査、代表取締役社長・堀智行氏インタビュー

7月13日 京都市東山区・いづう（創業1781年）

訪問調査、若主人・佐々木勝悟氏インタビュー

7月24日 月桂冠株式会社（創業1637年）

訪問調査、代表取締役社長・大倉治彦氏インタビュー

(II) 亀井ゼミ生による訪問調査

8月27日 奈良市・吉川木材・奈良きもの芸術専門学校訪問調査

8月28日 大和郡山市・株式会社本家菊屋訪問調査 他

(III) 論文指導

竹中工務店（創業1610年）に関する卒業論文、老舗企業・ファミリー企業の日本と台湾の比較調査に関する修士論文 他

現場の声

・竹馬流美（亀井ゼミ3年生）

本家菊屋を訪問して26代目の菊岡洋之社長のお話をうかがいながら、1585年創業から430年という歴史の重みを感じました。

・安藤智之（亀井ゼミ4年生）

卒業論文では、竹中工務店の事例研究を通じて、日本になぜ長寿企業が多いのか、どのように事業を受け継いできたのかを明らかにします。

成果

- (1) 卒業論文（竹中工務店に関するもの）、修士論文（老舗企業の日本台湾比較研究）
- (2) 2015年6月～8月にギトルソン記者と亀井克之研究室による合同調査を集中的に実施
- (3) 老舗企業との連携（吉川家による奈良きもの芸術専門学校の新規事業のマーケティングの提案、辰馬酒造への学生視点からの「どうすれば若者が日本酒文化に触れるようになるか」についての提案）

今後の展望

- (1) ギトルソン記者による日本の老舗企業に関する本の執筆・出版
- (2) 戦略・リスクマネジメント・事業承継に関する老舗企業への訪問・インタビュー調査
- (3) 外国のマスコミ・研究者による老舗企業調査のアレンジと共同調査
- (4) 研究者・学生・院生による研究報告・論文執筆、学部・大学院教育への応用

研究者の紹介



社会安全学部 教授

亀井 克之

(かめい かつゆき)

専門は経営学。リスクマネジメント論。企業のリスクマネジメントのほか、さまざまな事象にリスクマネジメントのフレームワークを適用して研究している。2014年より日本リスクマネジメント学会理事長。

BBC 記者

Kim Gittleson

(キム・ギトルソン)

安倍ジャーナリスト・フェロー、英国BBCビジネス記者。（2015年7月現在）



2015年7月24日 BBCギトルソン記者による月桂冠株式会社・大倉治彦社長インタビュー

防災学習施設と連携した 「複層的な学び」の創出

大阪府の防災学習施設である津波・高潮ステーションにおいて、日常の来館者対応やイベントの企画・運営等を行う大学生ボランティアを組織し、活動しています。



研修の様子

活動の概要

目的	防災の専門家と市民の間に大学生ボランティアを位置づけることで、複層的な学びの創出を目指す
連携メンバー および役割	大阪府西大阪治水事務所 / 大阪府津波・高潮ステーション …水災害の専門家として、大学生に指導、助言をする他、活動場所の提供を行う 関西大学社会安全学部 城下英行研究室…ボランティア学生の組織と指導
活動地域	大阪府大阪市
活動期間	2011年度～（継続中）

連携の経緯

2011年3月に発生した東日本大震災の被災地支援を行うために同年12月に津波・高潮ステーションと「東北『大』観光展」を共催したことが契機となり、連携が始まった。2012年には社会安全学部と大阪府西大阪治水事務所との間で学生ボランティアに関する協定書を締結した。本協定をもとに2013年度から本格的な連携を開始し、現在10名を超える学生が継続的に津波・高潮ステーションの運営に関与している。

解決すべき課題

- (1) 来館者の中に若い人が少ない
- (2) 展示・説明が高度で子どもには分かりにくい
- (3) 施設の認知度が低い



イベントで液状化実験を行う学生



来館者に案内中の学生

大学の役割

防災教育は、「防災に関する知識・技術を伝えること」と狭く定義されることが多い。しかし、知識の量と被害の程度が反比例の関係にあるかといえば、その関係には閾値のようなものがあり、単純に知識さえ伝え続ければ被害が軽減されるとは考えがたい事例が散見される。

現在、わが国には約150ほどの防災学習センターがあり、それらの多くは火災や地震、風水害を主な対象としている。ここでは、展示物や体験コーナーでの体験を通して、知識を得ることができるようになっている。したがって防災学習センターにおける教育方法は、一部で体験的な学びが取り入れられているとはいえ、基本的には、専門家（センター）から非専門家（来訪者）へ、一方向に知識を伝える形式を取っている。

一方、こうしたセンターの多くは、各地方自治体の消防本部や防災部局によって運営されていることが多く、防災対策の専門家が関与しているといえる。そこで、防災学習センターにおいて、防災の専門家と協働する機会を提供することができれば、展示による一方向の知識伝達に加え、協働実践を通じた双方向の学習機会（防災共育）も生み出すことが可能となる。すなわち、防災学習センターにおいて多様な学びの機会を提供でき、防災に関する「複層的な学び」を実現することができると考えられる。

津波・高潮ステーションにおける専門家と大学生・市民の協働実践を通じて、「複層的な学び」が実現しうることを示すことが、大学の重要な役割である。



学生が制作したリーフレット

成果

- (1) 津波・高潮博士認定者7名
- (2) 子ども向け解説リーフレット集の制作・改訂
- (3) 誘客のための「あわぎグルメマップ」の制作
- (4) 定期的な防災イベントの企画・運営

今後の展望

- (1) 大学生ボランティアの常駐化を目指す
- (2) 大学生以外のボランティアの参加を実現する

研究者の紹介



社会安全学部 准教授
城下 英行
(しろした ひでゆき)

2010年度に社会安全学部に着任。本物の防災活動に参加する機会を提供することが防災教育であるという立場に立ち、国内外のさまざまなフィールドで実践的な研究を行っている。

現場の声

- ・若林衛氏（大阪府西大阪治水事務所
防災対策課 企画防災グループ）

大学生自らの発案によるグルメマップの制作や各種イベントの企画など、積極的に運営に関わって頂いている。特に若い世代の防災意識の高まりを感じており、今後とも連携を深めたい。

地域の安心・安全を守る 学生災害ボランティアチーム「社会安全隊」

大学生で構成される災害ボランティア組織「社会安全隊」。災害発生時、お互いに助け合う「共助」の精神を持つ隊員達が、実際の被災地に赴いて災害救援活動を行っています。



社会安全隊

活動の概要

目的	現代における地域の共助組織のあり方の探索 / 学生の共助意識とリーダーシップの養成 / 自然災害時における救援活動の実施
連携メンバー および役割	高槻市消防本部 / 神戸市消防本部 / 宝塚市消防本部・・・講師の派遣、合同訓練の実施 大阪府警高槻警察署・・・防犯キャンペーンの実施 社会安全隊員（学生）・・・災害ボランティア、各種訓練、防犯キャンペーンへの参加 各市区町村社会福祉協議会 ボランティアセンター・・・災害時の派遣先等の指示 関西大学社会安全学部准教授 永田尚三・・・社会安全隊顧問
活動地域	関西大学高槻ミューズキャンパス、近畿圏全域
活動期間	2011年～（継続中）

連携の経緯

近年、消防団に代表される地域の共助組織が、構成員の高齢化や地域コミュニティの崩壊により衰退の一途をたどっている。地域防災の要となる共助組織について、より現代に即した形を探るため、永田は有志の学生を集め、災害ボランティアチーム「社会安全隊」を結成することとなった。

解決すべき課題

- (1) 地域の共助組織の衰退
- (2) 災害救援における人手不足



操法（放水）訓練の様子



災害ボランティア

大学の役割

社会安全隊の活動は、主に以下の3つに分類される。

①訓練

社会安全隊では、消防・警察・自衛官の職を志す学生や、地域ボランティアを行いたいという学生が、災害・防災についての専門的な知識や技術を獲得することを目指している。社会安全隊の訓練では、体力錬成や、災害についての座学での学習に加え、各消防署との合同訓練や消防隊員OBによる技術指導によって、操法（放水）訓練や心肺蘇生法、AEDの操作方法等、実際の災害救助活動に必要な知識や技術を習得している。

②災害ボランティア

各地域で自然災害が発生した際、社会安全隊が各市区町村の社会福祉協議会へ連絡し、指示に基づいて救援活動を行っている。これまでは、台風被害のあった地域へ赴いて、住民と一緒に道路の泥かきや住宅の清掃を行ったり、土のうの作り方を教授したりして、それぞれの地域における共助の手助けを行ってきた。

③防犯ボランティア

社会安全隊は高槻警察署の公認団体であり、同署が防犯キャンペーンを行う際、その活動に参加している。

上記の活動を通して、隊員達は災害現場の現状や救援活動の厳しさ、また地域ぐるみで助け合うことの大切さを実感しながら、共助の意識やリーダーシップを学んでいる。

地域防災の要である住民組織が時代の流れとともに衰退していく今、増加する災害に対応する“地域の共助力向上”が大きな課題となっている。社会安全隊の運営を通して現代の共助組織のあり方を探り、各地域における危機管理組織の整備や標準化を推進するため、永田と隊員達の活動は続く。

成果

- (1) 共助意識の体得
- (2) 災害現場での被災者の支援

今後の展望

- (1) 各地域とのより強固な連携体制の構築
- (2) 協力関係先、および安全隊隊員の増加

研究者の紹介



社会安全学部 准教授
永田 尚三
(ながた しょうぞう)

消防防災行政研究について、行政学、公共政策学、政治学の分野から長年研究している。研究のみならず、実務家の政策教育活動も熱心に行っている。

現場の声

- ・伊木翼（社会安全隊隊長、社会安全学部3年生）



社会安全隊は日々有事に備え、体力訓練、礼式訓練、操法訓練を実施しています。操法訓練は特に力を入れ、一連の細かい動作にまで気を配り、錬度を高めています。決してやさしい訓練ではありませんが、地域のため、安全のために努力を積み重ねています。活躍の場が無いことが本当は望ましいですが、災害等有事の際には社会安全隊員として、出来る限り活躍できることを目標としています。社会安全隊での一挙一動が社会貢献になるとの自覚を持ち、社会人に向けての成長の場としてこれからも頑張っていきます。

公共政策フォーラム2014 in 京丹後

～学生による地域政策の提案～

地域活性化の取り組みを提案する「公共政策学（※）」の研究フォーラムで、社会安全学部永田ゼミが京丹後市教育長賞を受賞しました。



ゼミ生による発表の様子

※公共政策…公園の設置やごみ収集のような身近なものから、地域活性化や経済振興に至るまで、多岐に渡って人々の生活を作り上げる活動。

活動の概要

目 的	研究を通じた学生のプレゼンテーション能力の向上、地域に適合する活性化政策の提案
連携メンバー および役割	公共政策フォーラム2014in京丹後実行委員会（日本公共政策学会・京丹後市）…研究フォーラム実施主体、審査員 京丹後市議会・京丹後市教育委員会…研究フォーラム後援 京丹後市役所 / 夕日ヶ浦・木津観光協会 / 京丹後観光協会 / 京都府織物・機械金属振興センター / 丹後織物工業組合 / 羽衣ステーション…取材協力 関西大学社会安全学部 永田尚三ゼミ…現地調査および研究発表の実施
活動地域	京都府京丹後市
活動期間	2014年10月

連携の経緯

日本公共政策学会は、毎年全国から一つの地域を選定し、「公共政策フォーラム」を開催している。そのフォーラムは、よりよい公共政策の研究を目的とし、地域に即した活性化政策を提案しあうものである。同学会に所属する永田は、長年この研究フォーラムに参加しており、2014年度も永田ゼミとして出場することとなった。

解決すべき課題

- (1) 観光資源の効率的な活用
- (2) 市町村合併による地域間・構成員同士の連携



京丹後市教育長賞 受賞の様子



永田ゼミ 集合写真

大学の役割

2014年に永田ゼミが参加した公共政策フォーラムは、京都府京丹後市で開催され、同市の市政に効果的な公共政策の提案が課題とされた。

永田ゼミは、地域のニーズを把握するため、京丹後市役所や観光協会等へのヒアリング、また観光資源の調査を実施。その結果、「温泉」を売り込みたいというニーズや、観光資源である「絹織物」の存在を知った。一方、過去の市町村合併の名残で、温泉街と絹織物の生産地の間に、未だ密接な連携関係がないことも判明。京丹後市のニーズ、観光資源、および課題を掴んだ永田ゼミは、エコの観点を取り入れた絹織物のリサイクル、そして地域内の連携による、温泉街で着用する絹製の周遊着の開発を提案。その独創性と持続可能性の高さが審査員の目にとまり、京丹後市教育長賞を受賞した。

このように、永田ゼミはニーズと観光資源の発掘を通じて地域課題を発見し、課題解決に寄与する新たな政策を提案した。今後も永田ゼミは公共政策フォーラムを通じて、地域のニーズ・資源・課題の発見を行いながら、研究対象となる地域の課題解決を目指していく。



取材先一覧(発表で使用したスライド)

成果

- (1) 京丹後市教育長賞の受賞
- (2) 京丹後市での活用可能性のある政策提案

今後の展望

- (1) 次回公共政策フォーラムでの受賞

研究者の紹介



社会安全学部 准教授
永田 尚三
(ながた しょうぞう)

消防防災行政研究について、行政学、公共政策学、政治学の分野から長年研究している。研究のみならず、実務家の政策教育活動も熱心に行っている。

現場の声

- ・辻村 滋 (永田ゼミ4年生)

永田ゼミナールでは毎年政策コンペに参加し、受賞を目指して活動をしています。ゼミ生全員が一丸となり、1ヶ月という短期間で論文の作成から発表の完成までを要求され、高い集中力とチームワークを大切に取り組みました。私たちの発表が永田ゼミナールで初の受賞を達成できたことを嬉しく思うと同時に、政策コンペの活動を通じ、京丹後市の様々な分野の方々と触れ合うことができ、また京丹後市への情熱を目の当たりにし、貴重な経験となりました。

丹波豪雨災害における 官民の災害対応調査

2014年8月に丹波市市島地区で発生した豪雨災害における行政および住民の災害対応、復旧の取り組みについて、学術的立場から調査を行い、復旧・復興の取り組みに寄与する基礎的情報を構築しました。



丹波市市島地区 豪雨災害被害箇所

活動の概要

目的	2014年8月に発生した豪雨災害における行政・住民の災害対応状況について調査する
連携メンバー	兵庫県丹波市 兵庫県社会福祉協議会 関西大学社会安全学部 越山健治研究室 / 菅磨志保研究室
活動地域	兵庫県丹波市市島地区、春日地区
活動期間	2014年8月～2015年3月

連携の経緯

兵庫県丹波市で発生した豪雨災害被害に対して、災害に関係する大学研究者や実務者のネットワークに調査や支援の呼びかけがあり、関西大学社会安全学部から2研究室が参画した。

解決すべき課題

- (1) 災害被害からの再建計画の立案
- (2) 支援の受け入れ体制や進め方
- (3) 避難や行政対応などの災害調査
- (4) 住民レベルの被害の実態の把握
- (5) 住民の生活再建への道筋
- (6) 災害支援と福祉支援の両立



前山地区聴取調査（2014年11月15日）

大学の役割

災害が発生した際の学術調査は、専門機関の災害対応や住民支援の阻害要因となることが指摘されるが、一方で、教訓や課題の同定や抽出、中長期的な支援内容への展開、今後の災害対策への情報蓄積という点で専門家の役割が問われる場面でもある。この両者は必ずしも対立するものではなく、互いに連携し、被災者・被災地にとって有益となる情報を創出することが求められる。

越山研究室、菅研究室では、これまでの国内外の災害対応事例の研究や、災害対策の検討に関する基礎的知見が蓄積しており、今回の丹波災害が持つ特徴や課題について、研究機関としての立場から積極的にアプローチすることとなった。

越山研究室では、学生とともに、主に

- ①住民の避難状況に関する調査
- ②避難所の運営状況に関する調査
- ③行政の初動対応に関する調査

を実施し、被災地の住民や行政職員、警察・消防職員等からヒアリングおよび現地における情報資料の収集調査を行った。

菅研究室では、

- ①災害ボランティアセンターの設営に関する調査
- ②外部支援者と地域住民の連携に基づく被災家屋の応急復旧過程の把握
- ③災害時の福祉サービス供給に関する調査

を実施した。

これら調査で得られた資料と結果、考察をとりまとめ、最終報告書を作成し、それぞれ市役所担当課、市社会福祉協議会に提出した。



丹波市市島地区 豪雨災害被害箇所

研究者の紹介



社会安全学部 准教授
越山 健治
(こしやま けんじ)

専門は都市防災計画・都市復興計画・住宅再建計画。災害や事故など多くの危険が日常に存在する中で、空間デザインや社会のしくみで安全を高める計画を考える研究をしています。



社会安全学部 准教授
菅 磨志保
(すが ましほ)

専門は災害社会学、市民活動論。一般市民の視点から、敷居の高くない「防災」のあり方を考えていきたいと思っています。

かくはん

遠心式攪拌機を利用した 水質汚染対策の検証

～東南アジアにおけるエビの養殖池への適用～

溶存酸素濃度を上げるなど水生生物の生存環境を維持する目的で養殖事業で用いられる水流発生機として、従来より使われてきたパドル式水流発生機に代わる省電力遠心式攪拌機に関して流体力学的な見地に基づく性能評価を行っています。東南アジア各国において盛んなエビの養殖池の水質改善および低コスト化に役立つと期待されています。



5,000㎡の池に遠心式攪拌機を並列で4台設置した実用テストの様子 (右下) 同規模池に大出力の水車式攪拌機を10台設置している様子

活動の概要

目的	水質汚染対策として、遠心力を利用した水流発生機（以下、遠心式攪拌機）のエビ養殖事業への活用の可能性を検証すること
連携メンバーおよび役割	株式会社リリフ / BLUPPBインドネシア国営カラワン養殖試験場 (Balai Layanan Usaha Produksi Perikanan Budidaya, Karawan) …遠心式攪拌機を用いた実養殖での数値測定、データ収集 関西大学システム理工学部 流体物理研究室…遠心式攪拌機の流体力学的評価
活動地域	インドネシア共和国 ジャワ島 カラワン州およびジョグジャカルタ市 2015年10月からはスマトラ島ランブン州およびタイ王国
活動期間	2015年3月～（継続中）

連携の経緯

インドネシアや東南アジアにおけるエビ養殖池は、過密養殖や過剰な給餌による水質・底質汚染、低溶存酸素のためエビの病気が多発して生産性が低く、且つ池自体の寿命も短い。養殖事業を手掛ける株式会社リリフは、省電力で運用コストが安価な遠心式攪拌機を利用し、水底まで水流と酸素を供給することでこの問題を解決させることを検討。本学の流体物理研究室（板野）に遠心式攪拌機の有用性の評価について依頼があった。

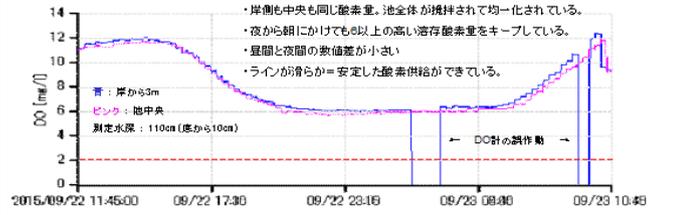


解決すべき課題

(1) 東南アジアにおけるエビ養殖池の水質・底質改善とエビの生産性向上

発生する水流を計測するために本学プールに持ち込まれた遠心式攪拌機

●遠心式攪拌機



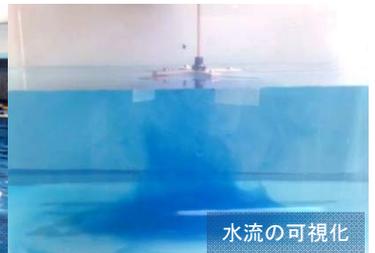
●既存水車式



国営養殖試験場テストにおける1日の溶存酸素量推移



於 関大プール



水流の可視化



現地スタッフ



収穫(前回テスト)

(上) 試作1号機と模型テスト

(下) 試験場スタッフと前回テストの水揚げ

大学の役割

現在、日本国内で流通している主要な食用エビ（バナメイ・ブラックタイガー）の大部分は、東南アジア各国における養殖事業によって補われている。当地のエビ養殖池の大部分は、天然のマングローブ林を伐採して造成される。ところが、養殖池の不十分な水質汚染対策、富栄養化や低酸素化などの末に残滓が堆積してしまう池の寿命は2~5年と言われている。使い古された養殖池は汚染された状態のまま放置される一方、養殖事業の継続のため天然のマングローブ林を新たに伐採して池が造営されるため、環境破壊の進行が懸念されてきた。

本事業は、ランニングコストが安価で低騒音の遠心式攪拌機を用いて、従来型よりも強い水流を発生させることにより、養殖池の水質改善の可能性を検証するものである。養殖池における水流発生装置は、水中溶存酸素濃度を上げるとともに、バクテリアなどによる水底堆積物の分解を促進させるために必要な設備であるが、インドネシアを含む東南アジア諸国において、運用に要する電力は不安定かつ高コストである。そこで株式会社リリフは、従来はあまり養殖事業には用いられてこなかった低電力でも運用可能な遠心式攪拌機を水流発生機として活用し、水深が浅く面積の広い東南アジアの養殖池に適した形に改良することを考案した。これに伴い、遠心式攪拌機の流体力学的な評価を流体物理研究室に要請し、板野が検証することとなった。

流体物理研究室では、学内のプールに実機を設置し、水面にトレーサを浮かべ一定時間間隔毎にトレーサの位置を計測することで、水面における水流の強さおよび流線形状の計測を行ってきた。今後は、従来型の水流発生機が生み出す流れとの差異や、複数の攪拌機を運用効果、水面下での流れを測定するなど検証を続け、東南アジアで最適化された水流発生機を活用するとともに、ひいてはマングローブ林を含む環境保全を目指す。

成果

- (1) 大学プールでの駆動能力と溶存酸素推移の測定を終え、改良機を製造してインドネシアにて実養殖テスト中。水質に関するデータ（水流域と溶存酸素）は、当初予測していた以上に良好な数値で推移している。生産性の結果は、11月初旬の水揚げ時に確定する。

今後の展望

- (1) さまざまな条件下での遠心式攪拌機による水流発生実験と、計測およびデータ解析の継続
- (2) 模型を用いた実験や実機の計測結果に基づく遠心式攪拌機の改良提案

現場の声

・株式会社リリフ

板野先生のご協力で完成した遠心式攪拌機（弊社での名称はバイオ・ウイング）を実際に池で稼働させると、数日で良好な結果が現れ始めました。24時間15分毎に測定している溶存酸素値が池全体で均一に安定し、且つ省エネ効果も抜群で、電気代が既存水車の10分の1程度にまで削減されています。省エネと池全体の水質・水底改善という二律背反する課題を見事にクリアできました。徐々に噂が広まり、他地域や他国からも実用テストの要望が増加しています。

研究者の紹介



システム理工学部 准教授
板野 智昭
(いたの ともあき)

専門は流体物理学。多孔性膜を透過する流れから乱流や地球規模の熱対流など、さまざまなスケールの流れを数値的に模擬し研究するのを得意としている。

東日本大震災被災地域の小学校への 理科実験出張授業

東日本大震災の影響で、校舎や実験設備が使えなくなった宮城県石巻市内の小学校を訪問し、大学の実験器具を使って出張授業を行っています。



小学校での授業の様子

活動の概要

目的	東日本大震災により、実験等を十分に行うことができなくなった理科の授業を補う / 小学生の理科への興味を引き出す
連携メンバー	石巻市教育委員会 / 石巻市立小学校 / 関西大学システム理工学部准教授 倉田純一 / 関西大学化学生命工学部教授 河原秀久 / 同学部専任講師 山出和弘
活動地域	宮城県石巻市内の小学校
活動期間	2011年9月～(継続中)

連携の経緯

2011年3月11日、本活動のメンバーの一人である倉田が出張先の仙台市内で東日本大震災に遭遇。宮城県の甚大な被害を目の当たりにし、「小学校の設備も大きな被害を受け、これから相当な期間、理科実験の授業ができなくなるのでは」との懸念を抱き、理科実験器具を持ち込んでの出張講義を企画した。被害の大きかった石巻市の教育委員会に打診したところ、市内の5つの小学校から希望があり、2011年9月、理工系の教員3名とともに理科実験授業を行った。

解決すべき課題

- (1) 東日本大震災による設備・器具の不足
- (2) 小学生の「理科離れ」を加速させる恐れがある実験・実習環境の復興遅れ



双眼実体顕微鏡



自作の顕微鏡を観察する様子

大学の役割

震災半年後の2011年9月より毎年、石巻市内の小学校を訪問し、主に小学校4～6年生を対象に理科実験の出張授業を行っている。

光学顕微鏡を使った植物の花粉の観察や、筋電計を用いて筋肉の動きを調べるなど、大学ならではの実験設備を使い、理科の楽しさを知ってもらいながら、なおかつ小学校の教育課程に沿った授業になるよう、工夫して行っている。

今後の展望

(1) 震災後の変化していく環境とニーズに合わせた学習支援

研究者の紹介

化学生命工学部 教授
河原 秀久
(かわはら ひでひさ)

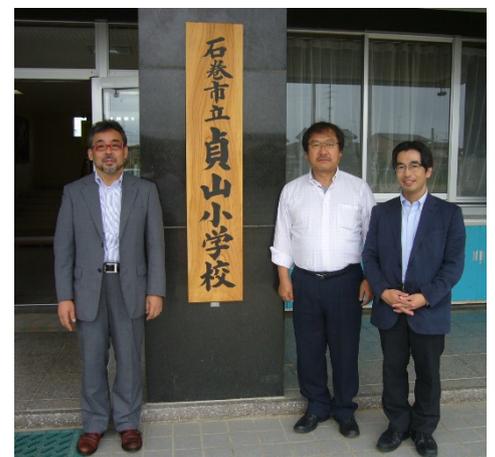
微生物がもつ様々な機能を理解し、産業的に応用するため、微生物の機能の新規探索・解析・効率化に関する研究を行っており、不凍タンパク質の研究では実用化に成功。

システム理工学部 准教授
倉田 純一
(くらた じゅんいち)

光学式変位・速度計測センサの高機能化に関する研究を行い、博士(工学)の学位を取得。現在はサービスロボットについて研究中。

化学生命工学部 専任講師
山出 和弘
(やまだ かずひろ)

専門は生物化学工学。固定化生体触媒やバイオリアクターの研究を長年続けており、それらの成果をもとに、現在は食品・農産廃棄物からの各種有用物質生産についての研究を行っている。



左から倉田・山出・河原

UR男山団地 男山中央センター商店街の空き店舗を活用したコミュニティ拠点 365日住民が気軽に集まれる場所「だんだんテラス」



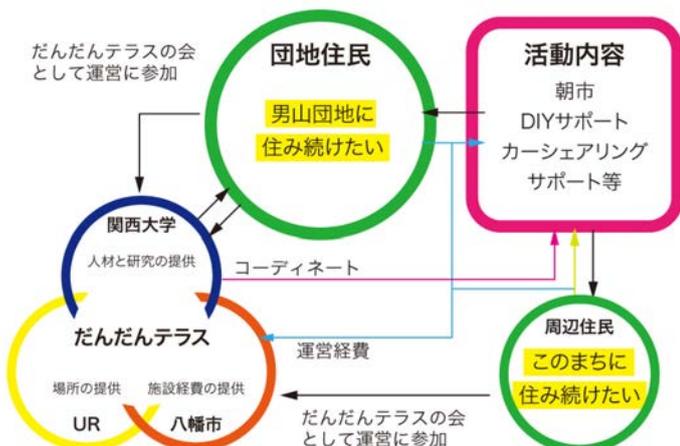
UR男山団地・中央センター商店街の空き店舗を改修し、住民が気軽に集まれるコミュニティ拠点「だんだんテラス」を開設しました。まずは、本プロジェクトの学生メンバーが常駐して運営を行いますが、将来的には、団地住民、地域住民、地域活動団体等が運営の主体となることを目指しています。そのため土台づくり（施設整備と仕組み）を、関西大学・八幡市・UR都市機構がそれぞれの立場から支援する仕組みです。365日オープンを目指し、まずは男山団地、男山地域について議論をする場所を設けることが重要であり、今後の活動についてはこの場所で住民と議論を進めながら検討していきます。

男山団地内に設置された「だんだんテラス」

解決すべき課題

- (1) 次世代を育むまちづくりとして、子どもが豊かに育つために、地域で子育てを支えあい、ともに育ちあう、分かちあう環境づくりの導入・確立
- (2) 多世代が根を張るまちづくりとして、高齢者が住み慣れた地域で住み続けられることを目指した「地域包括ケア」の確立
- (3) 地域に活力を呼び戻すまちづくりとして、地域及び団地が連携した新しい機能及び活動の導入・確立
- (4) 住民が主役となるまちづくりとして、地域の多様な活動主体の育成及び活動ステージの確保

連携の分担



活動の経緯

- 2011年
- 9月 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」を開始
- 2012年
- 4月 研究対象にUR男山団地を選定、調査開始
 - 7月 男山団地再編提案を作成
 - 10月 大阪・京都・東京で「団地再編住みよいまちへ展」を開催
- 2013年
- 2月 男山団地再編提案をもとに、団地住民・地域住民とのワークショップ「だんだんワークショップ」「だんだんカフェ」を実施
 - 2月 男山団地中央センター地区の再編提案の作成
 - 5月 「商店街の空き店舗を利用したコミュニティ拠点案」を作成
 - 10月 京都府知事立会いのもと、八幡市・UR都市機構・関西大学による「男山地域まちづくり連携協定」の締結
 - 11月 「だんだんテラス」の開設
- 2014年
- 3月 1週間連続ワークショップ「だんだんワークショップウィーク」の開催
 - 4月 「だんだんテラスの会」の発足
 - 7月 団地屋外空間活用「おかたづけマーケット」を開催



八幡の歴史を研究する会による講座の様子



子どもたちを対象にした「図工教室」の様子



朝市活動の様子

現場の声

・UR男山団地D地区に住む住民の方

だんだんテラスに初めて来たのは去年の11月頃です。その頃から比べると住民の方にも、だんだんと浸透してきているのかなぁと思います。だんだんテラスでは、隔週の月曜日にはがき絵教室を開いています。普段は学生とおしゃべりしたり、気分転換に絵を描きに来ています。いつでもあいている、必ず誰かがいるというのが、他にはない魅力だと思います。若い学生が運営しているという点も新鮮さがあって魅力のひとつだと思います。

現場の声

・八幡市まちづくり推進部 都市計画課長 武用権太

今、本市の「男山地域再生基本計画」の基本目標の実現に向けて、住民の方々の新たなネットワークをつくることや、地域の情報を発信する役目を「だんだんテラス」が始めています。最初は「だんだんテラス」を始めることが、どれだけの効果を地域にもたらすのか正直、疑問でしたが、365日開いている「だんだんテラス」があることや、そこに居る人たちの楽しそうな人柄や活動に対して、だんだん人が集まりだしました。そして今、この小さな取り組みが大きな広がりを見せ、出来始めたネットワークやこの場所を中心に様々な取り組みが生まれているのを見て、まちが動きだしたと感じています。今後も関西大学に協力していただき、地域の方々とともにこの場所が育つことを期待しています。

大学の役割

- (1) 365日オープンなコミュニティ拠点の運営
- (2) 地域の農家と連携した朝市活動の実施
- (3) 地域の課題発掘、課題解決に向けたワークショップの開催
- (4) 地域団体と連携した教室、講座の実施
- (5) 地域の情報発信を目的とした通信紙（だんだん通信）の発行

今後の展望

- (1) 住民主体の運営への移行
- (2) 地域の課題解決に向けた取り組み

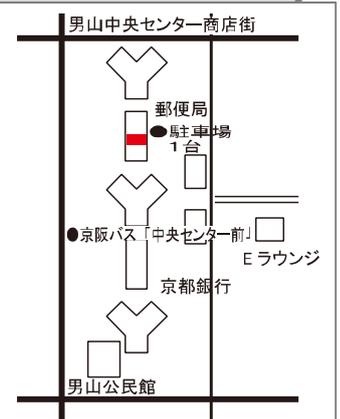
連携メンバー	京都府 / 京都府八幡市 / 独立行政法人UR都市機構 / 男山中央センター商店会 / 男山団地自治会
活動地域	京都府八幡市男山地域
活動期間	2013年11月～（継続中）
費用	関西大学（立ち上げ時の施設整備のみ） / 京都府（地域力再生プロジェクト支援事業） / 京都府八幡市（だんだんテラス補助金）

〒614-8373
京都府八幡市男山八望3-2
だんだんテラス

E-mail
dandan.terrace
@gmail.com

HP
http://ksdp.jimdo.com/

Facebookページ
「だんだんテラス」



研究者の紹介



プロジェクト代表
環境都市工学部建築学科 教授
江川 直樹
(えがわ なおき)

関西大学地域再生センター長
専門は建築環境デザイン



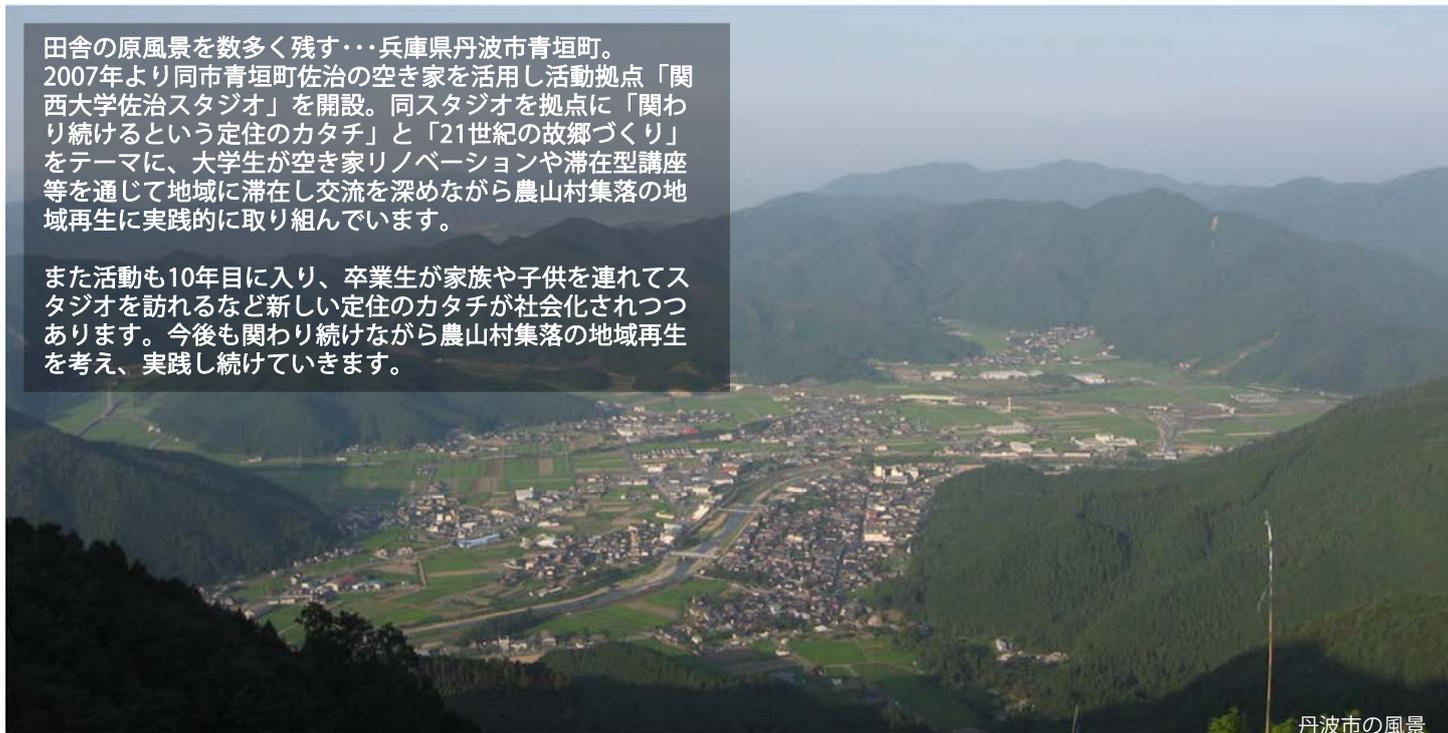
男山地域コーディネーター
辻村 修太郎
(つじむら しゅうたろう)

1989年吹田市出身。関西大学大学院 博士課程前期課程 理工学研究科 ソーシャルデザイン専攻 建築学分野 2013年 修了。だんだんテラスの立ち上げ・運営に携わり、男山地域の情報発信、課題発掘、課題解決に向け取り組んでいる。

一持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による21世紀のふるさとづくりー 農山村集落との交流型定住による故郷づくり

田舎の原風景を数多く残す…兵庫県丹波市青垣町。
2007年より同市青垣町佐治の空き家を活用し活動拠点「関西大学佐治スタジオ」を開設。同スタジオを拠点に「関わり続けるという定住のカタチ」と「21世紀の故郷づくり」をテーマに、大学生が空き家リノベーションや滞在型講座等を通じて地域に滞在し交流を深めながら農山村集落の地域再生に実践的に取り組んでいます。

また活動も10年目に入り、卒業生が家族や子供を連れてスタジオを訪れるなど新しい定住のカタチが社会化されつつあります。今後も関わり続けながら農山村集落の地域再生を考え、実践し続けていきます。

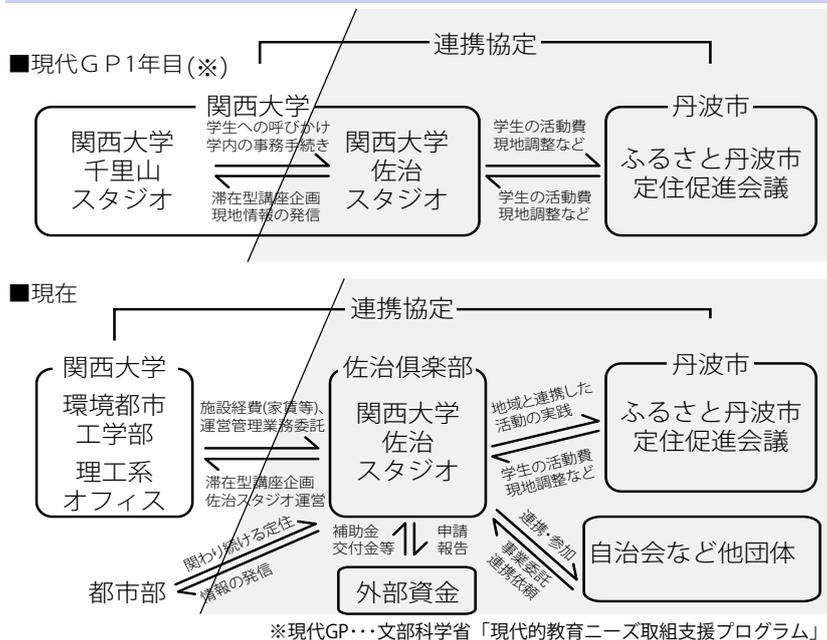


丹波市の風景

解決すべき課題

- (1) 定住人口の減少、空き家の増加等により地域内外との交流機会が減少したことで生じるコミュニティの弱体化
- (2) 空き家の増加、休耕田の増加、手入れが間に合わない人工林の拡大などによる、田舎の原風景と呼べる山河に囲まれた美しい農村景観の変化。
- (3) 大学の不在などに伴う若い世代の都市部への流出を抑止し、若い世代が地域に残るもしくは関わり続けることができる仕組み作り
- (4) 地域が主体となって空き家等、地域の課題に取り組む仕組み作り

連携の分担



活動の経緯

- 2006年
- 9月 日本建築学会近畿支部事業「シナリオ丹波」設計・計画提案競技に建築学科建築環境デザイン研究室として提案、丹波市長賞を受賞し住民への提案を経て具体化へ
- 2007年
- 4月 現地にて、最初の丹波ゼミを開催
 - 7月 丹波市の協力により、空き家を借用し、活動滞在拠点「関西大学佐治スタジオ」開設
 - 7月 関西大学と丹波市が“まちづくり”に関する包括的な協定を締結
 - 10月 文部科学省平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)採択。佐治スタジオを拠点に空き家リノベーションや地域再生などの滞房型講座を展開。
- 2008年
- 2月 学生主体による佐治スタジオの空き家リノベーションが完成。「まちの居場所」へ。
- 2010年
- 3月 現代GP事業終了
 - 4月 関西大学と丹波市との支援により現代GP事業の部分的継続実施。
 - 12月 兵庫県人間サイズのまちづくり賞
- 2011年
- 1月 住民主体の空き家活用サークル「佐治倶楽部」の設立。
 - 5月 まちづくり功労者国土交通大臣表彰
- 2012年
- 4月 佐治スタジオの維持管理業務を佐治倶楽部に委託。地域との連携による事業継続へ。
- 2015年
- 4月 第17回 関西まちづくり賞
 - 10月 3R推進功労者等表彰 文部科学大臣賞



関西大学
佐治スタジオ外観

佐治スタジオ内観

佐治スタジオでの2泊3日
「地域再生」滞在型講座の様子

ATACOM
氷上町愛宕祭り・造り物への参加

佐治倶楽部
空き家を使った地元料理試食会など

空き家リノベーション
学生が主体となって空き家を再生

滞在型交流ワークキャンプ
1週間、現地に滞在し生業体験などに取り組む

地域再生のモデルへ

「関わり続ける定住のカたち」をテーマに、学生の発想力、行動力が地域住民を巻き込み、地域再生が動き始めた。また、学生にとっての丹波は、第二の故郷となり、その魅力を発信する人、いわゆる丹波人口が増え続けていく。佐治スタジオを拠点とする関西大学との連携事業は、こうした新しい形の地域再生のモデルとなるよう、今後も大学と丹波市との関係を深め、さらなる進化を期待する。

丹波市長 辻 重五郎

大学生は地元の財産！

大学のない丹波市にとって、大学生が地元に関わり続けてくれていることは、とても大きな財産です。大学生にはないアイデアや発想力、行動力があり、とても刺激になっている。これからも継続に関わり続け色々なことと一緒に取り組んでいきましょう！

佐治倶楽部 会長 足立成人

大学の役割

- (1) 関西大学佐治スタジオを大学及び地域の滞在活動拠点として開放
- (2) 「地域再生」「ワークキャンプ」といった現地滞在型講座（単位取得科目）の実施
- (3) 地域団体と連携した地域づくりプロジェクト（ATACOMなど）の実践
- (4) 空き家活用サークル「佐治倶楽部」による空き家の維持管理モデル構築
- (5) 交流型定住を促進する情報やきっかけの発信（広報誌の発行等）

今後の展望

- (1) 空き家を活用したコミュニティビジネスの創出・実践
- (2) 地域が主体となって空き家を活用していく仕組みの充実
- (3) 関西大学全学部による横断的な地域再生への実践的活動の充実

連携メンバー	兵庫県丹波市／ふるさと丹波市定住促進会議／佐治倶楽部／佐治地域自治協議会／佐治地域活性化委員会／丹波市観光協会 等
活動地域	兵庫県丹波市青垣町佐治を拠点に市内各所
活動期間	2006年9月～（継続中）
費用	関西大学（科目運営費、佐治スタジオ運営業務委託費）／丹波市（ふるさと丹波市定住促進会議）／佐治倶楽部（自主財源）

〒669-3811
兵庫県丹波市青垣町佐治683
関西大学佐治スタジオ

Tel / Fax 0795-86-7078

E-mail Saji.club@gmail.com

HP <http://sajiaogaki.exblg.jp/>

Facebookページ 「関西大学佐治スタジオ」



研究者の紹介



プロジェクト代表
環境都市工学部建築学科 教授
江川 直樹
(えがわ なおき)

関西大学地域再生センター長
専門は建築環境デザイン



関西大学佐治スタジオ 室長
出町 慎
(でまち まこと)

1982年奈良市出身。関西大学工学部建築学科卒業。2007年より関西大学佐治スタジオ研究員として佐治スタジオに常駐し、交流型定住の仕組み、環境作りや空き家改修などに取り組んでいる。2011年より空き家活用サークル「佐治倶楽部」事務局。2012年より佐治スタジオ室長。

一多世代が交流でき、楽しく歳を重ね成長できるまちを目指してー 「南花台スマートエイジング・シティ」団地再生モデル事業 (愛称：咲^さっく南^{なん}花^{なか}台^{だい}わ^わく^わくプロジェクト)

2014年9月より、大阪府河内長野市南花台地区では、「南花台スマートエイジング・シティ」団地再生モデル事業（愛称：咲っく南花台わくわくプロジェクト）の取り組みが開始され、公民学連携の体制で取り組んでいる。6つのワーキンググループ（以下WG）を設定し、それぞれ専門分野を活かしWG毎に活動しながら、活動の進捗状況や情報共有を行い、議論する場として総合研究会やワーキングリーダー会議を設け、各WG連携のもと事業を進めている。
2015年10月3日にはまちづくり活動拠点として、365日オープンを目指す地域住民のコミュニティ拠点「コノミヤテラス」をコノミヤ南花台店2階に開設した。コノミヤテラスがWGの取り組みの実践の場となり、活動は広がりを見せつつある。現在は、関西大学の学生が常駐して運営を行い、地域住民が主体的に運営していく仕組みを模索している。

「スマートエイジング・シティ」とは・・・「健康寿命の延伸」を大目標に、高齢者だけでなく、いろいろな世代の人たちが、住み慣れた場所で安心して暮らすことができ、快適に住み続けられ、みんなが健康で自律して、生活できる「まち」の意。(造語)



南花台地域を眺める
賃貸集合住宅団地と戸建て住宅からなるニュータウン

解決すべき課題

- (1) 賃貸集合住宅団地（南花台団地）と周辺戸建て住宅における急激な高齢化と人口減少
- (2) 多世代が交流し楽しく歳を重ねることができる仕掛けや生きがいづくり
- (3) 空き家・空き地といったストックが良好に管理され、南花台の魅力を持続し続けることのできる仕組みづくり
- (4) 地域住民が主体的に地域をコーディネートできる仕組みや組織づくり
- (5) 多世代が魅力を感じる健康づくりを通じた健康コミュニティづくり
- (6) 南花台住民による、住民のための情報発信と情報共有の仕組みづくり

連携の分担



公民学の連携の体制

各WGとその目標

活動の経緯

2014年

- 9月 「南花台スマートエイジング・シティ」団地再生モデル事業開始
- 10月 第一回総合研究会（以後月一回開催）
- 10月 ○○(まるまる)ワークショップ（以後月一回開催）

2015年

- 5月 ワーキングリーダー会議（月一回開催）
- 5月 第一回塗ってみよう会（以降13回開催）
- 6月 事業の愛称が「咲っく南花台わくわくプロジェクト」に決定
- 7月 第一回南花台の未来を考える住民集会（○○ワークショップから移行したもの。以後月一回開催）
- 7月 カヌーづくりプロジェクト始動
- 8月 地域ポータルサイト「咲っく南花台.com」の開設
- 8月 U40会議開催
- 9月 咲っくなんか大学開催（以後3回開催）
- 9月 カヌー完成+進水式開催 +SEA TO SUMMIT参加
- 10月 住民コミュニティ拠点「コノミヤテラス」がオープン（みんなの拠点から名称がコノミヤテラスに決定）
- 10月 咲っく南花台健康クラブ開始
- 11月 コノミヤテラス常駐に住民が参加

咲っく南花台

咲っく南花台のロゴ



住民集会の様子



コノミヤテラス内部の様子
河内材を使用した床が特徴



咲っくなんか大学



コノミヤ塗ってみよう会の様子
学生主導のDIYで地域を巻き込み進めている



午前10時のラジオ体操
健康仲間づくりにつながる



現場の声

河内長野市総合政策部
政策企画課 主幹 谷ノ上浩久

南花台住民のニーズを収集しながら、検討を進めてきたこのプロジェクトも、始まって約1年が経過しました。愛称を「咲っく南花台わくわくプロジェクト」とし、まちの情報発信を目的に南花台のホームページを立ち上げ、㈱タニタと連携した咲っく南花台健康クラブをスタートさせ、また、コノミヤ南花台店の空き店舗を活用し、みんなの拠点として「コノミヤテラス」を予定の3分の1整備し、部分的にオープンすることができました。

わずか1年で、ここまでこれた裏には、関西大学が中心となり、定期的に地域ワークショップを実施し、「コノミヤ塗ってみよう会」や「カヌーづくりプロジェクト」などの取り組みを通じて、地域住民とふれあひながら信頼関係を構築できたことが大きかったと思います。

これからも、本プロジェクトの合言葉となっている「まずやってみる⇒やりながら考える」の精神を忘れず、いろんなことにチャレンジしながらプロジェクトが進んでくれればと期待しています。地域住民も関西大学の学生に感化され、まずはやってみようとする行動が見えてきていますので、今後の展開を楽しみにしています。

大学の役割

- (1) 住民主体の365日地域にオープンなコミュニティ拠点の運営の仕組みづくり
- (2) 地域の課題発掘、課題解決に向けたワークショップ開催
- (3) 地域住民・団体と連携したワークショップや講座の企画運営
- (4) 総合研究会、ワーキングリーダー会議等のとりまとめ

今後の展望

- (1) コノミヤテラスの住民主体の運営への移行
- (2) 地域の課題解決に向けた取り組み

連携メンバー	大阪府 / 大阪府河内長野市 / 株式会社タニタ / UR都市再生機構 / 南海電気鉄道株式会社 / 株式会社コノミヤ / 特定非営利法人SEIN / 株式会社アーバンリバーズ / 地元医師会・歯科医師会・薬剤師会、地域事業者 / 地元自治協議会等
活動地域	大阪府河内長野市南花台とその周辺地域
活動期間	2014年9月～(継続中)
費用	文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 / 受託研究(河内長野市) / 関西大学文化・学術活動等奨励金【企画部門】

咲っく南花台.com

ホームページ：
<http://nankadai.com/>
facebook：
「咲っく南花台」で検索

コノミヤテラス

〒586-0077
大阪府河内長野市南花台3-6
コノミヤ南花台店2F
facebook：
「コノミヤテラス」で検索



研究者の紹介



プロジェクト代表
環境都市工学部建築学科 教授
江川 直樹
(えがわ なおき)

関西大学地域再生センター長
専門は建築環境デザイン



関西大学佐治スタジオ 研究員
関谷 大志朗
(せきや たいしろう)

1990年熊本県出身。関西大学大学院 博士課程前期課程 理工学研究科 ソーシャルデザイン専攻 建築学分野 2015年 修了。その後、関西大学佐治スタジオの研究員としてまちづくり活動を実践。コノミヤテラスの立ち上げメンバーの1人であり、現在はコノミヤテラスの運営担当も兼任している。

伝統繋ぐ愛宕祭り ～関大生による立山づくり～

江戸時代から約300年続く、火伏の神を祀る「愛宕信仰」。旧街道の交わるまち、奈良県・大和八木の愛宕祭を盛り上げるため、関西大学の学生が活動しています。



2013年 関西大学の立山

活動の概要

目的	伝統ある愛宕祭の興隆および次世代への継承
連携メンバーおよび役割	八木まちづくり協議会…活動場所の提供、奉賛会との取り次ぎ、現場調整 大和八木地区の地域の方々…学生メンバーへの各種協力、材料提供、機材提供、差し入れ 関西大学環境都市工学部 岡絵理子ゼミ / 環境都市工学部建築学科学生 …立山の企画・制作、八木ラボの運営、祭設営の手伝い
活動地域	奈良県橿原市大和八木地区
活動期間	2010年～（継続中）
費用	奉賛会からの立山作成費

連携の経緯

橿原市八木地区との連携は地域を分断する都市計画道路に関する受託研究を受けたことに始まる。同地区の地域の人々が誇りをもって守り続けていた「愛宕祭」では、地域の祠のお供えとしてつくられる「立山」が減り、「立山」をつくることの出来ない町内が多く存在する。そこで、町内の人々に代わって、岡研究室のゼミ生や建築学科に在籍する有志学生が集い、「関西大学 八木ラボ」として八木地区の愛宕祭に参加することとなった。

解決すべき課題

(1) 愛宕祭りの若手参加者・後継者不足



晩成小学校でのワークショップ



地域の子供も一緒に立て山づくり

大学の役割

愛宕祭とは、京都の愛宕神社を中心に広がる愛宕信仰のお祭りで、火伏の神を祀る夏の行事である。愛宕祭は、伝統行事として全国各地で受け継がれているが、祀り方は様々で、大和八木では各町内がそれぞれ祠と神へのお供え物である「立山」を家や店の前にまつ。夜にはその道沿いに多くの屋台が並び、大変な賑わいをみせる。

近年、「立山」をつくることのできる町内が激減し、高度成長期の一時期は38カ所あった「立山」も、近年の地域の高齢化や人手不足により、4カ所にまで減少した。2011年から岡ゼミの学生を中心に建築学科や有志の学生が集まり、大和八木地区内に「関西大学 八木ラボ」を開設、愛宕祭の「立山」づくりを、町内から請け負うことになった。祭り当日の約2か月前から、大和八木のまちの中に拠点をつくり活動を開始、地域の協力を得て「立山」づくりを行なっている。例年祭りが近づくと、現地で5日間の泊まり込み作業を行う。地元の方々からの材料提供や子ども達に手伝ってもらい、立山の制作を行なっている。また、そこで培われた信頼関係から、学生たちが地元の小学校でおこなう「愛宕祭について」「即興立山づくり」をテーマとしたワークショップ型の授業も恒例となっている。

以上のように、この活動は愛宕祭への学生参加を通じて、失われつつある地域文化を知ると同時に、地域の祭りを次世代へ継承することを目指すものである。

成果

- (1) 地域文化の次世代への継承
- (2) 立山制作による愛宕祭りの賑わいづくり
- (3) 学生が地域の伝統文化を知る

今後の展望

- (1) 「関西大学 八木ラボ」の継続的な愛宕祭りの参加
- (2) 地元の若手参加者の増加

現場の声

- ・高木翔平（関西大学理工学研究科 環境都市工学専攻 修士課程2年生）

八木での立山づくりの活動に3年間関わってきました。毎年、今年の関大生の立山はどんなものができるのかと、作っている段階から、作業場を覗いてくださる地域の方々や、小学生がたくさんおられます。

地域でまちづくりをするにあたっては、地域の方々と信頼関係が大切だとよく言われますが、近くのコロッケ屋のおばあちゃんや団子屋さん、下駄の職人さんと、どんどんまちの人たちに知り合うが増えることで、地域で信頼されてきたんだと実感しています。

研究者の紹介



環境都市工学部 准教授
岡 絵理子
(おか えりこ)

都市計画と住宅を専門としています。実際のまちの動きを、まちの人々とのかわりを通して学生たちに伝えたい、体感してほしいと思っています。

市民の力で市民力を高める 「吹田市市民協働学習センター」

吹田市自治基本条例に則り、「みんなで創るまちづくり」を目指して市民主導の運営組織をつくり、市民自らが学び、考え、議論をし、行動する場を提供しています。



入門講座の様子

活動の概要

目 的	市民と行政の協働による一歩進んだまちづくり創造のため、市民力の高いまちづくり人材を育成すること
連携メンバー および役割	吹田市民・・・志と意欲があれば、運営委員（あるいは協力員）として参加することができる 吹田市文化のまちづくり室・・・事務局として参加。市民と対等な立場での議論を目指す 関西大学環境都市工学部 社会資本計画研究室（北詰恵一研究室） ・・・教員が顧問として参加。学生も学塾部会の講座に参加して運営をサポート
活動地域	大阪府吹田市内
活動期間	2006年10月～（継続中）

連携の経緯

2006年の準備委員会での議論を経て運営委員会を発足させるとき関西大学に学識経験者の参加要請があり、大学教員が参加。市も事務局として参加。以来、運営委員会で議論した方針をもとに、学塾部会での講座開催、市民公益団体間の交流、まちづくりに関する情報発信、まちづくり市民塾の支援と実際の活動を続けている。

解決すべき課題

- (1) 市民：本格的な人材育成プログラム構築
- (2) 市：市民主体の学習事業支援のあり方模索
- (3) 大学研究室：まちづくり研究の実践の場



活動紹介パネル

大学の役割

市民主体でのまちづくり人材育成の場において、無理なく、しかし市民の高い関心を受け留め、教育効果の高い育成プログラム内容になるようサポートしている。

(1) 講座カリキュラム構築：

「入門講座」、「応用講座」、「専門講座(予定)」という講座群の大きな枠組みを作り、各講座にどのような目的や役割を持たせればよいかを議論して決定した。全体の方向性として、「市民と行政のパートナーシップ」という考え方を示し、市民が学ぶべき内容を割り当てている。また、「入門講座」の最後には「応用講座」のテーマに自然に繋がるシンポジウムを企画し、そのコーディネーター役を行った。「応用講座」では、政策立案のテーマ設定、ファシリテート、最終的目標への具体化のサポートを行った。

(2) 学生の参加と研究実施：

「応用講座」に学生を参加させ、若いアイデアを積極的に盛り込める政策立案議論の実質的な進行役を務めさせた。これにより講座が活性化し魅力あるものになったと考えている。また、学生にとっても「まちづくりのプロセスモデル研究」の実践の場として、修士論文や卒業論文での仮説の検証の場となった。

(3) 市民、自治体職員、学生が議論する場：

これら3者が同じテーブルで議論する場を提供。市民にとっては自治体職員が実際にどのような課題に直面しているかを知る場、自治体職員にとっては市民や学生と対等に議論し本音をぶつけられる場、学生にとっては生のまちづくりを経験する場として、非常に貴重な場となった。このことは、中間支援組織としての市民協働学習センターの市民メンバーのコーディネーター能力の向上にも寄与している。

成果

- (1) 講座実施：入門講座11回、応用講座9回、卒業生が実際に活動
- (2) まちづくりテキスト作成
- (3) 交流会：38回実施、69団体の参加
- (4) 市民塾：34団体を採択し活動支援、多くの活動団体のサポート
- (5) 広報誌「つながる」発行：19号

今後の展望

- (1) より深い政策提案のための「専門講座」
- (2) 提案した施策の実験的実践、さらに本格実施
- (3) 市民公益団体交流拡大による具体課題のための市民グループ構築
- (4) 市内大学連携による市民サポートのしくみ構築

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
北詰 恵一
(きたづめ けいいち)

専門は社会資本計画、地域・都市計画、PPP/PFI。

市民協働学習センターラコルタ連携事業

平成27年度(2015)まちづくり吹田学塾「入門講座」
「あなたのまちのすべてがわかる」

一般公開 (講座最終日)
パネルディスカッション「市民自治によるまちづくり」
市民自治、活動に関心のある方、気楽に聞きに来てください

日時：平成27年7月31日(金) 19:00～20:30
場所：吹田市市民公益活動センター(ラコルタ)
吹田市津雲台1-2-1
千里ニュータウンプラザ6階
(7クセ) 阪急千里線南千里駅すぐ

参加費：無料

パネルディスカッション
「市民自治によるまちづくり」
コーディネーター 北詰 恵一 さん(関西大学環境都市工学部 教授)
パネリスト

神徳 守 さん(千里山コミュニティ協議会 理事長)
柳田 康人 さん(青山台公園連合自治会長)
橋本 理 さん(関西大学社会学部 教授)
稲岡 めくみ(吹田市人権文化部文化のまちづくり室長)

まちづくり吹田学塾「入門講座」の一環として行いますが、広く公開いたします。みなさま、ぜひご参加ください。
問い合わせ先：〒564-8530 吹田市泉町1-3-40 吹田市後援文化のまちづくり室(市民協働学習センター事務局)
電話：06-6384-1305(直通)、FAX:06-6368-7345 メール:s_bunka@city.suika.osaka.jp

入門講座リーフレット

大城の住民と共に創る 「スージグワー（※1）週末美術館」 ～大城まちかどギャラリー～



※1 スージグワー…沖縄のことばで「路地」を意味する。

軒先に色水入りの一輪挿しを飾っている様子

活動の概要

目的	沖縄の伝統的技術によって建てられた国指定重要文化財である「中村家住宅」や集落に点在する空き家を利用した、地域住民の世代間交流と歴史的建造物の保存と活用
連携メンバー および役割	大城青年会…庭の企画、空き家の清掃 / 大城花咲翁会…草花の提供 大城こども育成会…庭の企画、一輪挿し用の草花収集 沖縄県立芸術大学…彫刻作品に関するアンケート回答および作品提供 関西大学環境都市工学部 都市設計研究室（木下光研究室）…イベント全体の企画および実施運営
活動地域	<small>なかがみぐんきたなかぐすくそんあざおおぐすく</small> 沖縄県中頭郡北中城村字大城
活動期間	2012年9月～（継続中）

連携の経緯

都市設計研究室では、2010年から継続している「中村家住宅」の実測調査、2012年のムーンライトコンサート（※2）への参加など、さまざまな角度から大城と関わっている。これらの現地での活動が実を結び、また、学生が現地でインターンシップを経験したこともきっかけとなり、地元で年に1回開催されている「スージグワー週末美術館」に協力することとなった。

※2 ムーンライトコンサート…2001年より毎年、梅雨があけた満月の頃に「大城の地域づくり構想」に基づく「花と緑に囲まれた芸術の里」づくりの一環として開催しているイベント

解決すべき課題

- (1) スージグワー（路地）を活用したイベントの開催
- (2) 国指定重要文化財である「中村家住宅」の活用
- (3) 地域住民の世代間交流



QRコードを携帯電話で読み取る様子



大城フォトギャラリー

大学の役割

「スージグワー週末美術館」への参加を通じ、地域住民がさまざまな世代と交流できる環境の創造、空き家の活用および地域活性化を目指している。

以下は、「スージグワー週末美術館」での取り組みの紹介（一部）

- (1) 「みんなでガーデン 大城「色」の庭」：2013年実施
…（目的）地域全体に広がる植栽植樹運動の情報発信による新たな空き家の活用手法の提示
集落内の空き家を有効活用し、軒先と庭の木々に色水の入った小さな一輪挿しを飾ったイベント。
学生たちが選んだ一輪挿しは、化粧品ケースを利用し、色水は地元で伝わる遊びにヒントを得て、花から抽出した。また、それらは地元の青年会および子ども育成会と協働で製作した。
- (2) 「北中城村彫刻カジマヤー計画QRコード」：2012、2013年実施
…（目的）アーティストを目指す芸大生の作品情報発信
沖縄県立芸術大学の学生が作成したテラコッタ彫刻の作品情報を発信するイベント。QRコードには、学生たちが芸大生より収集した作品情報を取り込んだ。そして、沖縄の粘土を使用した素焼きのキューブにQRコードを貼付し、スマートフォン等で読み取れるようにした。
- (3) 「大城フォトギャラリー」：2012、2013年実施…（目的）生活空間を利用した古写真の活用
活動の中で収集した地域住民の思い出の古写真やイベントの写真を、普段見慣れたスージグワー（路地）で展示するイベント。写真は、学生が作製したカラフルに縁取ったフォトフレームや説明文を付属したスライド式のフォトボックスを使用して展示した。配置は、大人と子どもが見やすい高さを計測するなど、バランスと彩りを重視した。
- (4) 「大城QRコードギャラリー」：2012、2013年実施…（目的）集落と古写真を利用した屋外美術館の制作
学生たちが地域住民から収集した写真に解説を加え、QRコードに取り込んだ。QRコードは素焼きキューブや足型に印刷したシートの2種類をデザインし、設置した。大城の失ったかつての風景と今の風景の比較や植栽植樹運動による景観再生の取り組みを次世代に伝える試みである。
- (5) 「中村家住宅QRコードミュージアム」：2012年以降、継続中…（目的）伝統技術の継承
快適な住環境をつくる中村家住宅の伝統的技術をQRコードを用いて、一般の見学者にわかりやすく多言語化（日本語、英語、中国語）し解説した。住宅内外に配置した10箇所のQRコードは、住宅を構成する伝統素材である琉球石灰岩、琉球赤瓦、漆喰を用いて製作した。

成果

- (1) スージグワー（路地）を活用したイベントの開催
- (2) 活動の成果をまとめた冊子の作成
- (3) 空き家および古写真の有効利用

今後の展望

- (1) 「スージグワー週末美術館」へ継続的に企画参加する
- (2) 地域の世代間交流を促すコンテンツの企画

研究者の紹介



環境都市工学部 准教授
木下 光
(きのした ひかる)

専門は都市デザイン（公共空間、都市再生）
都市計画・建築計画（都市居住、公設市場、酒蔵）・都市論。

高齢化が進む橋梁の 維持管理システムの高度化

鉄道や道路等の交通ネットワークと、電気・ガス・水道・通信網等のライフラインを支える橋梁の維持管理システムの高度化を通して安全・安心で豊かな社会の実現を目指しています。



橋梁支承部の計測状況

活動の概要

目的	橋梁の性能に関する実測データの蓄積による維持管理システムの高度化
連携メンバーおよび役割	青森県 / 大阪府・・・フィールド提供、地域企業との調整 鹿島建設株式会社・・・橋梁の維持管理システムのプロトタイプ構築と、その青森県内の橋梁への適用 株式会社川金コアテック ・・・支承（橋梁の上部と下部を繋ぐ部材）メーカーとして当該部材に関する調査・計測 一般財団法人大阪地域計画研究所 関西大学環境都市工学部教授 坂野昌弘・・・橋梁の維持管理システムの高度化に関する助言、調査手法の指導
活動地域	青森県内および大阪府内の橋梁
活動期間	2013年6月～（継続中）
費用	一般財団法人大阪地域計画研究所と青森県、鹿島建設株式会社、株式会社川金コアテックとの共同研究による

連携の経緯

関西大学先端科学技術推進機構に設置した橋梁マネジメント研究会に鹿島建設株式会社が参加したことを契機として連携開始。同社は、青森県から県内の老朽化した橋梁の維持管理業務を受注し、既存の維持管理システムの高度化を目指していた。そこで、同社の要請を受けた坂野が、一般財団法人大阪地域計画研究所内に橋梁の維持管理に関する研究会を設置し、その委員長として協力することとなった。

評価する機能	評価	計測項目
荷重支持機能	鉛直支持機能が損なわれ支承全体が上下動していないか	支承前後の鉛直変位
回転機能	活荷重や温度変化によって生じる桁の回転に追従できているか	支承前後の鉛直変位
移動機能	活荷重や温度変化によって生じる桁の伸縮に追従できているか	上下部工の相対変位（水平）
桁への影響	支承の機能低下により主桁に大きな応力度が発生していないか	下フランジ下面のひずみ

支承の各機能の評価方法

解決すべき課題

- (1) 青森県、大阪府・・・管理する橋梁の老朽化対策
- (2) 鹿島建設株式会社・・・橋梁の維持管理システムの高度化
- (3) 株式会社川金コアテック・・・支承の性能評価と老朽化対策

大学の役割

橋梁の疲労耐久性に関する、研究代表者である坂野の研究成果に基づき、橋梁支承の機能評価と機能回復に資する知見を提供している。これらの知見を実際の橋梁の維持管理業務に適用し、データを蓄積することで、橋梁の維持管理システムを高度化し、全国の橋梁に応用可能なシステムの構築を目指している。

具体的には、2013年度は青森県からフィールドとして県内の橋梁30箇所の提供を受け、既存システムで対応できない橋梁支承について研究会のメンバーが連携して機能評価を行った。関西大学は坂野が主体ではあるが、時には大学院生が同行することもあった。

2014年度には支承の機能評価を継続する他、機能評価結果に基づいた合理的で経済的な機能回復手法についても検討した。

そもそも、橋梁は交通インフラの中で最も建設や架け替え・修繕等のコストがかかり、鉄道や道路の他にも電気・ガス・水道・通信等のライフラインを支える要となるものである。また、高度経済成長期に架けられた橋梁は近い将来必ず一斉に老朽化への対応を迫られる。したがって、維持管理システムの高度化は、人々の暮らしに安全・安心と豊かさを提供し、さらには産業活性化によって地域に活力を与える取り組みとなるものである。関西大学はこれからも大手企業、中小企業、自治体と連携しながら、安全・安心で豊かな社会の実現を目指して橋梁の維持管理システム高度化の一端を担っていく。

成果

- (1) 30件程度の橋梁について診断が完了
- (2) 維持管理システムの高度化

今後の展望

- (1) 蓄積したノウハウの全国への水平展開（各地で環境条件が異なるため）
- (2) 地方自治体のインフラ老朽化対策に要する財政負担の軽減
- (3) 継続的な維持管理ビジネスによる地域企業の雇用創出・地域の活性化

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
坂野 昌弘
(さかの まさひろ)

山形県生まれ。1981年に東京工業大学修士課程修了。専門は鋼構造学、疲労（橋と自分自身）。橋梁等の社会基盤施設の長寿命化など、次世代に良質なインフラと生活環境を残すべく研究を行っている。橋梁ドクターとして日々全国を駆け回る。

東大阪橋梁維持管理研究会



橋梁の維持管理業務上の課題と中小企業の技術力のマッチングによって橋梁のメンテナンスに最適なツールの開発を行っています。

鉄道橋の現状に関する視察状況

活動の概要

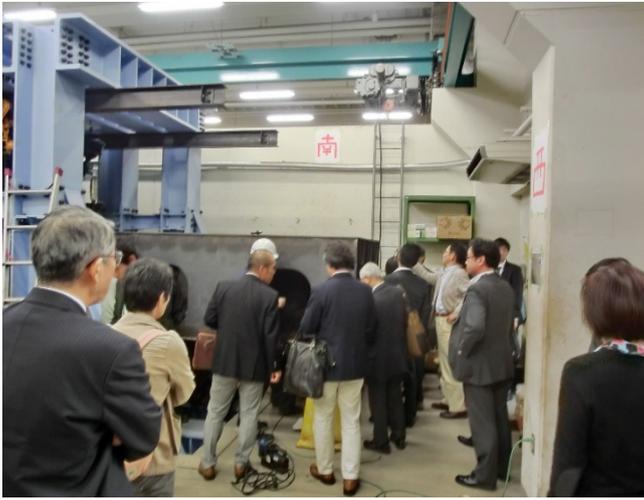
目的	社会インフラの維持管理に有用な技術開発 / 中小企業の技術を活かす新たなビジネスの創出
連携メンバー および役割	京阪神エリアの中小企業 南海グループ 東大阪市 大阪府 関西大学環境都市工学部教授 坂野昌弘・・・鉄道や道路などの橋梁管理者対応・実証実験・現地テスト 関西大学名誉教授・関西大学産学官連携コーディネーター 大西正曹 ・・・東大阪をはじめとする中小企業対応と、国や自治体等の補助金獲得、研究会の運営
活動期間	2014年1月～（継続中）
費用	橋梁の維持管理事業者からの委託費

連携の経緯

高度経済成長期の日本では道路や橋梁などの社会インフラが一齐に建設され、現在、それらの多くが耐用年数を迎えている。そこで、中小企業や橋梁の維持管理事業者に人脈を持つ大西の呼びかけで「東大阪橋梁維持管理研究会」が立ち上がった。

解決すべき課題

- (1) 老朽化した橋梁の適切かつ高効率な維持管理
- (2) 中小企業が持つ技術の橋梁の維持管理業務への応用



高性能ワンサイドボルトの実証実験見学



橋梁視察（南海電鉄）

大学の役割

関西大学からは、橋梁工学の専門家である橋梁ドクターの坂野と、東大阪をはじめ全国各地の中小企業に人脈を持つ大西が中心となって本活動に携わっている。

研究会の活動フローは以下のとおりである。まず、坂野は事業者から橋梁の維持管理上の課題をヒアリングし、大西はそれを解決し得る中小企業の技術を探索・提案する。その後、坂野は中小企業が開発したメンテナンスグッズについて、実物大の試験体を用いた実証実験や現場での検証を行う。さらに、施工や使用マニュアルも整備し、実際の維持管理業務を見越したフォローを行う。

これらの活動は既に2件の技術開発を成功させている。1件は橋梁床版の下面補強のための「ワンサイドボルト」である。従来、下面補強は道路の舗装を掘り返す必要があったため、必然的に通行止めによる交通渋滞が発生していた。ワンサイドボルトは橋梁の床下から補強板を固定するだけなので通行止めは発生せず、さらにランニングコストの軽減にも繋がることから、メンテナンス業務を容易にする画期的な技術開発となった。もう1件は「メンテナンス専用多機能掃除機」である。維持管理業務にかかる現場点検では、コンクリート片や砂など橋梁の維持管理に特有の障害が発生している。そこで、吸引力強化やアタッチメント部分の工夫等によって専用の掃除機を開発し、現在も改良を重ねている。

社会の課題をオーダーメイドで解決する新たなビジネスモデルを確立すべく、研究会はさらに活動を活性化させていく見込みである。

成果

- (1) 2件の技術開発の実現

今後の展望

- (1) 技術開発件数の向上
- (2) 技術開発のビジネスへの進展

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
坂野 昌弘
(さかの まさひろ)

山形県生まれ。1981年に東京工業大学修士課程修了。専門は鋼構造学、疲労（橋と自分自身）。橋梁等の社会基盤施設の長寿命化など、次世代に良質なインフラと生活環境を残すべく研究を行っている。橋梁ドクターとして日々全国を駆け回る。



関西大学 名誉教授
産学官連携コーディネーター
大西 正曹
(おおにし まさと)

約30年間、東大阪を中心に3日に1社、各地の中小企業を訪問。全国至る所に出没することから、経営者から「まいど教授」と呼ばれる。各地で経営者の後継者を集め次世代企業をめざして商品開発セミナーと第二創業塾を主催。その他、現場の実情を踏まえた数多くの講演もこなす。

人と自然が共生する 海岸づくりを目指して

海岸にはその整備目標として、防災機能・環境保全機能・利用機能が求められます。その方針に基づき展開している、人や環境に優しい親水空間を実現する活動の一部を紹介します。



磯浜観察会

活動の概要

目的	次世代への良好な親水空間の継承
連携メンバー	大阪府港湾局 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター 関西大学環境都市工学部准教授 島田広昭 関西大学環境都市工学部 島田広昭ゼミ
活動地域	人工海浜（せんなん里海公園 等）（大阪府）
活動期間	1992年～（継続中）
費用	研究室に配分されている研究費等（および連携機関からの委託研究費）

連携の経緯

わが国では高度経済成長期における工業用地の埋め立て等で風光明媚な海浜の多くを失ってしまった。その後、砂浜の防災機能や水質浄化機能の再認識などを受け、全国各地で人工海浜が建設されてきたが、各種の事情により建設途上のまま計画保留となっている海岸も点在する。それらの地域においては海岸近くに住みながら地元の子どもたちが海と触れあう機会が少ないこと等が問題となっており、地域住民や海岸利用者と自然との望ましい関わりを探る活動に着手することとなった。



まずは勉強



稚魚の放流体験

解決すべき課題

- (1) 人工海浜の有効かつ安全な利用
- (2) 地域の子どもたちと海との理想的な関わりの創出

大学の役割

人と自然が共生する海岸づくりに寄与する活動は多岐にわたるが、代表的なものとしてせんなん里海公園（大阪府泉南郡岬町）における取り組みを紹介する。

せんなん里海公園にある淡輪箱作人工磯浜は上述のような経緯から、地域住民による利用が不可能な状態が長期間にわたり続いていた。そこで、大阪府港湾局からの要請を受け、せんなん里海公園人工磯浜建設時からアドバイザーとして関わってきた島田が中心となり、現状のまま磯浜を有効利用する方法を検討することとなった。

具体的な活動にあたり、まずは地元の小学生を対象に、海での遊びを伝える活動に取り組むこととなった。連携メンバーである大阪府港湾局は海岸整備のあり方や重要性の講義を、磯浜に近接する水産技術センターは大阪湾で捕れる魚に関するレクチャーおよびチヌの稚魚放流をそれぞれ行い、知識と実践の両面から海の魅力を伝えている。島田ゼミでは淡輪箱作人工磯浜に生息する貝などの付着生物を紹介し、その後の磯観察時には子どもたちの安全管理をゼミ生全員で行うなど、安全安心に配慮した活動を展開している。これらの活動は毎年恒例の行事となっており、子供たちが海の楽しさと厳しさを学びきっかけの一つとなっている。

島田研究室ではこれらの取り組みの他、生息生物と水質による海域環境評価手法の構築や三重県阿児の松原海水浴場における海岸利用者の避難行動シミュレーションに関する調査研究など、自然と共生する海岸の創造およびその安全安心利用を目指す幅広い研究活動を展開している。

成果

- (1) 潮間帯における付着生物と水質を指標とした漁場環境評価法に関する研究
- (2) 潮位変動の影響を補正し構築したHISモデルによる環境評価手法の提案

今後の展望

- (1) HEP（※）を応用して構築した予測モデルによるマダイの漁場環境評価
※HEP…生物生息環境や漁場環境を簡便かつ定量的に評価ができるハビタット評価手続き

研究者の紹介



環境都市工学部 准教授
島田 広昭
(しまだ ひろあき)

専門は海岸工学。海岸堤防の越波に関する研究、快適な海水浴場の設計に関する研究、生物との共生をめざした人工磯の造成に関する研究など、幅広い研究を続けている。

命を守る防災教育

～水災害からの安全な避難を学ぶ～



津波や高潮などの水災害の体験や観察ができる「浸水ドア」「水災害ジオラマ模型」を用いて、災害時の安全な避難を効果的に学ぶための防災学習を行っています。

観察型実験装置「水災害ジオラマ模型」の説明と実験を行う石垣ゼミ生

活動の概要

目的	水災害の怖さを実感し防災意識を高める
連携メンバー および役割	各種自治体・・・防災教育の対象機関コーディネート 地域の小学校・・・防災教育フィールドの提供 大阪府津波・高潮ステーション・・・防災イベントの実施 関西大学環境都市工学部教授 石垣泰輔・・・防災教育の実施と開発
活動地域	和歌山県、三重県、大阪府、兵庫県など水災害の起こる可能性のある地域全域
活動期間	2008年11月～（継続中）

連携の経緯

従来、水災害などの浸水時を体験するために製作された実験装置の多くは、装置の移動を想定したものではなかった。防災意識の向上には効果的な装置である一方、体験するためには研究室まで足を運んでもらう必要があり、利便性の面に課題を抱えていた。そこで、石垣研究室ではより多くの方々への防災意識の啓発活動を行うべく、移動可能な実験装置およびそれを利用した防災教育の開発に取り組むこととなった。

解決すべき課題

- (1) 防災意識の向上
- (2) 避難経路など、災害時の防災・減災計画の再検討



「関東防災Day2014」に実験装置の体験ブースを出展した際の様子



観察型実験装置「水災害ジオラマ模型」

大学の役割

前述の課題を受け、石垣研究室では、体験型実験装置（浸水ドア）と、観察型実験装置（水災害ジオラマ模型）を製作。

「浸水ドア」は、巨大地震や集中豪雨などの水災害で地下室や車に閉じ込められた際、ドアの外に何センチ水が溜まると中からドアが開けられなくなるかを体験することができる実物大のドア模型である。参加者は水の重みや怖さを実感しながら避難訓練を行うことができる。

「水災害ジオラマ模型」は、身近な都市を想定して作られた模型で、模型内に実際に水を流すことにより、水災害が都市で起こったらどうなるのか、洪水のメカニズムを目で見て学ぶことができる装置である。

これらの装置を用いた実験は、各地の防災イベントや小学校等で実施しており、幅広い年齢層の方に体験してもらうことが可能になった。また、実験後のアンケートでは、体験型、観察型の双方の実験を行うことは、防災意識向上に有効であることが表れている。

実験の際には、データ集積と分析も行っており、その数値は地下空間のみではなく、地上での避難や水難事故の危険性を表す指標としても適用できるものである。

このように、装置を使った実験を多くの人に体験してもらい、さらにはその結果のデータを解析することは、水災害時の避難経路の安全性の検討や避難計画の策定に寄与している。



体験型実験装置「浸水ドア」

成果

- (1) 年代別、性別などのデータ収集・解析
- (2) 体験型実験、観察型実験の両面からのアプローチによる、より効果的な防災意識の向上

今後の展望

- (1) 模型や装置の量産化
- (2) 模型や装置のコンパクト化による運搬費等の経費軽減
- (3) バリアフリー化により浸水リスクが増えるといったトレードオフの関係の解決

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
石垣 泰輔
(いしがき たいすけ)

専門は環境防災水工学。洪水災害のメカニズムや、都市型水災害時の避難に関する研究を行っており、日ごろの研究成果が安全な避難や防災意識の向上に役立つことを目標としている。

国家戦略特区（兵庫県養父市：農業特区）における 農業再生と機能性食品の開発プロジェクト

国家戦略特区に指定された兵庫県養父市（中山間農業の改革拠点）において、関西大学と養父市との包括連携協定に基づいて未利用農産資源を活用した機能性食品の開発を行っています。



養父市の唐辛子 ジョロキア（左）とハバネロ（右）

活動の概要

目的	兵庫県養父市の農地改革および農地再生と新産業の創生
連携メンバー および役割	兵庫県養父市・・・トウガラシ栽培 兵庫県養父市商工会議所・・・地域企業の連携支援 有限会社吉井建設・・・商品企画 株式会社マナ・・・食品製造 ラサ工業株式会社・・・販売 関西大学環境都市工学部 山本秀樹ゼミ・・・研究開発 道の駅 / 産直市 / 地元商店・・・商品の販売
活動地域	兵庫県養父市
活動期間	2014年7月～（継続中）

連携の経緯

これまで関西大学は、兵庫県養父市と、いくつかの研究プロジェクトで共同研究を実施し、特に農業再生に関する研究において多くの研究実績を得てきた。2014年5月、養父市が国家戦略特区（農業特区）の指定を受けたことを契機に、市側からもさらに活発な協力体制を強く望まれ、地域再生、農業再生についての協力体制を強化することとなった。

解決すべき課題

- (1) 休耕田、耕作放棄地の増加
- (2) 農家の高齢化、後継者不足
- (3) 養父市全域の過疎化



「やぶマヨ」
養父市特産の「養父玄米」「八鹿浅黄」「朝倉山椒（※一部使用）」「りんご酢」で作ったからだにやさしいマヨネーズドレッシング。商品開発において、山本が監修・アドバイスし、劣化しやすい山椒の品質保持の改善にも携わっている。



中山間地域の耕作地

ハバネロを用いた6次産品化

大学の役割

「国家戦略特区（農業特区）」に指定された兵庫県養父市は、中山間地帯でかつ、過疎化・高齢化が進む地域である。2014年8月、養父市と関西大学とは、産業振興、人材育成、教育・文化の振興、地域づくり、福祉の増進等の分野で相互に協力し、活力ある地域づくりと大学の活性化に寄与することを目的に、連携協定を締結した。

農産物の高付加価値化を研究する山本は、もともと野菜の生産が盛んであった養父市に、より付加価値の高い農作物として、獣害被害を受けにくく、但馬地域の地形や気候に適した農作物である唐辛子の品種である「ハバネロ」や「ジョロキア」を特産品化することを提案。さらに地域の放置竹林から切り出した「竹」を微粉末化し、発酵させた高ミネラル肥料（土壌改良剤）を開発し、土作りの設計と肥料の企画、製造も行った。これらの技術を用いて栽培された養父市産のフレッシュハバネロや玄米などを使ったソースやドレッシングが商品化され、耕作放棄地や休耕地になるところであった農地の再生による新産業創出につながっている。

今後は但馬地方の特産品であった「岩津ねぎ」や、「朝倉山椒」などの栽培を促進し、但馬のふるさと野菜として、さらに「養父ブランド」の新商品の開発を進め、地域活性化の切り札となることが期待されている。

成果

- (1) 休耕地や耕作放棄地を農地として再生
- (2) より付加価値の高い新しい農作物を生産し、加工して商品化することができた

今後の展望

- (1) ハバネロを契機に、地元の眠っている特産品の掘り起し（岩津ねぎや朝倉山椒など）
- (2) 特産品を利用した新商品の開発
- (3) 休耕地や耕作放棄地、荒れ地を整備し、野菜等の農産物の栽培を増やす
- (4) 農作物から有価成分を分離・抽出し、医薬品や化粧品などへ応用
- (5) 養父市の農業再生
- (6) 高効率・高収率の農業生産を目的とした高付加価値肥料の開発

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
山本 秀樹
(やまもと ひでき)

専門は環境再生工学。
医学・農学といった他分野の技術と工学の技術を連携させることにより、次世代を視野に入れた新しい研究開発を行っている。化学工学の要素技術を有機的に融合させることにより、環境再生型の新しい化学生産システムを構築することが最終的な目標。



先端技術と伝統技術のコラボレーション 和菓子店とのアスリート向け 冷凍お餅の共同開発

関西大学の開発した新技術を堺市の伝統菓子に応用し、これまでにない新しいコンセプトの商品を産学共同で開発しました。地場産業振興による地域社会への貢献を目指した産学官連携プロジェクトです。



研究の様子

活動の概要

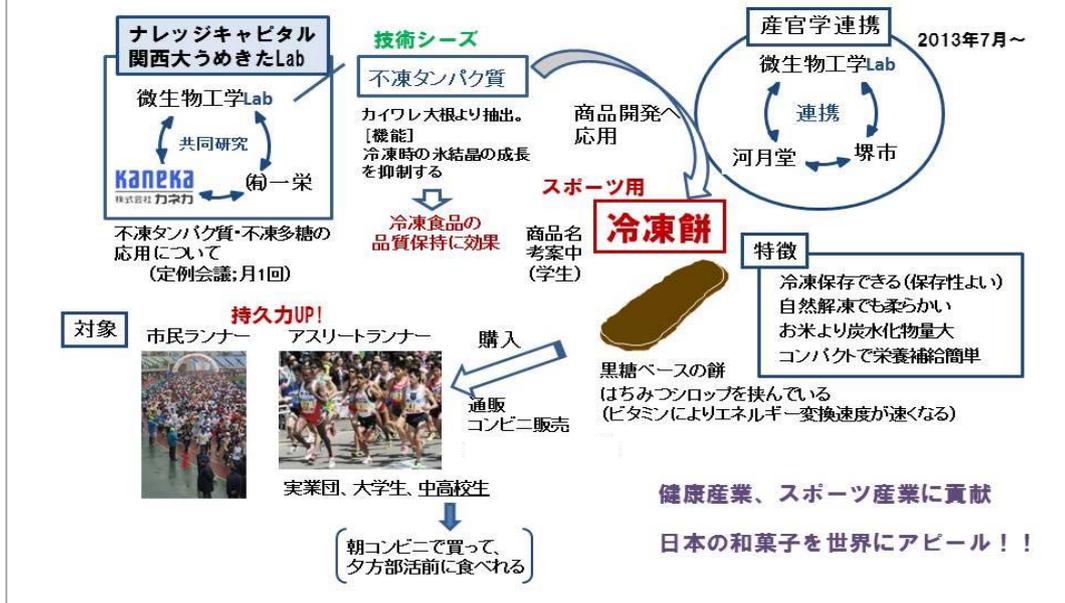
目 的	大学の研究成果を活用した地場産業の振興及び『和食』の海外展開
連携メンバー	浜寺餅 河月堂 / 大阪府堺市広報課広報課シティプロモーション担当 / 関西大学化学生命工学部 天然素材工学研究室教授 河原秀久 / 商品名・キャッチフレーズコンテスト参加学生 (関西大学商学部)
活動地域	大阪府堺市内 / 関西大学うめきたラボラトリ (ナレッジキャピタル (グランフロント大阪内)) / 関西大学千里山キャンパス
活動期間	2013年7月～2014年4月
費 用	堺市と関西大学との地域連携事業への応募

連携の経緯

千利休の出生地で知られる大阪府堺市は、「茶の湯」の影響を現代に伝えるものとして、今でも多くの和菓子店が営まれているが、日持ちしないことがマーケットを広げるうえでの障壁となっていた。

2013年7月、堺市広報課シティプロモーション担当は、河原と株式会社カネカとで共同開発した不凍タンパク質 (冷凍時の氷結晶の成長を抑制する物質) を、和菓子に応用することを考え、その仲介のもと、堺市和菓子組合に向け、不凍タンパク質の説明会を開催した。その説明会に参加した浜寺餅 河月堂と河原は、共同で商品開発を行うこととなった。

市民ランナーからアスリートランナーのための「冷凍お餅」の開発概要図



「冷凍お餅」開発概念図



和neチャージS

六つのSであなたを
Ace(エース)に!
Sports
Simple Safe
Supply Soft
Save

名称考案
関西大学商学部
下井章史 佐古夏海

キャッチフレーズ

大学の役割

河原が不凍タンパク質の添加量や使用方法等技術的な指導と、製造した冷凍餅の硬さ等の測定を実施。また、商品名・キャッチフレーズのコンテストを実施し、商学部の学生が考案したものが実際の商品名とキャッチフレーズとして採用された。

成果

- (1) 2014年4月、浜寺餅 河月堂より、自然解凍後もつきたてのように柔らかく、運動前の栄養補給にも適した冷凍餅として、アスリートのための冷凍お餅『和neチャージS』を販売開始
- (2) ナレッジキャピタル(グランフロント大阪内)で開催された『Knowledge Innovation Award 2013』において、モノ部門オーディエンス賞を受賞
- (3) 2015年1月には、従来から冷凍すると固くなり食感を損なうことが課題だった和菓子「練り切り」に河原の技術シーズである「接着タンパク質」を活用することで、冷凍しても出来たてに近い食感を維持できる練り切りを浜寺餅 河月堂と開発し、販売を開始。

研究者の紹介



化学生命工学部 教授
河原 秀久
(かわはら ひでひさ)

専門は天然素材工学、応用微生物学、機能生物化学。
主要研究テーマは生物由来不凍タンパク質(関連物質)の構造解析とその応用開発に関する研究、食品産業廃棄物の新規有効利用の開発に関する研究、化粧品素材成分の開発に関する研究、機能性食品成分の開発に関する研究など。最近では、キノコの培養菌糸や子実体を用いた有用物質の生産や、未利用資源からの有用物質の生産に関する研究にも着手している。

産学連携による高齢者社会への貢献



活動の概要

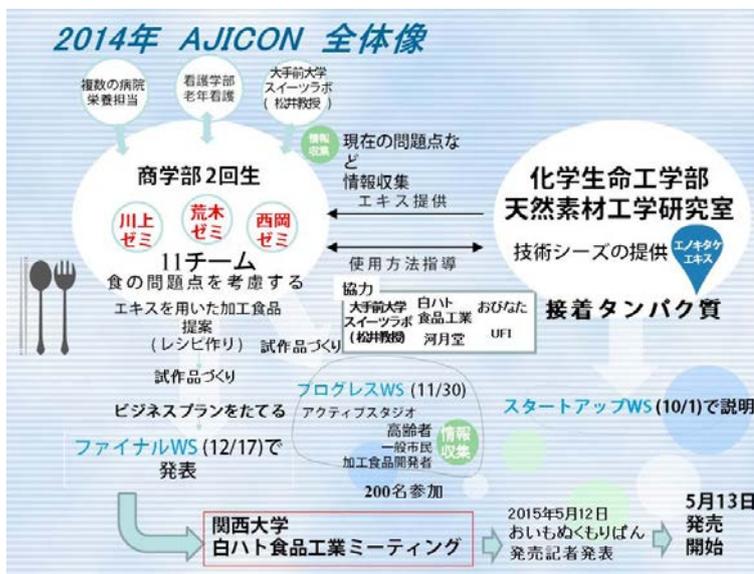
目的	高齢者社会での食の楽しみを与える加工食品を提供するための接着タンパク質エキスの用途開発をすること
連携メンバーおよび役割	有限会社一栄 代表取締役 小出芳栄氏…エノキタケ接着タンパク質エキス製造 白ハト食品工業株式会社 菊池洋子氏 / 前山正博氏 …学生提案のビジネスプランを「おいもぬくもりぱん」として商品化 早稲田大学大学院教授（前関西大学教授） 川上智子 / 関西大学化学生命工学部教授 河原秀久 / 関西大学商学部教授 荒木孝治 / 同学部准教授 西岡健一 …技術シーズの提供と新商品開発およびビジネスプラン作成
活動地域	関西大学千里山キャンパス / 関西大学うめきたラボラトリ（ナレッジキャピタル（グランフロント大阪内）） 白ハト食品工業株式会社本社
活動期間	2012年4月～2015年4月

連携の経緯

以前より、河原はエノキタケ由来接着タンパク質エキスの共同開発を通じて一栄との連携を深めており、2012年4月から同社との定例会議において、同製品の製造方法および用途開発の検討を重ねてきた。一方、関西大学では食品関連の開発を行う文理融合プロジェクト「AjiCon」^{あじこん}発足以来、ビジネス系と理工系の学生の対話による商品化の場を数多く創出している。2014年9月には上記の技術シーズと「AjiCon」プロジェクトが融合し、商学部2年生対象の授業「演習」において、白ハト食品工業との連携による商品開発に着手することとなった。

解決すべき課題

- (1) 嚥下力が低下した高齢者でも食べられる食品（パン）の開発
- (2) ビジネス系学部と理工系学部の融合による技術シーズの実用化



本連携の全体図

2015年5月12日に開催された発売合同記者発表

大学の役割

本事例では川上・荒木・西岡ゼミの学生が授業内で接着タンパク質エキスを使用した新商品の開発とビジネスプラン作成を行った。「中間報告会」では学生が考案したレシピを基に連携企業が製造した試食品の試食会を実施し、食品関連の企業や一般消費者との対話の場を設定。アイデアのブラッシュアップを行った。2014年12月17日にグランフロント大阪ナレッジシアターで開催された、食の革新ワークショップ「こんなアイデア、どうですか? ~食と技術とIdea~」では、最終成果として「おいもぬくもりぱん」を披露し、それをどのような社会課題の解決に繋げるかについてのビジネスプラン発表も行った。

これらの活動を通じて白ハト食品工業では「おいもぬくもりぱん」を商品化。接着タンパク質エキスの活用によって粘性・付着性の調節を実現した「芋パン」は、高齢者や幼児などの飲み込む力が弱い方でもパンを味わえるものであり、少子高齢社会という社会課題の解決に寄与する新製品となった。

成果

- (1) 白ハト食品工業におけるエノキタケ由来接着タンパク質エキスを活用した新製品の商品化と販売開始
- (2) 一栄における接着タンパク質エキスの製造ライン構築および同エキスの販売促進の実現

今後の展望

- (1) エノキタケ由来接着タンパク質エキスの新たな用途開発とその実用化
- (2) エノキタケ由来接着タンパク質エキスの品質管理および営業、ビジネスプラン提案を行うベンチャー企業 株式会社KUINAIの起業

研究者の紹介



化学生命工学部 教授
河原 秀久
(かわはら ひでひさ)

専門は天然素材工学、応用微生物学、機能生物化学。

主要研究テーマは生物由来不凍タンパク質(関連物質)の構造解析とその応用開発に関する研究、食品産業廃棄物の新規有効利用の開発に関する研究、化粧品素材成分の開発に関する研究、機能性食品成分の開発に関する研究など。最近では、キノコの培養菌糸や子実体を用いた有用物質の生産や、未利用資源からの有用物質の生産に関する研究にも着手している。



商学部 教授
荒木 孝治
(あらか たかはる)

専門は統計学・品質管理。ゼミでは過去に2回、山崎製パン株式会社とともに関大ランチパックの開発を行った。現在、エキマルシェ大阪やものづくり系企業、理工学部との共同プロジェクトをゼミ生とともに推進している。

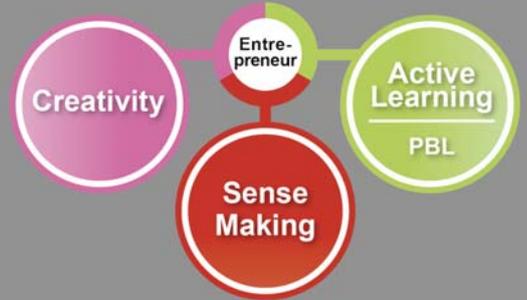


商学部 准教授
西岡 健一
(にしおか けんいち)

エジンバラ大学ビジネススクール博士課程修了、PhD (エジンバラ大学)。日本電信電話株式会社ネットワークサービスシステム研究所、西日本電信電話株式会社等を経て、現職。専門はサービス・イノベーション論。ゼミではマルチプロジェクト体制と英語での発表機会を増やすことで、人材育成に取り組んでいる。

アイデアをデザインする ～地域・社会連携～

教室を「アイデアを創造するデザインパーク」に見たて、パーク内に受講生がバーチャル企業を立ち上げ、教室の垣根を越え、座学では学ぶことのできない経験（アイデアの商品化）を通じ、地域社会の営みやしくみ、ベンチャービジネス・スタートの基本を学んでいます。



活動の概要

目的	最先端のICT、学習理論、発達理論、ゲーミフィケーション等の活用 / 創意工夫（デバイス、インターフェイス、ソフト、便利機能等）の発想・開発・デザイン・設計・ブランド化 / クリティカルシンキングおよび根拠情報を基にした論理的思考の構築による発想力の向上
連携メンバーおよび役割	関西大学卒業生が活躍する企業 / ASEAN諸国にある教育関連のIT企業 / 知的財産担当者 / 授業科目「アイデアをデザインする」履修生（一部、本学留学生を含む） …SWOT分析、PEST分析等による市場調査を踏まえ、50年後の社会で使われる商品を開発する 関西大学教育推進部教授 山本敏幸…プロジェクトデザイン、進捗状況の管理、学生に対するアドバイス
活動地域	関西大学千里山キャンパス（外部協力者は授業参加あるいはビデオ会議、オンライン等による参加）
活動期間	2014年4月～（継続中）

連携の経緯

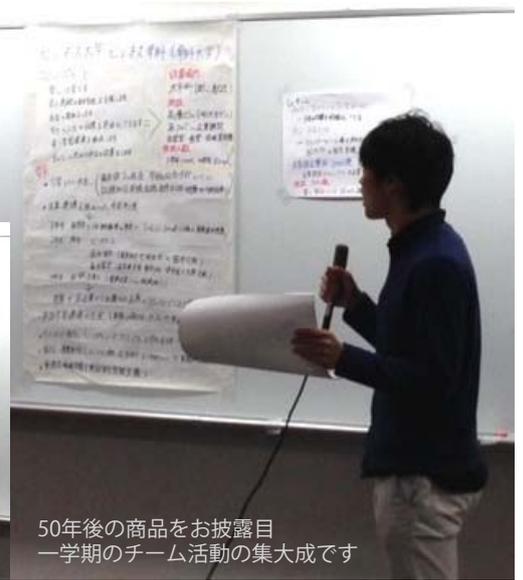
関西大学チャレンジ科目として「アイデアをデザインする」を開講したことを契機として活動がスタートした。科目では「これから50年後の日常の商品をデザインする」をテーマに、アクティブ・ラーニングによる主体的学びの涵養を目指すこととした。さらに、IT企業経験者や知的財産業務従事者をゲストスピーカーとして招き、実戦経験の共有を通じた、地域社会連携による協働型チームベース学習モデルも採用。地域社会との連携による課題定義・課題解決型の学びを実践している。

解決すべき課題

- (1) 地域社会を視野に入れた教室・学内の枠を超えたアクティブ・ラーニングの実践
- (2) 地域社会連携による信頼関係の構築とその信頼関係の継続
- (3) フューチャーデザインの礎となる社会人基礎力（クリティカルシンキング・クリエイティブシンキング、交渉学）を踏まえたコミュニケーション力の育成
- (4) 地域社会・産学連携による全ステークホルダーの共感を通しての課題発見・解決への合意形成
- (5) イノベーション思考の涵養



Sense Making



50年後の商品をお披露目
一学期のチーム活動の集大成です

大学の役割

本活動において、関西大学は教育カリキュラムの構築・運営および履修生への指導・助言を担う。授業は実践学習形式で進められ、学生は商品開発から起業までのプロセスを体験する。学習内容には市場調査、リスクマネジメント、コンセプトメイキング、プロダクトデザイン、マーケット展開等、一連の流れが包括されており、単なる「起業ごっこ」体験ではなく、社会に貢献する責任感の涵養や地域社会の営みの仕組みを理解することをも目指している。

また、本活動は企業で活躍する卒業生も含めた三者協働型のPBL（Project-Based Learning 課題解決型学習）としても展開。地域社会の方々との協働を通じて、知識・知恵・経験・価値を共感し、信頼関係を構築することで、現実に即した地域課題の定義・解決を行っている。また、それはコミュニケーション力の向上と思いやりの大切さを学ぶことにつながっている。

以上のとおり、本活動ではキャンパスを越え、地域社会の方々と同じ目線で考え、対話し、共感しながら協働するプロセスを地道に実践している。さまざまな世代の人で構成される地域社会と同様に、大学では学部や年齢、出身国の枠を超えた多くの学生が、自分たちが置かれた状況の中で課題を定義し、その解決に向けた対話による合意形成のプロセスを学んでいる。

成果

- (1) クリティカルシンキング、クリエイティブシンキング、交渉学的コミュニケーション能力を基にしたイノベーション思考力の育成
- (2) コミュニケーションによる信頼関係構築と思いやりの大切さの学習
- (3) 起業を目指す学生へのシミュレーションの場の提供および起業家の責任感と段取り力の育成
- (4) アイディアの商品化とブランディングによる地域社会（企業）の営みの仕組みに関する理解力向上
- (5) PBLによる主体的な学習姿勢の獲得
- (6) ブランド化した商品の流通の実践（起業投資からdeath of valley脱却までのプロセスの実践体験）



商品紹介・ブランディングプレゼンテーションの様子

研究者の紹介



教育推進部 副部長
山本 敏幸
(やまもと としゆき)

今年度は20チームが「社会を豊かにする20年後の商品」を開発中！

農作体験から学ぶ地域の営み・関西を学ぶ

～田植えから収穫、流通までの

総合マネジメントと地域協働～

大学や教室の垣根を越え、座学では学ぶことのできない経験（農作業）を通じ、地域社会の営みのしくみを留学生とともに学んでいます。



田植え・野菜の栽培の様子
田植え初体験の留学生たち

活動の概要

目的	大学と社会のかけはしを築くために、地域社会の米作農家と連携し、田植えから収穫までの農作業体験を通して、信頼関係の構築や地域社会の営みについて学ぶ
連携メンバーおよび役割	向井比呂志氏（高槻市土室の農家）…田畑の賃借と農業指導 「農作体験から学ぶ地域の営み」・「関西を学ぶ」履修生（一部、本学留学生を含む） …無農薬自然栽培による農作物の栽培を学ぶ。農業（草取り、田植え、収穫等）、病害虫などのリスクマネジメント、収穫した作物のコンセプトメイキング・プロダクトデザイン、ブランディング・市場調査・流通など 関西大学教育推進部教授 山本敏幸 他…プロジェクト進捗状況の管理、学生に対するアドバイス 関西大学学長室シニア研究企画アドバイザー 角谷賢二…連携先のコーディネート
活動地域	大阪府高槻市土室（はむろ）地域
活動期間	2014年4月～（継続中）

連携の経緯

2012年より2年間、学生による提案科目「“みず”から育てる関大ブランド」でジャガイモやトマトを育て収穫。キャンパス内、関大前商店街のレストランと共同で商品化まで行った。2014年度は、学生から授業継続の希望を受け、さらに充実した内容に発展させるため、角谷の紹介で高槻市に田畑を借り、地域連携による協働型モデルの授業を実施することとなった。教室での授業の枠を超えた主体的学びを涵養するアクティブ・ラーニングとチームによる課題発見・課題解決型の学びの実践を行っている。

解決すべき課題

- (1) 教室・大学の枠を超えたアクティブ・ラーニングの実践
- (2) 地域連携による信頼関係の構築と継続
- (3) 社会人基礎力（クリティカルシンキング・交渉学）を踏まえたコミュニケーション力の育成
- (4) 地域連携による全ステークホルダーの共感を通しての課題発見・解決への合意形成
- (5) 過疎化・高齢化、廃村の解決

<h2>農業体験から学ぶ地域の営み</h2> <p>美女と野菜</p>	<h3>関菜大学—KNOW業—</h3> 	<h3>チームビジョン</h3> <p>野菜によって、関西大学と社会をつなげる。</p> <p>真心 協調性 積極性</p>	<h3>市場調査・市場分析</h3> <p>市場の動向： ・ヨーロッパ、北米 規模が世界一で、国民全体の健康志向が高い。 (国連食糧農業機関による調査結果。)</p> <p>・日本 有機野菜は「特別なもの」として認識されている。 一方で、市場は徐々に拡大しつつある。</p>
<h3>Bチーム</h3> <p>関パーイ</p>  	<h3>Team D</h3> <p>野菜兄弟</p>	<h3>事業の概要</h3> <p>関西大学と、関西大学の学生が連携して、有機栽培にこだわった関大ブランドの食品を販売する。</p> <p>関大生自ら育てる → 収穫 → 運携商品加工 → 出荷</p>	

ブランディング最終プレゼンテーション

大学の役割

関西大学の教育カリキュラムである全学共通教養科目の授業の枠内で、高槻市土室（はむろ）地域に田畑を借り、米づくりを中心に、野菜の有機栽培等農作業を行っている。

この活動は、単なる田植え、草刈り、収穫の農作業体験ではなく、病害虫などのリスクマネジメント、流通、コンセプトメイキング、プロダクトデザインまでを一連の流れと捉え、生命を育てる責任感を養うことを目指すものである。育てた成果である農作物のブランディングは、流通も含めた地域社会の営みの仕組みを理解することにつながっている。

また、この活動はPBL（Project-Based Learning 課題解決型学習）と位置付けて展開している。地域の課題発見・解決を行うためには、地域に入り、一緒になって知識・知恵・経験・価値を共感し、信頼関係を築くことが不可欠であり、地域協働を通じて、教室や本からは発見できない地域課題の定義・解決を行っている。また、それはコミュニケーションによる信頼関係構築や、思いやりの大切さを学ぶことにもつながっている。

キャンパスを越えた地域社会全体をフィールドに、地域住民と同じ目線で共に考え、対話し、共感しながら協働するプロセスを地道に実践している。地域社会を構成する人たちが様々な世代の人達からなるように、様々な学部の1~4年生と様々な国からの留学生が自分たちが置かれた状況の中で課題を定義し、その解決策にむけて、知見を出し合い、話し合いにより合意形成に至るプロセスを学んでいる。

成果

- (1) 自然有機栽培で農作物を育てることの意義とそれを食すことの価値を理解
- (2) コミュニケーションによる信頼関係構築と思いやりの大切さの学習
- (3) 農作物を栽培しながら生命を育てる責任感の涵養
- (4) 育てた成果である有機農作物のブランディングによる地域社会の営みの仕組みに関する理解力向上
- (5) チームでのPBLによる主体的な学習姿勢の獲得
- (6) ブランド化した商品の流通の実践



研究者の紹介



教育推進部 副部長
山本 敏幸
(やまもと としゆき)



国際部 教授
池田 佳子
(いけだ けいこ)



教育推進部 研究員・非常勤講師
奥貫 麻紀
(おくぬき まき)



国際部 教授
Alexander Bennett
(アレキサンダー・ベネット)

学生提案科目 (※) 「地域の防災を考える」

地域の方々と関大生が協働し、関西大学が立地する千二地区の防災を考える授業です。



災害図上訓練 (DIG) を用いたワークショップ

※ 学生提案科目…何を学びたいか、学ぶべきかを学生自身が立案して開講する正課科目。
企画や運営は、学生・教員・職員によって構成される「科目提案学生委員会」が行う。

活動の概要

目的	地域防災の分野で考動力を具現化する授業の実施
連携メンバーおよび役割	吹田市危機管理室参事 竹嶋秀人氏…市の防災に関する講義、千二地区連合自治会との仲介 千二地区連合自治会…地区内フィールドワークへの参加、地域における防災施策の紹介 常葉大学社会環境学部 小村隆史氏…災害図上訓練 (DIG) や地域防災に関する講義 関西大学社会安全学部准教授 越山健治…地域防災に関する助言と講義 関西大学教育推進部准教授 森朋子…教育の質の担保にかかる授業内容のファシリテーション 関西大学総務課長 中村匡志…関西大学の防災に関する講義 科目提案学生委員…科目提案にかかる各種業務 (連携メンバー間の連絡調整、各種資料作成、授業内容検討)
活動地域	大阪府吹田市千二地区
活動期間	2014年7月～ (継続中)

連携の経緯

2015年度科目提案学生委員会では、共通教養科目の担当であった森とともに「地域防災」をテーマとする授業を行うことを決定した。その後、吹田市と関西大学が締結する「災害に強いまちづくりにおける連携協定」に基づき、吹田市危機管理室に協力を打診したところ、自治会単位での防災について提案を受け、千里山キャンパスが立地する千二地区における地域住民と協働で授業づくりを行うこととなった。

解決すべき課題

- (1) 吹田市全体の防災マップや、地区ごとの防犯マップは作成されているが、自治会単位の防災マップがない
- (2) 自治会単位での「地域防災」の検討



災害図上訓練 (DIG) のようす



千二地区フィールドワーク

大学の役割

近年の甚大な自然災害を目の当たりにし、地域の防災意識は高まりつつある。大学も災害時には「地域の一員」或いは「地域の中核」として、求められる役割は徐々に拡大している。一方、大学教育としては、アクティブラーニング（能動的学び）による社会を知る教育が求められている。

そうした社会情勢を背景に、「考動力を高めたい＝考えて行動する授業を作りたい」と考えた科目提案学生委員は、防災をテーマとした授業を企画し、学生の立場で何ができるかを検討。関西大学千里山キャンパスが立地する千二地区の防災を行政や地域住民と一体となって考えていくこととなった。

今回の主な講義内容は、以下のとおりである。

- ・常葉大学社会環境学部 小村氏…地域防災の専門分野および災害図上訓練 DIG (Disaster Imagination Game) のノウハウについて
- ・吹田市危機管理室 竹嶋氏…吹田市の防災の取り組みについて（行政の立場から）
- ・関西大学総務課 中村氏…関大の防災の取り組みについて（大学の立場から）

これらの講義をうけた後、越山の指導のもとDIGの活動を行い、地域の方々と協働して千二地区の防災マップを作成。さらに地域の特徴を発見・再認識し、共有する方法も学んだ。このように、机上の学習だけではなく、フィールドワークを通じて、大学近辺の地域防災の関心と理解を深めた。なお、これらの活動が自己満足に終わらないよう、地域の方々からのご意見の傾聴や、授業に対する評価の確認などを行った。

今後も学生が積極的に活動に参加し、吹田市および大学近隣地区の方々との信頼関係を築き、地域防災の現状から改善案を提案できるような授業を目指していく。

成果

- (1) 自治体（吹田市）、自治会（千二地区連合自治会）および関西大学が連携した防災活動の実施
- (2) 地域の方々と学生との交流の機会の創出

今後の展望

- (1) 日ごろ防災について意識していない層（地域住民および学生）への啓発

現場の声

- ・授業の参加者

自分の住む地域を知る必要性を感じました。防災について日ごろから気にかけていきたい。

行政、地域、学生が一体となったの取り組みは今後も継続してほしい。

研究者および学生の紹介



科目提案学生委員会
(かもくていあながくせいいいんかい)

学生自ら学びたいことを考え、学生の創意による講義「学生提案科目」を開講することを目的に結成される学生組織。委員となる学生は毎年公募によって集められ、教員および事務職員も委員として学生の活動をサポートする。カリキュラム検討や資料の準備、学内外の連携先との調整など、授業に必要な作業全般を学生が主体的に執り行う。



社会安全学部 准教授
越山 健治
(こしやま けんじ)



教育推進部 准教授
森 朋子
(もり ともこ)

池田市 商店街空き店舗活用事業 「関関COLORS」

関西大学・関西学院大学の学生が、池田市内にある商店街の空き店舗を活用して商店街の活性化を図っています。



池田市栄町商店街の関関COLORS

活動の概要

目的	関西大学と池田市との連携協定に基づいた商店街活性化・にぎわい創出事業
連携メンバー	大阪府池田市 / 池田栄町商店街振興組合 / 関関COLORS (学生団体) / 関西大学経済学部准教授 榑原雄一郎 / 関西学院大学 / 関西大学社会連携部
活動地域	池田栄町商店街内 コミュニティ・スペース (大阪府池田市)
活動期間	2009年7月～ (継続中)
費用	活動から3年間は中小企業庁と池田市、それ以降は池田市単独で栄町商店街振興組合に補助し、栄町商店街振興組合がその管理を行っている

連携の経緯

池田市主催の「学生による商店街空き店舗活用事業」が、中小企業庁「平成22年度中小商業活力向上事業」の採択を受けたことをきっかけに、同市と連携協定を締結している関西大学および、同市で活動実績のある関西学院大学が事業計画を提案した。同市で検討の結果、両大学が共同で栄町商店街内の空き店舗を利用したコミュニティ・スペースを設立することとなった。

解決すべき課題

- (1) 商店街空き店舗の増加



関関COLORS 5周年イベントの様子



「池-1グランプリ」で
優勝した池炭バーガー

夏のサカエマツリの様子

大学の役割

2010年に商店街と関西大学および関西学院大学の学生の連携によって運営する「関関COLORS」が、池田市栄町商店街内に店舗を正式オープンした。地域コミュニティの中心となることを目指してコンテンツを展開し、現在は子ども預かりや地域住民と連携したイベントなど、幅広い活動を行っている。具体的な活動内容は以下のとおり。

- (1) 「COLORS★KIDS」(子ども預かりサービス)
毎週水曜日17時～19時の間、小学生を対象に子ども預かりサービスを提供。工作や料理・遊びなどの様々なコンテンツを通して、子ども達・地域の方々・学生のつながりを作っている。
- (2) 「COLORS★SCHOOL」(チャレンジスペース事業)
地域に根付いた個人の方や団体に店舗を貸し出し、その広報や運営の手伝いを関関COLORSが行う。
- (3) 「COLORS★HOLIDAY」(イベント事業)
商店街や地域の方々とコラボレーションした、地域のにぎわいを創出するイベントの企画・運営。

成果

- (1) 2013年8月、池田市発祥の日清食品株式会社・チキンラーメンを素材として、池田市の新しい名物メニューを作る「第2回池-1グランプリ」(池田青年会議所主催)が開催され、関関COLORSが地元のベーカリー(ブーランジェリー・アンティープ)の店主の協力を得て制作した「池炭(いけたん)バーガー」が、2代目優勝メニューに選出された
- (2) 2015年2月、池田市が「学生による空き店舗活用事業功績者表彰式」を開催し、「関関COLORS」16名に感謝状が授与された
- (3) 2015年2月、池田市リサイクル協会がささやかであたたかい活動を続けている団体へ表彰する式を開催し、関関COLORSに「池田のともしび賞」が授与された
- (4) 池炭バーガーが、2015年10月に鳥取県で開催される日本最大規模のご当地バーガーの祭典「とっとりバーガーフェスタ」に大阪府代表として出場決定

今後の展望

- (1) 収支を改善し、補助金に頼らない活動
- (2) 活動が地域活性化にもたらした効果についての関係性評価

学生団体の紹介



関関COLORS (かんかんカラース)

大阪府池田市栄町商店街にある空き店舗を運営・活用し、地域活性化をめざす学生団体です。関西大学・関西学院大学のメンバーで構成されています。

次代を担う若き中堅・中小企業 経営者／後継者が学びあう場 “関西大学 次世代経営者塾”

人材開発やマーケティング、会計、外部資金による研究開発など、どの企業でも共通の課題をテーマとして、各社の発表と討議を行います。



塾生による自社課題の発表の様子

テーマを決め、先進的な取り組みを進める
他社を訪問する企業見学会の様子

活動の概要

目的	短期的目標・・・関西の中堅・中小企業の次世代経営者や後継者の、経営に関連する各種分野でのスキルアップと、参加企業の異業種間のネットワーク構築 長期的目標・・・理工系だけでなく文系分野においても企業の経営革新に寄与し、関西大学をハブとした企業ネットワークを構築すること
参加メンバーおよび役割	関西中堅・中小企業若手経営者・後継者（年間の参加企業を10社程度に絞り、1年間かけて学びあう） 関西大学商学部准教授 岡照二／同学部准教授 西岡健一・・・講師 関西大学社会連携部産学官連携コーディネーター・・・企画
活動場所	関西大学うめきたラボラトリ（ナレッジキャピタル（グランフロント大阪内））等
活動期間	2007年度～（継続中）（原則、1年度完結型のプログラム）
費用	参加企業からの年会費及び、関西大学社会連携部産学官連携センター事業費

連携の経緯

関西大学は、1964年（昭和39年）に「工業技術研究所」を開設して産学協同のパイオニアとして活動を開始して以来、地元大阪を中心とする企業の技術相談や共同研究・受託研究のニーズに应运してきた。特に大阪府下の中小企業集積地の一つである八尾市等で、ものづくり企業共通の課題であるバリ取りやバリの発生の抑制・除去に関する研究会を地元の30社以上の企業と理工系研究者とで立ち上げ、商品の品質や安全性に重要な影響を及ぼすバリに対して、地域と大学が連携して研究に取り組んでいる。このような企業との連携の中で、総合大学の強みを活かし、理工系だけでなく文系分野においても企業の経営革新に寄与することを可能にすべく事業化されたのが「関西大学次世代経営者塾」である。

同事業は、2007年度に“関西大学企業経営者塾「熱思会」”を実施し、さらに有意義な学びの場としてプログラムを再構築した取り組みとなる。

KANSAI UNIVERSITY 企業経営者・後継者の方、経営幹部の方対象

関西大学次世代経営者塾 第6回オープンセミナー

30代・40代の若手経営者及び経営幹部へ！
本セミナーに参加して、ビジネスマインドの向上と新たなビジネスチャンスの発見を！
若い経営者のエネルギーとバイタリティーで停滞する日本経済を元気にする！
熱い思いを胸にした皆様の参加をお待ちしております。

プログラム

**「マーケティングとオープン・イノベーション
：顧客との価値の共創」** 18:00 - 19:00
関西大学 商学部 教授 川上 智子

オープン・イノベーションという言葉をよく耳にするようになった。情報通信技術（ICT）の発達によって、オープン化は技術的に容易になり、インターネット上で顧客と価値を共有する機会も増えてきた。しかし、自社が保有することによってマネジメント上の課題は残存する。本講座では、オープン・イノベーションをマーケティング論の観点から捉え、企業がオープン化戦略を実行する際に直面する課題について、事例を紹介しながら検討していく。

「経済学的なものの見方と制度設計」 19:00 - 20:00
関西大学 社会学部准教授 小川 一仁

大組織での「密やかな」八百長と企業間の長期取引制度が同じ課題で説明できたり、株式市場での売買が個人投資家と同じ課題で説明できたり、異業種とゴルフパートナーが同じ課題で説明できたり、経済学は一言も聞かない事務員が、同じ課題を持っていると指摘することを得意としている。本講座ではこのような経済学的なものの見方を紹介し、企業課題となっている「制度設計」がどのように行われているのかの一掃をご紹介する。制度設計は人事評価・給与制度設計など企業においても大変重要なトピックである。本講座を受講することで、企業内の制度改革に新しい知見を提供できれば幸いである。

日時：H27年1月28日(水) 18:00~20:00
場所：グランフロント大阪 ナレッジキャピタルタワーC
9階「関西大学うめきたラボラトリ」
参加費：2,000円
定員：40名(先着順)
主催：関西大学 社会連携部 産学官連携センター



講演の様子（写真左：社会学部 小川一仁准教授）
（写真右：商学部 川上智子教授 ※当時）

塾生以外にも広く開放する
オープンセミナーのチラシ（2014年度開催）

解決すべき課題

- (1) 経営者の経営能力や意欲が業績等へ影響しやすい、中堅・中小企業の若手経営者育成や後継者の育成

大学の役割

異業種間の交流だけでなく、30代、40代を中心とする若手経営者・後継者が自社が抱える経営課題や目標を塾生同士で共有し、ディスカッションを行うことで経営マインド、経営スキルの向上を相互に図ることができている。このディスカッションは本学の若手教員がリードして「本音、本気」の討議を行っており、同じ年代の同じ悩みを持つ者同士が集まることにより、塾生からは業界を越えた人脈形成にも役立っている、と評価をいただいている。大学の若手教員がディスカッションをリードすることで、経営の現場目線だけでなく学術的な根拠を基にした分析や新たな視点の提供が可能である。そして、教育・研究・社会貢献に努め、社会に寄与する使命を持った大学が「ハブ」となることで、他企業の経営者と悩みを共有し合い、課題の解決策について互いにアドバイスや意見を交換し合える場が構築できている。また、関西大学の校友ネットワークを活用し、上海での関大OBの企業訪問・交流も実現し、グローバルな視点での学びも実現している。

成果

- (1) 参加者同士で異業種コラボ商品のアイデアを出し合うなど、本学をハブとした経営者ネットワークが構築され、交流と学びの場となった
- (2) 研究者や他企業のメンバーからアドバイスを受けたことで、これまで人事評価の明確なシステムがなかった参加企業が人事評価制度を新たに作成・導入したり、新たな人事研修を取り入れて自社の人材開発制度を見直した企業があった

現場の声

・受講者アンケートより

大学の先生から、経営に関するお話を聞く機会を毎回頂けた事に感謝致します。

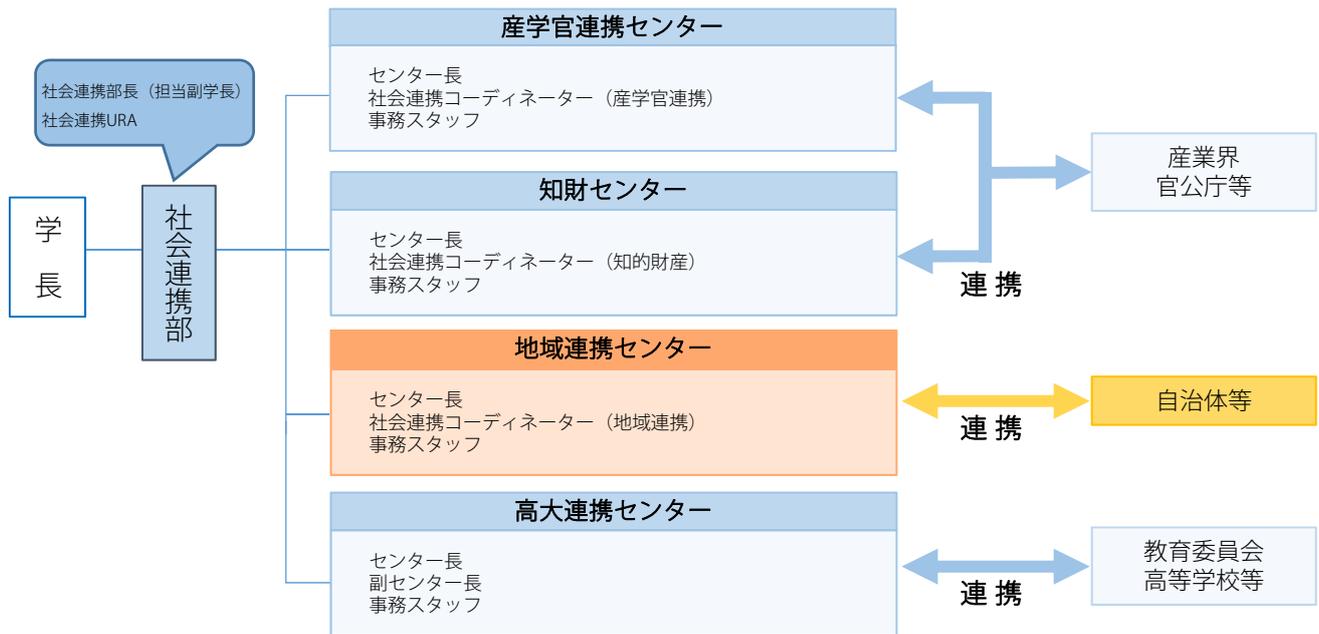
異業種の方と1年近くにわたって交流でき、他社の抱える悩みや経営に関する考え方などを学べたことは貴重でした。

関西大学の産学官連携コーディネーターとのネットワークができ、新たな製品開発に関することなども相談しやすくなった。

参加企業以外にも、テーマを持って他企業を見学し、経営戦略やこれまでの道のりなどを聞くことができた。

「企業見学会」は、今後とも是非継続してほしい。

地域連携センターの位置づけ



関西大学との地域連携に関するQ & A

Q：「地域連携事業」とは何ですか？

A：「地域連携事業」とは、地域が持つ課題の解決に向けて、関西大学の教育研究活動の一環として研究シーズ（技術、ノウハウ、アイデアなど）を活用しながら、地域（自治体や企業等）と関西大学（教員、学生、事務局）が一緒に取り組んでいく事業を指します。

Q：大学との連携や地域活性化について相談したいのですが。

A：関西大学地域連携センターにご相談ください。その際、連携に必要な情報（課題、目的、連携内容、費用、役割分担等）について、お伺いいたします。

Q：連携をお願いしたい先生に直接連絡をしても良いですか？

A：連絡先を公開している教員については、直接ご連絡いただくことも可能です。地域連携センターにご相談くださいましたら、課題解決に最適なシーズ、事業内容を一緒に検討いたします。

Q：事業に係る費用の負担はどうなりますか？

A：必要経費についてはご負担をお願いします。ここでいう「必要経費」とは調査や事業実施のための交通費等を想定していますが、事業の内容によって必要となる経費は異なりますので、事前の打ち合わせにてご相談ください。予算化が難しい場合は、国の機関や外部団体の補助金を獲得することも検討可能です。

Q：誰でも大学と連携することはできますか？

A：関西大学では、連携事業の運営管理を継続的に行っていただくため、原則、自治体や企業等との連携を対象としています。

Q：先生を紹介してもらっても、うまく連携し事業実施まで進めるかが心配です。事業実施に至らなくても大丈夫でしょうか？

A：双方の合意に至らない場合は、相談の段階で中止しても構いません。

Q：「地域連携事例集」に掲載されている事業以外の内容でも連携は可能ですか？

A：「地域連携事例集」に掲載している事業は、関西大学で行っている事業の一例です。各地域の課題に応じて事業を検討いたします。

関西大学 学部・研究科一覧

変革の時代に求められる大学を、学部・大学院での教育を通して具現化。有用な人材と人類文化の担い手を養成します。

高度化・複雑化が増すばかりの現代にあって、社会環境の変化に即応し、総合的にものごとを検証できる広い視野と判断できる健全な価値観の育成が本学教育の目的です。「学理と実際の調和」を教育理念に、各学部では本質の理解と十分な基礎力の蓄積、問題解決につながる応用力と柔軟な思考力の醸成を推進。情報化・国際化に対応する新しいリテラシーの獲得、実験・実習やディベートなどの実践的なカリキュラムによって、真に有用な人材の育成に

力を注いでいます。

関西大学は2014年に人間健康研究科を設置し、13の学部と15の大学院研究科(3専門職大学院含む)、1つの別科を擁する総合大学です。また、2015年に連合教職大学院(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科)の設置が認可され、本学は、連合参加大学として参画しています。今後もさらなる発展に向け、常に躍動する、活気のある大学として邁進しています。

		入学定員	所在地		
学部	法学部	法学政治学科	715	千里山キャンパス	
	文学部	総合人文学科 英米文学英語学専修 英米文化専修 国語国文学専修 哲学倫理学専修 比較宗教学専修 芸術学美術史専修 フランス学専修 ドイツ学専修 日本史・文化遺産学専修 世界史専修 地理学・地域環境学専修 中国学専修 教育文化専修 初等教育学専修 心理学専修 情報文化学専修 映像文化専修 文化共生学専修 アジア文化専修	770		
	経済学部	経済学科 経済理論専修 金融・会計専修 公共経済専修 歴史・社会専修 産業・企業経済専修 国際経済専修 統計・情報処理専修	726		
	商学部	商学科 流通専修 ファイナンス専修 国際ビジネス専修 マネジメント専修 会計専修	726		
	社会学部	社会学科 社会学専攻/心理学専攻/メディア専攻/社会システムデザイン専攻	792		
	政策創造学部	政策学科 国際政治経済専修 政治・政策専修 地域・行政専修 組織・経営専修	270		
		国際アジア法政策学科	80		
	外国語学部	外国語学科	165		
	人間健康学部	人間健康学科	330		堺キャンパス
	総合情報学部	総合情報学科	500		高槻キャンパス
	社会安全学部	安全マネジメント学科	275		高槻ミューズキャンパス
	システム理工学部	数学科/物理・応用物理学科/機械工学科/電気電子情報工学科	501		千里山キャンパス
	環境都市工学部	建築学科/都市システム工学科/エネルギー・環境工学科	325		
	化学生命工学部	化学・物質工学科/生命・生物工学科	347		
大学院	法学研究科	博士課程前期課程 法学・政治学専攻	50	千里山キャンパス	
		博士課程後期課程 法学・政治学専攻	10		
	文学研究科	博士課程前期課程 総合人文学専攻 英米文学専修 英米文化専修 国文学専修 哲学専修 芸術学美術史専修 日本史学専修 世界史学専修 ドイツ文学専修 フランス文学専修 中国文学専修 地理学専修 教育学専修 文化共生学専修 身体文化専修 映像文化専修	96		
		博士課程後期課程 総合人文学専攻 英米文学専修 国文学専修 哲学専修 史学専修 ドイツ文学専修 フランス文学専修 中国文学専修 地理学専修 教育学専修	19		
	経済学研究科	博士課程前期課程 経済学専攻	45		
		博士課程後期課程 経済学専攻	5		
	商学研究科	博士課程前期課程 商学専攻	35		
		博士課程後期課程 商学専攻/会計学専攻	10		
	社会学研究科	博士課程前期課程 社会学専攻/社会システムデザイン専攻/マス・コミュニケーション学専攻	30		
		博士課程後期課程 社会学専攻/社会システムデザイン専攻/マス・コミュニケーション学専攻	9		
	総合情報学研究科	博士課程前期課程 社会情報学専攻/知識情報学専攻	80		高槻キャンパス
		博士課程後期課程 総合情報学専攻	8		
	理工学研究科	博士課程前期課程 システム理工学専攻 数学分野 物理・応用物理学分野 機械工学分野 電気電子情報工学分野	275		千里山キャンパス
		環境都市工学専攻 建築学分野 都市システム工学分野 エネルギー・環境工学分野			
		化学生命工学専攻 化学・物質工学分野 生命・生物工学分野			
		博士課程後期課程 総合理工学専攻	57		
	外国語教育学研究科	博士課程前期課程 外国語教育学専攻	25		
		博士課程後期課程 外国語教育学専攻	3		
	心理学研究科	博士課程前期課程 認知・発達心理学専攻/社会心理学専攻	12		高槻ミューズキャンパス
		博士課程後期課程 心理学専攻	6		
		専門職学位課程 心理臨床学専攻 (臨床心理専門職大学院)	30		
	社会安全研究科	博士課程前期課程 防災・減災専攻	15		
		博士課程後期課程 防災・減災専攻	5		
	東アジア文化研究科	博士課程前期課程 文化交渉学専攻	12		千里山キャンパス
		博士課程後期課程 文化交渉学専攻	6		
	ガバナンス研究科	博士課程前期課程 ガバナンス専攻	15		
博士課程後期課程 ガバナンス専攻		3			
人間健康研究科	修士課程 人間健康専攻	10	堺キャンパス		
法務研究科 (法科大学院)	専門職学位課程 法曹養成専攻	40	千里山キャンパス		
会計研究科 (会計専門職大学院)	専門職学位課程 会計人養成専攻	70			
別科	留学生別科 日本語・日本文化教育プログラム進学コース	100	南千里国際プラザ		

事例掲載教員索引

	教員氏名	ふりがな	所属学部	ページ	
あ	荒木 孝治	あらか たかはる	商学部	28,30,150	
	井浦 崇	いうら たかし	総合情報学部	82,106	
	池田 佳子	いけだ けいこ	国際部	154	
	池田 真生子	いけだ まいこ	外国語学部	62	
	石井 康博	いしい やすひろ	文学部	6	
	石垣 泰輔	いしがき たいすけ	環境都市工学部	144	
	石原 敏子	いしはら としこ	外国語学部	64	
	板野 智昭	いたの ともあき	システム理工学部	122	
	今井 裕之	いまい ひろゆき	外国語学部	62	
	内田 慶市	うちだ けいいち	外国語学部	66	
	宇都宮 浄人	うつのみや きよひと	経済学部	20	
	江川 直樹	えがわ なおき	環境都市工学部	126,128,130	
	岡 絵理子	おか えりこ	環境都市工学部	50,132	
	小川 一仁	おがわ かずひと	社会学部	38	
	荻野 正樹	おぎの まさき	総合情報学部	106	
	奥 和義	おく かずよし	政策創造学部	50	
	奥貫 麻紀	おくぬき まき	教育推進部	154	
	小田 伸午	おだ しんご	人間健康学部	68	
	か	亀井 克之	かめい かつゆき	社会安全学部	108,110,112
		河原 秀久	かわはら ひでひさ	化学生命工学部	124,148,150
北詰 恵一		きたづめ けいいち	環境都市工学部	134	
木下 光		きのした ひかる	環境都市工学部	136	
草郷 孝好		くさごう たかよし	社会学部	40	
楠見 晴重		くすみ はるしげ	環境都市工学部	46	
久保田 賢一		くぼた けんいち	総合情報学部	84,86,88,90,92	
久保田 真弓		くぼた まゆみ	総合情報学部	84,86,88,90,92	
倉田 純一		くらた じゅんいち	システム理工学部	124	
黒上 晴夫		くろかみ はるお	総合情報学部	84,86,88,90,92,94	
黒田 一充		くろだ かずみつ	文学部	8	
越山 健治		こしやま けんじ	社会安全学部	120,156	
さ		坂野 昌弘	さかの まさひろ	環境都市工学部	138,140
		佐々木 保幸	ささき やすゆき	経済学部	22
	島田 広昭	しまだ ひろあき	環境都市工学部	142	
	城下 英行	しろした ひでゆき	社会安全学部	114	
	菅 磨志保	すが ましほ	社会安全学部	120	

	教員氏名	ふりがな	所属学部	ページ
た	大門 信也	だいもん しんや	社会学部	42
	竹内 理	たけうち おさむ	外国語学部	62
	徳山 美津恵	とくやま みつえ	総合情報学部	100,104
な	永田 尚三	ながた しょうぞう	社会安全学部	116,118
	中谷 伸生	なかたに のぶお	文学部	48
	西岡 健一	にしおか けんいち	商学部	32,150
	西山 哲郎	にしやま てつお	人間健康学部	70,72
は	橋口 勝利	はしぐち かつとし	政策創造学部	52,54,56,58
	橋本 行史	はしもと こうし	政策創造学部	60
	長谷川 伸	はせがわ しん	商学部	34,36
	林 勲	はやし いさお	総合情報学部	96
	林 武文	はやし たけふみ	総合情報学部	48
	林 直保子	はやし なほこ	社会学部	44,48
	原田 純子	はらだ じゅんこ	人間健康学部	74
	Alexander Bennett	あれきさんだー べねっと	国際部	154
	堀 雅洋	ほり まさひろ	総合情報学部	104,106
ま	松下 光範	まつした みつのり	総合情報学部	106
	松本 渉	まつもと わたる	総合情報学部	98,100,102
	宮崎 慧	みやざき けい	商学部	102
	本西 泰三	もとにし たいぞう	経済学部	24
	森 隆男	もり たかお	文学部	10
	森 朋子	もり ともこ	教育推進部	156
や	安田 忠典	やすだ ただのり	人間健康学部	76,78
	山縣 文治	やまがた ふみはる	人間健康学部	80
	山住 勝広	やまずみ かつひろ	文学部	12
	山出 和弘	やまで かずひろ	化学生命工学部	124
	山本 敏幸	やまもと としゆき	教育推進部	152,154
	山本 秀樹	やまもと ひでき	環境都市工学部	146
	与謝野 有紀	よさの ありのり	社会学部	44,46,48,50
	良永 康平	よしなが こうへい	経済学部	26
	米田 文孝	よねだ ふみたか	文学部	14
	わ	渡邊 智山	わたなべ としたか	文学部

千里山キャンパスのご案内



阪急電鉄千里線
関大前駅



お問い合わせ先

関西大学
社会連携部 地域連携センター

〒564-8680
大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL：06-6368-1339

FAX：06-6368-1247

E-mail：syakairenkei@ml.kandai.jp

HP：http://www.kansai-u.ac.jp/renkei/



関西大学 社会連携部 地域連携センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 Tel. 06-6368-1339
www.kansai-u.ac.jp

(無断転載を禁ず)